

エデン・クロニクル

墮とされしものたち

機械仕掛けの神

秋月あきら

満天に輝く星々の下で、星よりも強い輝きを放つ巨大都市工
デン。

魔導と科学の融合により生まれた魔導炉により、膨大なエネ
ルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給
される。この都市は決して眠らない。

小規模なビルが立ち並ぶビル街。ビルの屋上から下を眺めると、深夜だというのに車の往来が多い。

月が見守るビルの屋上にいる、闇に溶ける黒衣を身に纏った長身の男性。彼は美しく長く伸びた黒髪を風に靡かせながら、ビルからビルへと飛び移り、執拗なまでに追いかけて来る敵の追撃から逃げていた。

黒衣の男の後ろを追って来るモノは人ではなかった。キメラ生物だ。

キメラ生物とは、異なつた遺伝子型が身体の各部で混在する生物のことで、ここ数十年の間に研究が急速に進み、生物兵器として世界規模で爆発的に創られた。しかし、キメラ生物の危険性や倫理の問題で、国際条約によつてキメラ生物を創ることを禁止され、この国もその条約に加盟しているのだが、この国の裏社会は世界トップのキメラ生物の研究と生産を誇っていた。キメラ生物に追われている男の名は鴉。しかし、それ本当の名ではない。なぜ彼が鴉と呼ばれるようになったかには多くの説がある。常に黒衣で身を包み、その黒衣を着て彼が戦う姿が黒く巨大な魔鳥のように見えたからなどとも言われるが、彼が鴉と呼ばれた真実の理由を知る者は極僅かだった。

鴉の足が広いビルの屋上で止まった。彼はただ逃げていたわけではなかった。敵と十二分に戦える広い場所を探していたのだ。

鴉を追って来たキメラの姿は人間のようないろいろな形をしているが、衣服を全く着ていないその身体は緑色をしており、毛の一本も生えていなかった。

キメラの数は全部で三匹だ。腕をだらりと地面に垂らし、皆、ギロリとした光る双眸で鴉を睨みつけていた。

月光を浴びた鴉の横顔は美しかった。長く伸びた鼻梁も、血のように赤い唇も、そして、蒼白く透き通るような肌も、人間のものとは思えないほどに美しい。しかし、表情に乏しく無表情だった。

夜風が屋上に吹き込み、鴉の纏う黒衣が大きく揺れ動く。

三匹のキメラが鴉の周りを取り囲んだ。だが、鴉は全く動かずに静かに目を瞑った。

人間では決して出すことのできないスピードで二匹目のキメラが鴉の横から襲い掛かり、残りの一匹は蛙のように飛び上がり鴉の頭上を狙った。

鴉が目を開けたと同時に黒衣が激しく広がり、うねるようにして“黒衣”が三匹のキメラを次々と叩き飛ばした。それはまるで黒衣が“生きている”ような光景だった。

地面に叩きつけられたキメラが立ち上がる前に鴉は飛翔し、その途中で鴉は自らの腕と手を硬質化して、ダイヤモンドよりも硬い鋭い爪へと変えた。

天から舞い降りた鴉は餌を狙う魔鳥の如くキメラの顔を驚ぶかみにした。だが、獲物を掴んだ魔鳥は再び天に昇ることなく、そのままキメラの頭を固いコンクリートの地面に激しく叩きつけて潰した。

地面にしゃがみ込む体勢になっている鴉の背後から、二匹のキメラが襲い掛かって来たが、鴉が円舞を踊るように立ち上がると同時に、黒衣が大鎌の役目を果たした。

二匹のキメラの頭は呻き声をあげることできぬまま宙を舞い、地面に鈍い音を立てながら落ちた。

薔薇の蕾のような鴉の唇から言葉が発せられた。

「刺客か……!？」

ビルを飛び交う人影を鴉は見た。鴉の瞳は夜でも昼間のように遠くまで見通すことができる。

ビルと飛び交う人影は、黒を基調とした生地白いレースをあしらったゴシック調のドレスを着ている。そして、手には月の光を反射する巨大な鎌を構えている。

鴉のいるビルの屋上にやって来たドレス姿の人物。歳の頃は、十七、八ほどで、小柄な身体に腰の辺りまで伸びた美しい黒髪が風に靡いている。そして、顔はとても可愛らしい中に妖艶とした雰囲気を持っていた。

「早く逃げた方がいいと思うよお」

可愛らしく空気のように澄んだ声であったが、鴉はその裏にある性格の悪さを瞬時に感じ取っていた。

何から逃げた方がよいのか？ 鴉はそれを問うまでもなかつ

た。

ドレス姿の人物の後ろからヒトのような生物が追って来た。その生物に目を血走っており、とても正気とは思えない形相をしている。

鴉が呟く。

「躲せ」

「わおっ!」

ドレス姿の人物は声を荒げながら、後ろからの攻撃を避けた。そして、すぐに持っていた大鎌を勢いよく後ろに振る。

ビュンという音とともにドレス姿の人物を追って来たモノの首が宙を舞う。だが、これでは死なない。それは、このドレス姿の人物も、そして、鴉も知っている。

斬られたはずの首の付け根から新たな首が生える。もちろん、斬り飛ばされた首は地面に転がったままだ。

強靱な再生力を持つ怪物を前にドレス姿の人物が声を荒げる。「もあ、さつきから斬っても斬ってもキリがないよあ!」

ドレス姿の人物の横を黒い風が擦り抜ける。それは鴉だった。鴉は硬質化させている手を怪物の胸に突き刺して何かを握りつぶした。手が引き抜かれ、激しく血が吹き出ると同時に怪物は地面に倒れた。

「灰は灰に、塵は塵に、永遠など無いのだ」

鴉がそう呟くと同時、地面に倒れている怪物は灰と化してしまった。

自分がいくら斬っても倒せなかった相手を意図も簡単に倒さ

れて、ドレス姿の人物は驚愕した。

「あなたはいつたい!？」

「鴉とヒトからは呼ばれている」

ドレス姿の人物も鴉のことは知っていた。裏社会では有名人の名だった。

「あなたが鴉なの？ やっぱり噂どりのチヨ一美形のお兄様。アタシの名前は夏凜、ヨロシクね」

自己紹介をして黒い手袋した手を差し出した夏凜であったが、鴉の手は出されることはなく、彼は夏凜を無視するように歩き出した。

「アタシを無視する気!? これでもチヨ一一流の美人トラブルシューターなんだけども」

トラブルシューターとは簡単に言うと“何でも屋”のことで、迷子の仔猫探しから怪物退治までありとあらゆる仕事をこなす職業のことである。そのトラブルシューターの中でも夏凜の實力はこの街で五本の指に入るほどであり、その容姿はこの街で三本の指に入るほどの美しさを持ち合わせていた。だが、鴉にとっては関心のないこと。

隣のビルに飛び移ろうとする鴉の前に夏凜が立ち塞がる。

「待つてたら、さつきはありがとあ。で、今度お礼の意味も込めて一緒に食事に行かない？」

夏凜は自分よりも美しい存在に目がなく、鴉の姿を一目見た瞬間に恋に落ちてしまった。

鴉は隣のビルに飛び移るのを止めただが、その瞳は天を向い

ている。

夏凜も“それ”を見た。長い光の尾を引く彗星。彗星が飛来して来るなどというニュースはなかったはずだ。つまり、この彗星は観測所に見つからずに突如、宇宙から降って来たことになる。

墮ちて来た彗星の大きさはそれほど大きくはないが、その光は“それ”自体が輝きを放っているように眩しい。もしかしたら、彗星ではなく兵器という可能性もある。だが、鴉は“それが何であるか知っていた”。

「……新たなラエルだな」

鴉の建つビルの屋上からよく見える輝き。宇宙から墮ちて来たモノの光がよく見えたのは、その大きさからではなく、近くにあったからだった。

光り輝く物体は猛スピードでこの都市に落下した。落下地点から閃光と共に爆発音が深夜の街に鳴り響く。

大きな爆発ではあったが、その規模は半径二〇〇メートルを吹き飛ばした程度で済んだ。だが、この街にクレーターができしまったには違いなかった。

墮ちて来た物体のことを知っている素振りを見せた鴉に、目を丸くした夏凜が何かを尋ねようとしたが、鴉の姿はすでになかった。

「あれっ？ もあ、連れない男性だなあ」

可愛らしい仕草で顔を赤らめた夏凜はすぐに気持ちを切り替えて、先ほど片付いた仕事の報酬を貰いに行くことにして、三

○メートルほどある高さのビルから地面に飛び降りた。

巨大都市の光と闇

繁栄を続ける都市の影である象徴の一つと言えるのがスラム街。アンダーグラウンドな世界にのみ許された、人々の放つ猥雑な価値観と逞しさ。そこに都市の裏の顔が存在している。

スラム街の一区間は ホーム と呼ばれ、そこでは“表よりも”非合法なモノが多く売られ、二十四時間いつでも売春婦たちが歩き回っている。そして、スラムの地下では新興宗教集団や可笑しい実験をする組織などが根城としている。

スラムの一角にあるとある廃ビルには悪霊が住み着き、スラムの人々でも決して近づかない場所がある。そのビルの中に鴉は棲んでいた。

電気もない真つ暗な闇の中で鴉は身を潜めていた。鴉がこのビルに住み着くようになったのは三週間ほど前のことである。それ以降、ここにいた悪霊たちは何処かに逃げてしまった。それでも、ここに集まる邪気に惹かれて度々悪霊が現れることがある。

蒼白く輝く物体に照らされ、鴉の顔が妖艶と映し出される。輝く物体は相手の大きさを知らぬ愚かな悪霊であった。

全く動くことのない鴉を見て、ヒトの顔を持った悪霊は大きな口を開けて鴉を呑み込もうとした。だが、悪霊は鴉に触れる瞬間、霧のように掻き消されてしまった。格が違い過ぎるのである。

目を瞑る鴉の耳に人間の足音が聴こえて来た。鴉の超感覚には、それが小柄な人間であることがすぐにわかった。

鴉は瞼の上に淡い光を感じて目を開けた。

「私に近づくなと何度も注意をしたはずだが、それでも君はここに来る」

ランプを持った子供の衣服は汚らしく、幼い顔をしている。

この子供の名はファリスと言い、スラムで暮らす十二歳の少女だ。

「だつて……」

三日前にこのビルに迷い込んだファリスは鴉と出会った。最初に鴉の姿を見たファリスは恐怖を覚えたが、それ以上に鴉の美しさに目を惹かれた。だが、その美しさには翳があった。

ファリスは異質な存在である鴉に興味を抱いた。

二日目まではファリスが一方的に鴉に話しかけていたが、さすがに三日目ともなると話題がなくなってしまった。

鴉は決してファリスのことを無視しているわけではなかった。口数は少ないが返答はしてくれる。だが、その返答は一言で終わってしまったために会話が続かないのだ。

ファリスは鴉の横に壁に寄りかかりながら座った。

「昨日の爆発見た？」

昨晩この街に堕ちて来た光を見た者は多い。そして、激しい光と爆音を聞いて目を覚ました者も多い。そして、テレビなどのメディアは大々的にそのニュースを取り上げている。

鴉は静かに口を開いた。

「知っている」

「あたしは落ちて来るのは見なかったんだけど、大きな爆発で目を覚ましたの。ラジオで聞いたんだけど、半径二〇〇メートルくらいのクレーターができただけで、落下して来た物体は見つからなかったんだって」

落下現場からは落下物の破片すら見つかっていない。そんなことは通常あり得ないことだ。

ファリスの持つて来たランプの光が弱まり出した。

「あつ……」

消えゆくファリスの声と共にランプの光が消えた。辺りは暗闇に包まれる。

自分の身体すら見えない暗闇の中で、ビルの外まで出るのは至難の業である。ファリスは困り果ててしまった。

「どうしよお。 わあっ!？」

暗闇の中で急にファリスの身体が宙に浮いた。そして、闇の中から声が聞こえた。

「外まで送って行く」

ファリスの身体を持ち上げたのは鴉であった。

静かな闇の中に鴉の足音が響き、ファリスは鴉の首に腕を回してしがみ付いた。

体温は感じられなかった。鴉の首元はとても冷たく、まるで血が通っていないように思えた。

ビルの出口から強い光が差し込む。ここでファリスの夢は醒める。もう少しファリスは鴉に抱かれていたかった。

鴉はゆっくりとファリスを地面に降ろした。

「私に関わるな、君は君の世界で生きる」

鴉はファリスの背中を優しく押して外に送り出そうとした。だが、ファリスの足は動くことはなかった。

光を背に受ける黒い人影。

「探したぞ、鴉”よ”」

黒い人影の声は男のものだった。

黒い厚手のローブに付いた頭巾を頭にすっぽりと被っていることと、逆光によって顔は全く見えない。しかし、鴉はこの人物のことを知っていた。

「ルシエだな？」

鴉はファリスを自分の後ろに押し込め、ルシエに詰め寄った。ルシエの顔は鴉に優るとも劣らない美しい顔だった。そう、鴉と同じ雰囲気を感じ出す、この世のものとは思えない崇高さを兼ね備えていた。

ファリスは心の底からルシエに脅えた。ルシエから鴉と同じモノを感じる。だが、鴉とは全く違う威圧感がある。

鴉の後ろの隠れながらもファリスはルシエから目が離せず、足は小刻みに震えていた。足が震えるのはルシエのせいだけではない。鴉からも殺気は発せられているのだ。

「何が目的で落ちて来たのだ？」

鴉は知っていた。昨晚この都市に飛来して来たモノがルシエであったことを。

空からの墮天者のことを鴉たちは「ラエル」と呼んでいた。

「鴉よ、ここが地上 “人間たちの大地” か？」

「ここは “人間たちの樂園” だ」

静かに冷たく鴉はそう言い放った。だが、それをルシエが嘲笑う。

「フンツ……ここは我々ソエルの為に神が創られた牢獄だ！

余は天から煌く都市を見下ろした。それはまさに樂園を夢見る者たちが造り上げた虚像の幻想都市だった」

この言葉に鴉は目を閉じては空を仰いだ。その表情は哀しげだった。

鴉は知っている 空の先に広がる闇が無限でないことを……だが、天の広さは鴉にとつて無限に広がるに等しいものだった。

「我々が再び神への反逆を企てぬ為の楔だ」

「確かに……だが、今や、天で聖水を造ることが可能な時代となった。ノエルにもう価値は無い」

ルシエはそう言うのと黒いローブを脱ぎ捨て、背中に巨大な漆黒の翼を生やし、空気を激しく仰ぎながら大きく広げた。その姿は圧巻であった。まさに闇の王と言っても過言ではないだろう。

激しい風がビルの中に吹き荒れ、鴉の身体を揺さぶり長く伸びた髪を靡かせるが、彼は動じることなくルシエの瞳を見据えた。

「ルシエよ、だから天から落ちて来たのか？」

「そうだ、これは神への反逆だ。鴉よ いや、天では輝ける

称号を持つていた気高き戦士よ。貴公は自分をこの地上ノリスに墮ノエルとした天人ソエルたちが憎くはないのか？」

「私はこの地上ノリスで己の罪を……」

ルシエは鴉の言葉を遮った。

「鴉よ、余は知っているぞ。貴公が無実の罪を着せられたことを 策略に陥れられたことを 余と共にこの地上ノリスの支配者に成ろうではないか！」

「断る」

静かな一言ではあつたが、その言葉は何よりも意味のある、鴉がこの地上ノリスで生きて来た時間の重みを持つていた。

「そうか……ならば、余にとつて貴公は脅威でしかない。どうする鴉、余と戦うか？」

「ルシエ……」

鴉は手を硬質化させて戦闘に備えた。だが、ルシエは鴉に背を向けて歩き出した。

「今はまだその時ではない。だが、余の邪魔をすることがあれば、鴉、貴公とて余の敵と思え」

漆黒の翼を羽ばたかせ墮ラエ天者ユエルは輝く天に羽ばたいた。その際、彼は大きくこう叫んだ。

「天から墮ちた時にルシエの名は 命の書 からその名を消された。余の名はゾルテ！」

ゾルテ その名は古の時代にこの世界の人間たちに信じられていた闇の魔王の名。ルシエは今、その名を継いだのだ。

ファリスは何が起きたのか全くわからなかった。今の二人の

会話も理解できなかった。ただ、わかることはルシエが鴉の敵であることだけ。

自分の後ろで脅えるファリスに鴉は冷たく言い放った。

「今あった出来事は忘れる。そして、今後一切私に決して近づくな。これ以上、私と関われば命がないと思え」

動けずにいるファリスをこの場に残して、鴉は深い闇の中へ溶けてしまった。

ファリスは最初からわかっていた。鴉から死の匂いを感じ、鴉の近くにいれば自分にも死が降りかかることがわかっていた。しかし、それでも鴉に対する興味や好奇心が先立ってしまった。だが、ルシエを前にしてファリスは自分の考えが甘かったことを悟った。ホームで生き抜いて来たファリスですら、ルシエを見ているだけで身体が震えた。次元が違う生き物であることを本能的に感じ取ったのだ。

ファリスは鴉に会うことを止めて自分の家に戻ることにした。

スラム街にも格差があり、テントが密集する地区やプレハブ小屋が密集する地区、ファリスの住む地区は“比較的”治安がよく、魔導炉からのエネルギー供給も行き届いている。

鉄板を何枚も無造作に貼り付けたような小屋の一つにファリスは入った。これがファリスの家だ。

家の中は四平方メートルほどで、拾って来たテーブルやソファに修理途中のテレビなどが乱雑に置いてある。ファリスはこの家で三歳年上の兄と二人で暮らしている。

昼間の間ファリスの兄であるザックはジャンクショップで働き、夜からファリスは兄と入れ違いでレストランに働きに行く。だが、今日はザックの仕事が休みで一日中家に中にいた。

ザックは工具類を床に広げ、つい先日拾って来たテレビ修理をしていた。

「ただいまー！」

テレビの修理に集中しているザックは顔を上げずに何も言わなかった。そんなことなどファリスは気にしない。ザックは何か集中していると周りが見えなくなるのだ。きつと、ファリスが帰って来たことにも気づいていないに違いない。

床に落ちている雑誌を拾い上げたファリスはそのままベッドに横になった。

広げた雑誌のページにはファリスの住む大都市エデンの観光マップが載っていた。料理のおいしい店や流行のブティックや武器専門店など、ありとあらゆる情報が載っているが全てファリスには無用な物でしかなかった。ファリスの収入ではこの雑誌に載っているような店にはいけない。だから、こんな雑誌を見てしまうのだ。

ファリスの目がファッションを紹介しているページで留まった。羨ましくないとさえ言えれば嘘になるが、これも自分にも不要なもの。スラムで暮らすには生きる最低限のものがあればいいのだ。

ため息をついたファリスは雑誌を投げ飛ばした。

投げ飛ばされた雑誌はザックにぶつかった。

「いてっ！ ……なんだ、帰って来てたのか」

「遅い、遅い。泥棒が入って来ても気づかないでしょ？」

「どうせこの家には盗むものなんてないから平気だって」

それもそうだとファリスは思っただけで再びベッドにゴロンと寝転がった。

ザックは分解していたテレビを元の形に戻して、プラグをコンセントに差し込んで電源スイッチをオンにした。

二三型液晶ディスプレイに画像が映し出される。

「イェーイ！ 付いたぜ。ファリス、テレビが付いたぞ！」

歓喜するザックは声を張り上げてファリスを叩き起こした。

ゆっくりと目を開けたファリスは気だるそうに身体を起こして、ザックに腕を引っ張られながらテレビの前に座らされた。

「テレビなんて電気代かかるだけじゃん」

「そんなこと言うなよ、テレビの電気代なんて大したことないだろう」

「リモコンはないの？」

「リモコンは落ちてなかった」

「ふん」

電気代がかかると言いながらもファリスは興味津々でテレビのチャンネルを回しはじめた。

ローカルテレビ局のニュース番組でファリスとザックの目が留まった。生放送のニュース番組に映し出されている映像はファリスたちの住むスラム三番街の映像だった。

大企業の一つがスラム三番街を取り壊して歓楽街に造り替え

るといふニューズ。このスラムに住む者たちは誰も聞いたことのないニューズだった。

画面に映し出される重機類の数々。その中には対キメラ生物用の兵器まであった。

ニューズの映像に向かってザツクは声を張り上げた。

「なんてこった!? 奴らは力づくで俺たちを」

大きな音によってザツクの声が掻き消された。

地面が揺れ、重機の動く音に混じって怒り狂う人々の声が聞こえて来る。

ファリスは血相を変えて家の外に飛び出した。

外ではすでに建物の取り壊し作業がはじめていた。

ドラム缶型のボディにドリルアームを装着した小型ロボットたちが壁に穴を開け、ブルドーザーが人々をひき殺す勢いで走り回っている。

スラムに住む人々には市民権がない。そこに住む人々はまるで塵のように扱われ、多少の非合法的行為の適応も暗黙のうちには許されてしまう。

ドラム缶型のロボットがドリルの回転音を立てながらファリスの家の取り壊しを開始する。

「止めてよ！」

ファリスはドラム缶型ロボットのアームにしがみつくが、人間の力など及ぶはずがなく、振り回されるようにしてファリスは投げ飛ばされてしまった。

「イタタタ……」

尻を擦りながら起き上がったファリスは、再び自分の家を壊そうとするドラム缶型ロボットに飛び掛かろうとしたが、それを万能ベルト装着したザックが止めた。

「俺がどうにかするから下がってろ！」

ザックはベルトから工具を抜いて、ドラム缶型ロボットの背中を開けて配線をいじりはじめた。やがてドリルアームは緩やかに停止して、ドラム缶型ロボットは完全に止まった。だが、喜ぶのはまだ早い。辺りにはまだまだ数え切れないほどのロボットたちが忙しなく動いている。

建物を構成していた鉄板がもとの鉄屑に戻り、人々の抵抗は空しく終わっていく。

所々から爆発音が轟き、火の手が上がっている場所もある。スラムに住む人々がついに銃器で応戦に出たのだ。

これでは大型のキメラ生物が街で暴れた時と同じで、まるで戦争のような状況になってしまった。こうなってしまうてはファリスに成す術なく、流れ弾などに当たらないように物陰で身を潜めているしかない。

鉄の壁の後ろに身を潜めていたファリスとザックであったが、ザックは熱戦放射銃を構えて飛び出して行こうとした。

「俺も行って来る！」

「待つてザック、危ないから止しなよ」

「自分のホームが滅茶苦茶にされて黙ってられねえよ」

ザックはファリスに腕を掴まれたが、それを強く振り払って駆け出して行ってしまった。

「ザック……」

ファリスは兄の名前を呟くが、自分にできることは兄の安否を祈るのみ。

相手が武器を持って攻め入れれば、それこそ相手の思う壺であった。抵抗するスラムの人々に対して、ついに対カメラ用の兵器が投入された。

ユニコーン社の造り出した対カメラ用兵器“YJ参型”は腰を据えた人間が膝を曲げたような形をしており、ベースは手足のある全長三メートルほどのヒト型ロボットであるが、ゴツゴツとしたボディをしているために、もはやそれは岩のようにも見える。

ジャンクショップのオヤジがタバコを銜えながら、対戦車用バズーカをYJ参型に向かつて撃ち込んだ。

轟々と音を立てながら発射された弾はYJ参型に見事命中して、辺りは砂煙と硝煙に包まれ視界が覆われた。

銃声に反応してザックが叫ぶ。

「オッサン危ねえ！」

ジャンクショップのオヤジをザックは突き飛ばした。オヤジのいた場所にはバルカンによって空けられた穴が無数に広がっていた。

立ち込めていた煙が治まり、その中から無傷のYJ参型が姿を現した。それと共に四つのキャタピラ型の足に四角い箱を乗せたようなボディの乗り物が現れた。この新たに現れた乗り物は通称ヒッポーと呼ばれる乗り物だ。

ヒッポーの屋根の上には大層な髭を生やした体格のいい軍人風の男が立っていた。

「ガハハハハハ、思い知ったか屑どもが！」

大口を開けて馬鹿笑いをしているこの男の名はハイデガー。

ユニコーン社の社長である。

ユニコーン社は重機類の開発から販売に加え、民間の警備会社としての名は世界でも通っているほどの大会社である。

今回、スラム三番街の人々の退去と建物の取り壊し、そして歓楽街の建設計画を打ち出したのはキャンサー社であり、ユニコーン社はその処理を委託されたのだ。

ユニコーン社の兵器を前に戦力の差は明らかだった。だが、スラムの人々は命に代えても ホーム は守り抜く。

銃声が鳴り響く中、ファリスは物陰で頭を抱えて震えていた。「負けるに決まってるのに……」

負けることはわかっていた。そうわかっているファリスですら ホーム から逃げ出すようなことをしなかった。自分たちが生きていける場所はここしかない。

ファリスの肩が誰によって掴まれた。

「……っ!？」

顔を上げたファリスが見たものは最新型のコンバットスーツを着たユニコーン社の戦闘員だった。手にはハンドライフルを持っている。

「大人しく投降すれば危害は加えない」

「嫌っ！」

ファリスは戦闘員に制止を振り切って無我夢中で走り出した。足元にハンドライフルの弾が警告として打ち込まれるが、それを無視してファリスは走った。

逃げたファリスを戦闘員は追うことはない。目的はあくまでスラム三番街に住む人々が退去することにあつて、ファリスをわざわざ追つて仕事を増やすまでもない。

戦闘員から逃げたファリスは瓦礫の山を踏み分けて廃ビルの近くまで来ていた。

突然の爆風。ファリスは腕で顔を覆いながら地面にしゃがみ込んだ。

腕の隙間から見える廃ビル。そのビルが大きな音を立て、砂煙と共に倒壊していく。

「ああっ!？」

ファリスは愕然とした。今、目の前で倒壊したビルは鴉が寝床としていたビルだったのだ。

あんな爆発に巻き込まれて人が生きているはずがない。だが、ファリスは鴉が生きているのではないかと思つた。鴉の見た目は人間だが、内に秘めた人間ならず力は人間のものではない。

裏社会では鴉の名は知れ渡っているが、ファリスはそれを知らない。鴉が戦うところを見たわけでもない。ただ、それでも鴉が普通の人間ではないことはわかつた。鴉は美しい魔人だ。瓦礫の中から巨大な闇が出現した。それは闇色の衣だった。

ハリケーンの巻き起こす風が目に見えるならば、あのような動きに違いない。

闇色の衣が渦を巻き辺りに散乱していた瓦礫を激しく吹き飛ばし、中から黒衣を纏った男が現れた。

日の光を浴びる男の顔は妖々しいまでに蒼白かった。

ビルの周りにいた重機やロボットに取り付けられていたセンサーが黒衣の男を捕らえた。そう、それは巨大都市エデンの魔鳥 鴉だった。

近くにいた機械を操作するオペレーターには鴉が敵であるか味方であるかわからなかった。だが、鴉が脅威であることはすぐにわかった。

オペレーターの背負っている機械からキーボードとディスプレイパネルが飛び出し、オペレーターは自分の前に来たキーボードに打ち込みをはじめた。それはこの場にいる機械たちへ出した鴉の攻撃を命令であった。

はじめにドラム缶型ロボットがドリルアームで鴉に襲い掛かる。

ドラム缶型ロボットの数は四機。四方方向から連携して襲ってくる。だが、このロボットは工業用に過ぎない。鴉にとってはただの鉄屑に過ぎなかった。

一機のロボットに向かって全速力で走った鴉は目にも留まらぬ速さでアームを掴んだ。回転するドリルの根であるアームを掴んだのだ。

アームを掴んだ鴉はそのまま回転しながら遠心力に任せて口ポットを放り投げた。

ドラム缶型ロボットが別のドラム缶型ロボットに激しく激突

し、大きな爆発と共に炎の中に消えた。

鴉のことを挟み撃ちにしようとする二機のドリルアームが、ストリートパンチのように繰り出される。

黒衣を羽ばたかせ舞い上がる魔鳥　鴉。その下では二機のドラム缶型ロボットが同士討ちをして爆発を起こしていた。

オペレーターは額から冷たい汗を垂らして、一目散にこの場から逃げ出した。そして、オペレーターの制御がなくなったロボットたちは停止した。

地面に舞い降りた鴉の元へ物陰からファリスが駆け寄る。

「だいじょうぶ鴉？」

「問題ない。それよりも、何が起きているか簡潔に説明しろ」

鴉がファリスに対して質問を投げかけたのはこれが初めてであつたが、ファリスは全くそれに気づかなかつた。

「ユニコーン社がここに住む人たちを追い出そうとしているの！」

「ユニコーン社か……なるほど、やり方が手荒い」

鴉の視線はスラム街の住居などから立ち上がる煙を見ていた。

黒衣を翻した鴉は戦闘が起きているスラム街とは逆の方向に歩き出そうとした。

「待つて、行っちゃうの！　助けてよ、あなた強いんでしょ、あたしたちのこと守ってくれてもいいじゃん！」

鴉は無言のまま立ち去ろうとしたが、ファリスは鴉の腕を強く掴んだ。

「お願いだから助けてよ！」

少し涙ぐんでいるファリスだが、鴉の反応はとても冷たいものだった。

「今ここで奴らを追い払っても次がある。毎日毎日奴らを追い払うくらいならば、怪我人の多く出ないうちに立ち去るのが身のためだ」

「ヤダよ、ここはあたしのホームなんだから、他に行く場所なんてない！」

「……………」

鴉の瞳がファリスの瞳をじっと見据えた。ファリスは決して目を放さなかった。

しばらくして鴉が自分の腕を掴むファリスの手を魔法のように優しく解き呟いた。

「安全な場所にいる」

鴉はファリスをこの場に残して風のように走って行った。その向かう方向はスラム三番街居住区　ファリスの家がある場所だ。

その場にいた者たちは黒い風が次々と重機やロボットたちを壊していくのを見た。それはあまりにも一瞬の出来事で、まるで白昼夢を見ているようであった。

爆発で燃え上がる景色の中に陽炎が立っていた。

揺らめく闇色の影。その中に浮かぶ蒼白い顔。そう、それは美しき魔人の顔であった。

予期せぬ強敵の出現にハイデガーは狂喜した。彼の中に流れ

る血が沸き立ち、全身が喜び震える。まさか、ここで鴉に出逢えるとは……。

「ガハハハハ、鴉、鴉、鴉ではないか！ 久しいぞ、久しいぞ、まさかこの地上で逢えるとは思っても見なかった。貴様がラエルとなったという噂は真であったのだな、ガハハ！」

「久しぶりだハイデガー元將軍」

無表情であった鴉が失笑を浮かべた。

ハイデガーは鴉の元部下であったが、今は互いに昔の地位を剥奪されている。今や二人とも罪人であるラエルでしかないのだ。

ヒッポアの屋根に立っているハイデガーは機体の中に乗っているオペレーターに命じた。

「スラムの制圧はどうでもいい、奴を奴を全精力を上げて殺すのだ！」

対キメラ用兵器YJ参型が三機、鴉を取り囲んで左腕に装着されているバルカン砲を構えた。

「撃て、撃つのだ！」

ハイデガーの合図と共にYJ参型のバルカン砲とヒッポアの両脇に装着されているバズーカ砲が発射された。

避ける間もなく放たれた弾は鴉に命中して辺りに砂煙が舞う。さすがの鴉もこれでは無傷とは言えまい。だが、次の瞬間、黒衣が波のように広がり中から無傷の鴉が現れた。黒衣が弾を全で防いでしまったのだ。

YJ参型が三機同時に鴉に襲い掛かる。

YJ参型の右手は人間の手のような構造になっており、その手で鴉を掴もうとするがなかなかうまくいかない。

鴉は俊敏な動きで相手の攻撃を躲す。

「これも鉄屑だな」

硬質化させた鴉の腕がYJ参型のボディにめり込んだ。

腕を抜かれ穴から火花が散る。そして、停止。鴉はYJ参型を一撃で仕留めてしまったのだ。

あとの二機も同じ方法で倒せる。機体の頭脳であるコンピュータを破壊すれば機体は停止する。わかりやすい原理であった。

襲い来る二機のYJ参型の掌に装着された穴から光の粒子が発射された。それは科学と魔導の融合が生み出した魔導砲であった。

渦を巻く蒼白い光を鴉は紙一重で躲した。鴉が先ほどまでいた場所には直径五メートル、深さ三メートルほどのクレーターができてしまっている。

クレーターは赤く光り、まだ高い熱を帯びていることがわかる。魔導砲はそのエネルギーから、物体を砕く前に消失させてしまうのだ。

バルカン砲を避けつつ、鴉はバルカン砲を撃っていないYJ参型と間合いを詰める。

鴉がYJ参型と眼前まで間合いを詰めると、YJ参型の右手が鴉の顔に向けられた。それは魔導砲を放つ構えだった。

身を翻した鴉はYJ参型の腕を掴んで、その腕をもう一機の

Y J 参型に向けた。

次の瞬間、光り輝くエネルギーの塊がY J 参型のボディを貫き溶かしてしまった。ボディの中心を溶かされたY J 参型は腕を足だけを残して地面に崩れ落ちた。

Y J 参型の腕をまだ掴んでいる鴉はすぐさま鋭い爪でY J 参型のボディを貫いた。

襲い来るY J 参型を鴉は簡単に仕留めてしまった。

最後の一機から腕を抜いた鴉を見てハイデガーが怒りを露わにする。

「なかなかだ、なかなかやるな鴉！」

「機体の最も頑丈な場所に頭脳を設置しては、そこを壊してくれと言っているようなものだ」

「さすがだ、さすがだぞ輝かしい称号を持つ 輝星の君

アズエル！」

「その名はすでに 命の書 から消されてしまった。茶番は仕舞いだ、貴様自ら来るがいい」

静かな挑発にハイデガーは乗った。この時をハイデガーは待ち侘びていた。

「ガハハハ、俺を昔の俺と思うなよ。今の、今の俺の力を持つてすれば貴様とて敵うまい」

「さて、それはやってみなくてはわからない」

「いいぞ、いいぞ、相手に申し分はない」

ヒッポールの屋根から地面にハイデガーを降りると、地面に乾いた土が砕けた。

鴉とハイデガーに一騎打ちがはじまることにより、周りで動いていたロボットや戦闘員、そしてスラムの住人の動きが止まってしまった。

静寂に誰しも嵐が巻き起こることを感じていた。

ハイデガーはごつごつした指を鳴らし、首を回して柔軟をはじめた。それを見たユニコーン社の戦闘員たちは物陰でカメラを回す報道陣に規制をはじめた。

埃を舞い上げる風が鴉の黒衣を靡かせる。

先に仕掛けたのは鴉であった。

天に舞い上がった魔鳥は黒い翼を広げ、地上に鋭い爪を向けた。

落下する鴉の爪はハイデガーの眼前で止められた。

強い力で掴まれている鴉の腕はぐるりと捻り回され、鴉は捻れた方向に身を任せて宙を回転しながら身体をしなやかに曲げてハイデガーの顔面に蹴りを喰らわせた。

顔面に衝撃を受けたハイデガーはよろめき、鴉の腕を掴んでいた力を緩めた。その隙に鴉はハイデガーとの間合いを取る。

そして、すぐに地面を蹴り上げて鴉へ鋭い爪をハイデガーに向けた。

血の出た口元を舌で拭ったハイデガーは腰元から銃を抜き撃ち放った。

樂園フューエの技術を似せて作った銃からは雷光に似たビームが放たれ空気を焼いた。

雷光は直線的に幾度も曲がり相手を翻弄する。そして、速度

を上げて一直線に鴉に向かう。

硬質化させた鴉の左手が雷光を受け止めようとした。だが、左手は鴉の身体をその場に残して後方に持っていかれ、身体から引きちぎられた。

血飛沫が鴉の左肩から止め処なく吹き出る。

鴉は表情を変えない。そして、やがて血は止まった。

ハイデガーの眉が少し上がった。

「ガハハハ、血を止めることが精一杯か？ そうなのだな、そうなのか鴉！」

「……………」

「そうか、そうか、それが貴様の力か。だが、なぜケトウールをしない？」

「その問いに答える口を持ち合わせてはいない」

黒衣が翼のように広がり、鴉はハイデガーに向かって行った。

再び雷光を吐き出すハイデガーの銃。

二度目はない。鴉は雷光の軌道を見切っていた。

鴉は柔軟な身体を捻って雷光を軽やかに躲す。しかし、その瞬間、鴉の表情が変わり後ろを凄じ勢いで振り返った。

後方で人家が吹き飛んだ。その鉄片が近くにいた人の身体に突き刺さり、即死させた。

死んだ人間は小さな子供であった。

次の瞬間、鴉の移動速度が上がった。

ハイデガーは目を大きく見開いたが、避けることができなかつた。

鋭い爪がハイデガーの首を跳ね飛ばす。だが、ハイデガーの指は引き金を引いていた。

放たれた雷光は鴉の胴体を貫き。鴉は地面に倒れた。

乾いた地面の上に転がるハイデガーの首。そして、血を吹くハイデガーの身体。だが、やはり血は止まった。それどころではない。

「ガハハハハハハ、なかなかやるな鴉。おもしろい、おもしろいぞ、俺の血が沸き立って来るのがわかるぞ！」

ハイデガーはそう“言いながら”自分の首を拾って元の場所に固定させた。

急速な早さでハイデガーの首の傷は完治してしまった。首が飛んだ形跡など見つけれない。

ハイデガーは首を回して柔軟をすると、口元を少し吊り上げて地面に倒れる鴉を見下ろした。

「血をだいぶ使ってしまった。少しケトウールが必要だな」

ハイデガーは物陰に隠れていた青年に気が付き、鴉はハイデガーが何をしようとしているのかに気が付いた。

物陰に隠れていた青年は猛スピードで自分に近づいて来るハイデガーに熱線銃を無我夢中で放った。だが、手が震えてどうにもならない。

鴉はハイデガーの行動を止めようとするが重傷を負った身体が動かない。

ハイデガーは青年の身体を高く持ち上げた。

陽光に照らされる青年の顔はザックにもものだった。

「は、放せ！」

熱線銃を握り締める手はガタガタと震え、ザックは熱線銃を地面に落としてしまった

鴉は何もできなかった。握り締めた拳からは血が出ていた。

陽光の下。持ち上げられた青年の身体から、紅が滴り落ちていた。

物陰にいたファリスは見てしまった。ハイデガーがザックの首筋に噛み付いたのを。

長い時間、ハイデガーはザックの首に噛み付いたまま動かなかった。

ザックの首から流れ出す紅い血。そう、ハイデガーは吸血行為ケトールをしているのだ。

やがて満足に血を吸ったハイデガーはザックの身体を塵として放り投げた。ハイデガーにとって“ノエル”は糧でしかない。蒼い顔をしたザックは二度と動くことはなかった。

ファリスは言葉を失い呆然と立ち尽くした。出来事が範疇を超えている。何が起きたのかわからない。

ハイデガーは口元を拭って、地面に倒れる鴉の元へゆっくりと向かった。それを見たファリスはすぐさまザックの元に走りよった。

地面に倒れているザックは身動き一つしない。息もしていないし、脈もない。

否定したい出来事であった。だが、事実だ。ザックは死んでいる。

多くの死を見てきたファリスであったが、まさか兄が死ぬとは思っていなかった。

「いつか人は死ぬものだが、それでも死が本当に訪れるなど思っ
ていなかった。」

「あーあ、あたし独りになっちゃった」

悲しいはずなのに笑ってしまった。自分でもなぜ笑っているのかわからない。涙が次から次へと零れ落ちて来るのに笑ってしまうなんて、もう、わからない。

ファリスは地面に落ちていた熱線銃を拾い上げ、そして、構えた。

高熱の赤い光が熱線銃から放たれると同時に、小柄なファリスの身体が反動で動き、腕も上に持ち上げられてしまった。だが、高熱の光は的を焼いた。ファリスは反動を計算に入れて最初から下を狙っていたのだ。

改造を施されていた熱線銃の威力はとんでもないもので、それはハイデガーの右肩を消失させるほどだった。

恐ろしい形相で振り向いたハイデガーの顔を見てファリスは身を強張らせた。だが、すでに指は二度目の攻撃をしていた。

高熱の光はハイデガーの身体を掠めた。今度は外してしまっ
たのだ。

震えるファリスの元へ歩み寄るハイデガーの右肩が徐々に再生していく。

「気の強い小娘の血は特に美味い」

舌なめずりをした醜悪なハイデガーがファリスとの距離を縮

めていく。

ファリスは逃げられなかった。まるで蛇に睨まれた蛙のように、食われることを悟って身動きができなくなってしまった。

死んでもいいとファリスは思った。そうしたら、可笑しくて笑ってしまった。

「殺したいなら殺せば、もう、いいよ……」

笑いながら立ち尽くすファリスの頬にハイデガーのゴツゴツした手が触れる。

ファリスは死を受け入れようとした、だが。

「ファリスに手を出さないでもらおう」

ファリスは見た。醜い顔をしたハイデガーの後ろに、美しい黒鳥が翼を広げていた。

背中から突き刺さった爪はハイデガーの“核”を突き、ファリスの身体のすぐ前で止まっていた。

ハイデガーの口から血が吐き出され、ファリスの顔を紅く彩った。

「ガハハハハ、残念だな鴉。俺の“^{クック}核”は移動してある」
「何っ!？」

驚いた表情を見せた鴉はハイデガーの身体から引き抜いた。その手には銀色に輝く機械が握られていた。

突如、背中に漆黒の翼を生やしたハイデガーは猛スピードで天に上昇した。その反動で巻き起こった風によりファリスは身体のバランスを崩し地面に手を突いた。

手に握っている物体が何であるか悟った鴉は、それをハイデ

ガーに向かつて力強く投げ飛ばした。そして、すぐにファリスの身体に覆いかぶさり、黒衣が鴉とファリスの身体を包み込んだ。

鴉にできることはファリスだけを救うことだった。

次の瞬間、上空が激しく輝き、鼓膜を破る爆音を共に大爆発が起こった。

爆発音以外は何も聞こえなかった。爆発は“全て”を奪ったのだ。

爆発は地上を抉り、紅蓮の炎が遥か遠くの地上にまで降り注いだ。

その現象は消失だった。凄まじい破壊力の中で、人々は泣き叫ぶことも許されぬままに死んで逝った。それは不幸か幸福か？

スラム三番街居住区の大部分を消失させた爆発は巨大都市工デンに住む多くの人々の目に留まった。その規模は昨晚、謎の飛来物がつくったクレーターよりも大きい半径二五〇メートルであった。

クレーターのほぼ中心でファリスは黒い物体に包まれていた。最初はそれが何であるか理解できなかったが、やがて黒い物体が自分の身体から離れ、鴉が姿を現した。だが、鴉は目を閉じており、そのまま背中から地面に倒れた。

何が起きたのか理解できなかったファリスであったが、すぐに倒れた鴉の横に跪いた。

「鴉、大丈夫!? 目を開けてよ！」

鴉は目を開けなかった。それどころか、いつもよりも顔を蒼い。その顔にファリスは兄を重ね合わせてしまった。

「死なないでったら！」

悲痛な叫びは届いていた。身体が自由に動かない。だが、もう少し時間が経てばしゃべるくらいはできるだろう。

この時、鴉を急激な渴欲を襲った。身体が燃えるように熱く、^{エイリス}聖水を欲している。

鴉は喉の奥から声を搾り出した。

「私から離れるのだ」

「えっ、なに？」

「行け！ 早くこの場を立ち去れ！」

怒鳴り声は震えていた。それは身体全身に伝わり、鴉の身体は寒さに凍えるように震えている。

「どうしたの、大丈夫？ ダメだよ、ほっとけるわけないじゃん」

「行くのだ！」

「でも きゃっ!？」

急に動いた鴉の身体がファリスを押し倒した。

「は……やく、逃げ……る」

早く逃げろと言われてもファリスの身体は地面に押しつけられ、その上には鴉が覆いかぶさっていた。鴉の行動は矛盾していた。

ファリスはわかってしまった。苦痛に歪む鴉の口元から長く伸びた糸切り歯が覗いていたのだ。

大きく開けられた鴉の口は今にもファリスの首筋に噛み付こうとしていた。だが、鴉の歯は大きな音を立てながら閉じられた。

鴉はファリスの上から素早く退いて地面に屈み、自分の首を力強く握っている。指の間から幾本もの紅い筋が流れ出ている。「治まれ！」

大声を出した後、鴉は自分の首から手を離し、荒い呼吸を何度もした。どうにか発作は治まった。だが、まだ聖水エイクスが足りないことには変わりなかった。

今にも倒れそうな足つきで立ち上がった鴉はゆつくりと歩きはじめた。その足取りはおぼつかず、まっすぐ歩いていなかった。

鴉の腕が誰かの肩に勝手に回された。この場にいるのはファリスしかいなかった。

「心配で見えられないよ」

「私に近づくな」

「ヤダ。だって、別に行くところないし、いつ死んでもいいよ、もう……」

この場でファリスのことを突き放さなければならなかった。だが、鴉はしなかった。

意識の朦朧とする鴉はファリスの肩を借りながら歩いた。それが何故か心地よかった。

二人はスラムを出ることにした。行き先はない。

短いスカートから覗く美脚が艶めかしく見るものを誘う。

彼女は地上^{ノリス}では葉月千歳と名乗っていた。

ソファーに座る千歳は短いスカートにスーツのジャケットを素肌の上から着ており、豊満な胸の谷間には大きなダイヤのネックレスが輝いている。

紅い液体の満たされたグラスを千歳は相手に差し出した。差し出された相手は妖艶たる美貌の持ち主で、昨晚この巨大都市エデンに墮ちて来た。その美貌の持ち主の名はゾルテ いか鴉の前に現れた男だった。

キャンサー社の一室で二人は杯を交わしていた。

グラスを受け取ったゾルテは紅い液体を口の中へと流し込んだ。

「懐かしい味だ。楽園^{アケエ}では一生呑めぬ味だな」

「この街ならいくらでも上質な聖水^{エイリス}が手に入るわよ。特にわたしが好みなのは処女の聖水^{エイリス}よ」

「聖水^{エイリス}は聖水^{エイリス}だろう。味に大差などあるものか？」

「楽園^{アケエ}に住む天人^{ソエル}たちは本物の聖水^{エイリス}の味も忘れてしまったのね、可愛そうに」

濡れた唇で妖しく微笑んだ千歳の口の中に紅い液体が流れ込んでいく。

千歳はわざと液体を口から零すように飲み、紅い液体が胸の谷間にポタポタと滴り落ちる。

グラスに入った聖水^{エイリス}を飲み干した千歳を見てゾルテは嘲笑った。

「地上は墮落している」

「だってわたしは墮天者よ。それにここはそういう者たちのために造られた鳥かごだもの」

「なるほど、そのとおりだ。だからこそ私の墮天者となったのだ。だが、私は墮されたのではない、自らの意思でこの地上に赴いた」

「地上を支配するため、楽園でのさばる天人を滅ぼすため、それはつまり神への反逆」

突然、窓の外から眩い光が差し込んで来た。差し込んで来たなどと言う生易しいものではなかった。窓の外から光が襲って来たのだ。

千歳は何事かと壁一面に広がった窓から地上を見下ろした。

最上階である三二階　高さは約一―二メートルの一室から見渡す巨大都市エデン。高層ビルの高さは年々高さを増していき、神をも恐れぬバベルの塔を思わせる。

人々は天まで届く巨塔を建設しようとしたのだが、神はそれを見て人間の行為は傲慢であるとして、建設が進まぬようにひとつだった言語を多くに分けて人間たちを混乱させ言葉を通じないようにした。高層ビルの建設は神への反逆ともとれるかもしれない。

千歳は嬉しそうに笑った。

「どの位のノエルが死んだのかしらね？」

「あそこは確か……」

千歳の横に立ったゾルテは巨大都市エデンにできたクレータ

ーを見ていた。その場所は都市の東に位置するスラム三番街の方角だった。

電話が鳴った。千歳はすぐに電話に出た。

千歳のデスクに取り付けてあるモニターに女性秘書の顔を映し出される。

《スラム三番街で謎の爆発が起こり、ユニコーン社のハイデガー社長と連絡が取れなくなりました。詳しい情報が入り次第、折り返し連絡いたします》

「いいわ、連絡しなくて。それよりもクレーターの埋め立てをして、今日から歓楽街の建設をはじめて頂戴」

《承知いたしました。それでは失礼いたします》

モニターの電源が自動的に切れた。

ゾルテはまだ窓の外を眺めている。そして、呟く。

「あの場所に鴉がいたのを知っているか？」

「あら、そうなの。どおりでハイデガーが派手にやったと思っ
たわ」

「ハイデガーが生きていると思うか？」

「さあ、わたしには関係ないことよ」

千歳はゾルテの腰に手を回すが、ゾルテは軽くそれを払い、天のその遙か先にある何処かを見つめた。

「なるほど、この都市を影で支配するドウ・ラエルたちに仲間意識はないか」

「大きな動きをするとヴァーツに目を付けられるわ。奴らはノエルが多少死のうが構わないみただけど、墮^ラ天^{エル}者同士の衝突

や反逆には厳しく目を光らせているわユニコーン社に仕事を委託したのはこのわたしだから、これ以上は首を突っ込みたくないわね」

あの爆発からしてハイデガーと鴉が衝突したのは間違いないだろう。しかも、あの規模だ。巨大都市エデンを統括する政府組織ヴァーツが動くことは間違いなかった。

ゾルテは不適に笑い部屋を出て行こうとした。

「ヴァーツの奴らに挨拶に行つて来る」

「待ちなさい、勝手な真似はしないで頂戴！ これからの計画を全て台無しにするつもり!？」

「私が墮天して来たことはすでに知れていることだ。ならば、奴らを少し煽つてやろうと思つてな」

「だから、勝手な真似はしないで！」

ゾルテは詰め寄つて来た千歳の腰を抱き寄せて口を塞いだ。

重なり合う唇と唇を離し、何も言えなくなつた千歳をこの場に残してゾルテは去つて行つた。

残された千歳は髪の毛をかき上げてため息をついた。そして、すぐに自分のデスクに座りどこかに連絡をする。だが、モニタ―には映像は映し出されず、音声のみの連絡だ。

「わたしだけだ」

《リリスか、何用だ?》

若々しい男の声がスピーカーの奥から響いた。

「ゾルテが政府に喧嘩しに行つちやつたわ。だから、M計画を早急に進めないと政府にバレちゃうわよ」

スピーカーの奥から失笑が微かに聞こえ、しばらく経ってから再びスピーカーの奥から声が聞こえてきた。

《強大な力を持つていようと、所詮は長い時を樂園アッフェで過ごした天人ソエルだな。この地上ノースが牢獄であることを理解してないらしい》

「全くよ、長い時を費やしたM計画が台無しにする気かしら」
《それがわかつているのならば、早くルシエを止めに行け》
ルシエとは樂園アッフェにいた頃のゾルテの名である。そして、リリスも同じ。それが千歳の名である。

千歳は返事をしなかった。

《行けと行つたのが聞こえなかったのか？》

「そういうのはわたしの仕事じゃないわよ」

《わかった、ルシエについては泳がしておこう。その間に君は引き続き Mの巫女 を探せ》

「了解。じゃ、またね」

千歳は電話を切り、深いため息をついた。あの男と話をすると疲れる。だが、全てはM計画遂行のため。

「支配者はひとりでいいのよ……」

千歳は妖艶な笑みを浮かべるとデスクの裏に備え付けてある隠しボタンを押した。

どこからかモーター音が聞こえ、千歳の座っていた後ろの壁がゆっくりと動きはじめた。そう、隠し部屋だ。

千歳は薄暗い部屋の中へ足を運んだ。そこは冷たい壁で囲まれており、静かな息遣いが複数聞こえてくる。

薄暗く、普通の人間にはよく見えないだろうが、千歳には見えていた。そこには複数の人間　年端も行かぬ少女がいた。それも皆、手錠を嵌められ、首輪から伸びた鎖は壁にしつかりと繋がれていた。

「さあて、今日は誰を頂こうかしら？」

千歳は品定めをはじめてひとりの少女の前に跪く。

「アナタにしましょう」

少女の顎を持ち上げた千歳はそのまま少女の唇を奪う。少女は抵抗する素振りも見せない。もう、泣き叫んでも無駄なことを悟ってしまっているのだ。それに、もう千歳に魅了されてしまっている。

千歳は少女の頬に舌を這わせ、そのまま首筋を舐めた。

少女の身体が一瞬苦痛に歪み、そして恍惚とした表情へと変わっていった。

天人は吸血行為を行うと同時に、相手を快楽に酔わせる“物質”を与えている。その“物質”はノエルの身体に突然変異を与えてしまう。だからこそ必要性がない限りは死を与えねばならない。

「もう、いらぬわ」

少女はまだ死んでいない。

ビクンと少女の身体が跳ね上がり、変化がはじまった。

腕が伸び、脚が伸び、胴体からも腕が伸びた。皮膚の色は褐色に変わり、顔についた五つの目玉が千歳を見据えた。その姿は蜘蛛と人間を掛け合わせたような姿をしていた。

怪物の胴体から伸びた手が千歳の首を絞めようとした。しかし、その手は千歳によつてもぎ取られ、大量の血が地面に吹き荒れた。

「美しくない娘は嫌いよ」

振り上げられた千歳の手が怪物の胴体にめり込む。そして、心臓を握り締め引き抜かれた。

血の滴る心臓を艶めかしく見つめた千歳はそのままかぶり付いた。

口から零れる血が千歳の身体を穢し、彼女は高らかに笑った。

夕方から雨が降って来た。それは天気予報でも言っていたことなので、往來を歩く人たちは出かける前に傘を持って家を出ていた。

この街に巢食う邪気のせい、魔導炉で造られているエネルギーのせい、結局のところは何かわからないモノのせいで、この都市の天気予報は外れることが多い。それでも、人々は傘を持って出かける。だが、この二人は最初から傘など持っていないかった。

雨に晒された二人は少し身体を濡らし、屋根のついたバス停で雨宿りをしていた。

ベンチに座りながらファリスは横に立つ鴉を見上げた。

「どこに行くの？」

「決まっていない」

「お金持つてる」

「持っていない」

「あたしたちの居場所ってどこにもないんだね……」

少し哀しそうに言ったファリスは俯いて黙り込んだ。

ファリスは父親を知らない。母親の顔も覚えていない。ファリスにとって家族と言えたのは兄のザックだけであった。そのザックも今はいない。

今、ファリスが頼れるのは鴉しかいなかった。鴉が何者であるのかファリスは知らない。だが、手の届く場所にいたのは鴉だけだった。鴉は差し出した手をとってくれたのだろうか？

鴉の横顔は何処か遠くを眺めていた。その鴉の表情を見るとファリスはなぜか哀しくなる。近くにいてるだけで、鴉も自分の独りぼつちのような気がした。自分と鴉の距離は遠い。

近くにいたのは鴉だけだった。だが、本当に鴉は信頼できる存在なのか。あの時だつてファリスは鴉に襲われそうになった。ファリスの中にある鴉への恐怖は消えることはない。

けれどファリスは鴉を必要としていた。

「あのね、鴉」

ファリスは鴉の横顔を見上げたが、鴉は横を向いたままだったので、ファリスは独り言のように話しはじめた。

「あいつと鴉って仲間っていうか、同じ生き物なんだね。鴉が人間じゃないのはわかってたけど、あたしのホームを奪ったあいつと鴉が同じ生き物だったのが、ちよつとシヨックだったかな……」

「……では、なぜ私に付いて来る。私の内にはハイデガーと同

じ呪われた血が流れている。私がハイデガーの前に現れなければ、君の大切なものを奪わずに済んだかもしれない」

「鴉はあたしたちを守るうとして戦ってくれたんだから……別に……鴉が、鴉が悪いわけじゃ……ない」

本当にそうだったのだろうか。鴉がいなければ、多くのモノを失わずに済んだのは事実かもしれない。けれど、鴉に悪意があったのではない。ファリスには鴉を完全に許すことはできなかった。

「私を恨むのなら恨むといい。それで君の気が晴れるのならばな」

「違う、鴉は悪くない！ 悪くないんだ！」

悪くないのはわかっている。だが、ファリスは多くのものを現実に失ってしまった。その想いをどこにぶつけていいのかファリスは戸惑っているのだ。

鴉は再び遠くを眺め、ファリスもまた俯いて黙ってしまった。やがて、バスがやって来た。何人かの人が降りて、バスを待っていた人々がバスに乗り込む。だが、二人がバスに乗ることはない。

今のバスから降りて来た人のひとりが鴉の前に立った。その人物は黒いドレス来た可愛らしい中に妖艶さを秘めた少女だった

ドレス姿の少女は鴉の顔をまじまじと覗き込んだ。

「運命的って感じね」

「……いつか会ったな」

鴉は記憶の片隅に在った少女のことを思い出す。巨大都市工
デンにゾルテが飛来して来た晩、鴉は彼女に出会っていた。確
かトラブルシューターをしている夏凜という人物だったと思っ
た

「アタシのこと覚えていてくれたの？ チョー嬉しい〜！」
はしゃいでいる夏凜の姿をフアリスは白い目で見ていた。

「誰この人、鴉の知り合い……あ、あ、思い出した！ この人
雑誌で見たことあるよ」

思わずフアリスは夏凜のことを指差して、大きな瞳をよりい
つそう大きくした。

「お嬢さん、アタシのことをご存知なの？ まあ、この街じゃ
あアタシのプリティぶりは有名で、ファンもいっぱいいるから
ね」

夏凜は可愛らしくフアリスにウィンクして見せた。だが、フ
アリスは怪訝な顔をした。

「でも、オカマなんでしょ」

「うっ……、うるさいなあ〜可愛いんだからいいでしょ！」

そう、それは夏凜を知る者の間では広く知れ渡った話である。
世間の人には女性の格好をした男として夏凜は認識されている。
雨が静まり、上空では強い風によって灰色の雲が流されてい
くのが見えた。

鴉はフアリスに一瞬目を向けて歩き出した。

「待ってよ鴉！」

勝手に歩いて行こうとする鴉の横にすぐさまフアリスが並び、

夏凜も同じように鴉の横に並んだ。

「そつちのお嬢さんは鴉の連れなの？」

「勝手について来ているだけだ」

この言葉にファリスは少し顔を赤くした。

「あたしは鴉の……そう、恋人、恋人よ」

一時的に夏凜の顔が引きつり、夏凜は確認のために鴉に聞いた。

「本当？」

「知らん」

肯定でも否定でもない答えが返って来てしまった。夏凜は少し嫉妬した。こんな子供に負けたくない。

「あ、あのさあ、ウチすぐそこなんだけど、ウチくる？」

「ねえ鴉、夏凜さんの家に行こうよ、お腹も空いちゃったし、何か食べたいなあ」

「アナタは別に呼んでない」

夏凜はファリスを鋭い目つきで睨み付けた。だが、スラム育ちのファリスはそのくらいのことでは怯まずに睨み返す。

二人に挟まれて歩いている鴉は無表情だった。

横道が見えて来たところで鴉の腕が引つ張られた。鴉が下を見ると、自分の腕に夏凜が腕を回し強引に横の道に誘導していた。

「アタシんち、こっちだから。アナタはついてこなくていいの！」

鴉が横を見るとファリスも自分の腕に腕を回していた。

「あたしと鴉はどこに行くにも一緒なの！」

「お子様は、さつさと家に帰りなさいよ！」

悪気があって言ったわけではなかった。だが、その言葉はフアリスを黙らせるのに十分な言葉であった。

急に黙ってしまったフアリスを見て夏凜は不思議な顔をした。「どうしたの？」

その口調は優しい口調に変わっていた。

フアリスは何も答えなかった。代わりに鴉が静かに口を開いた。

「彼女も一緒に君の家に行く」

「いいよ、別に。アタシの住んでるマンションは広いからいくらでも来いって感じ！」

夏凜が鴉の腕から自分の腕を放すと、代わりにフアリスは鴉の腕に絡めている自分の腕に力を入れた。

三人は無言で歩き、やがて夏凜の住まいである高級住宅街の一角にあるマンションに辿り着いた。

マンションの正面フロアには警備員が立っており、夏凜の姿を確認するや恭しく頭を下げて来た。夏凜もそれに応じて笑顔で手を振ってみせる。

夏凜がこのマンションに越して来たのは一ヶ月ほど前のことで、このマンションに越して来た理由は前に住んでいた部屋が敵に襲撃されて、近所に迷惑をかけてしまったために居づらくなってしまったので、このマンションに越して来た。

このマンションのセキュリティは夏凜が前に住んでいたマ

ンションより嚴重であるが、夏凜は少し面倒くさいと思っていた。

警備員の見守る中で夏凜は手袋を外して、その手をディスプレイに乗せ、顔の前にある機械に空いた穴を覗き込む。すると、指紋や体温のチェック、眼球のスキャンなどがなされ、本人ということが確認されたのちに扉が開く仕組みになっている。

左右に開かれた扉の中に夏凜が入っていく。

「二人とも早く、ぼーっとしていると扉が閉まっちゃうから」
ファリスは慌てて夏凜の後を追い、鴉は軽やかな歩調でファリスに続いた。

一階のフロアは住居ではなく、ジムやコンビニなどが設置されている。マンションの外に出なくとも十分生活ができるようになってきている。

高級マンションとは程遠い生活をしていたファリスは目を輝かしていた。

「スゴイ、なんで、マンションの中にショップがあるの!？」

「高級マンションだからねっ」

少し自慢そうに夏凜は言った。その言葉にファリスはすぐに顔を赤くして、そっぽを向いた。

「別に羨ましいわけじゃないからね、ちょっと、スゴいなあっ
て思っただけ」

「ふん」

薄く笑う夏凜は少しファリスを見下しているようだった。こんなところで夏凜はファリスになぜか対抗意識を燃やしていた。

エレベーターに三人が乗り込むと、どんどん上がっていく。夏凜の部屋は最上階の角部屋だった。

エレベーターのドアが開かれると、そこはガラス張りの壁で、巨大都市エデンが一望できた。

地上三五階の景色は壮大であるが、交渉恐怖症の人には辛い事実、ファリスはガラス張りの壁からなるべく離れて歩いている。

一方の壁がガラス張りになっている廊下を進み、角部屋のドアの前で夏凜の足が止まる。

「ここがアタシの部屋だよあん」

ドアに夏凜が手を掛けると、自動認証システムにより鍵が自動的に解除され、ドアが開かれた。

部屋の中では電話が鳴っていた。

夏凜はすぐさま受話器を取り、しばらくして不機嫌な顔をして受話器を置いた。

「この近くで怪物が暴れてるらしくって、応援要請されちゃってけど……どうしようかなあ」

夏凜は二人の客人を見て腕組みをした。

鴉はファリスの頭を軽く撫で、黒衣を閃かせながら踵を返した。

「君はここで待っている。私は彼と出かけて来る」

「アタシとお!？」

驚いた表情を浮かべる夏凜であったが、すでに鴉は部屋の外に出ている。

夏凜はうんざりした表情でファリスを見つめた。

「テキトーに部屋で寛いでて、お腹空いたら冷蔵庫の中に入っているもの食べて良いから。それから誰かが尋ねて来ても無視しちゃっていいからね。うんじゃ、大人しくお留守番しててね」

「えっ、え、あのさ……」

手を伸ばすファリスを尻目に夏凜は急いで部屋を出た。すると、鴉がドアを出てすぐのところ立っていた。

「早く行くぞ」

「あのさあ、なんでわざわざアナタが行くの？ アタシは今回の仕事、断る気満々だったし、別に仕事の依頼もされてないアナタが行くことないでしょ。まあ、怪物を退治したら懸賞金かなんかが貰えるけど、アナタは懸賞金目当てってわけでもなさそうだし」

鴉はなぜ戦い、何と戦っているのか？

「話は済んだか？ ならば先を急ぐぞ」

「なにそれ!? アタシの質問には何一つ答えない気？」

「人間の命がかかっている、だから私は行く」

「それって正義の味方ってこと？」

「私は正義の味方ではない。強いて言うのなら悪魔だ」

鴉は不敵に笑うとそれ以上は口を開かなかつた。

ビルの屋上からゾルテは下界を見下ろしていた。

「いい余興が見つかった」

その言葉はビルから凄惨な勢いで落ち、地面に当たる寸前に跳

ね上がり、その場で起きた爆発に吞まれて消えた。

車の屋根から屋根へと我が物顔でしなやかにジャンプする巨大生物。その姿は毛の長い白猫に似ているが、大きさは馬よりも大きく、猫とは言いがたい。

車の屋根が急にへこみ、中に乗っていた男が慌てて外に飛び出す。屋根に乗っている巨大猫に驚き身動きひとつできなくなる。次の瞬間、男は叫び声をあげるが、その声は大きな口の中で鳴き止んだ。

大きな首を巨大猫が振り上げると、辺りに血飛沫が舞い、アスファルトの地面を華やかに彩った。

逃げ惑う人々を都市警察に誘導され、ほとんどいない。だが、残念なことに巨大猫の近くにいる車に乗った人々は車の中で震えることしかできなかった。今、外に出れば巻き添えを喰うだけだ。

対戦車用バズーカ砲が巨大猫に発射される。常識のない人間は街中でバズーカ砲を撃つなどんでもないというが、大物のキメラ生物に拳銃で立ち向かうよりは常識のある行動だ。

空気を轟と鳴らすバズーカ砲を巨大猫は優雅なまでのジャンプで躲した。

跳躍する巨大猫は数多の銃弾を受けるが、その程度は傷にもならず、なったとしても驚異的な再生力で回復してしまう。

巨大猫は大きく鳴いた。それもただ鳴いただけではなかった。大きく開けられた口の中から渦巻く光が発射されたのだ。それはまるでレーザービームのように辺りを焼いた。

再び巨大猫にバズーカ砲が撃ち込まれるが、巨大猫はしなやかにジャンプして軽がると躲す。それによって後方の建物に大きな穴が空き、都民の税金がまた使われることになった。

これほどの大物のキメラとの戦闘は久しぶりで都市警察が手を焼いていると、空から誰かが舞い降りてきた。政府からの応援かと人々は思ったが、雰囲気が可笑しい。

漆黒の翼をはためかせ、風を纏い地上に降り立った美しき魔人。まさしく、それは魔王の貫禄を十分に兼ね備えている闇の王。

地上に降り立ったゾルテは自分を啞然と見ているノエルを見渡して嘲笑った。

「か弱いなノエルは、だからこそとても愛おしくも思える」
妖艶とした美しさを持つ男ゾルテが優雅な足取りで巨大猫に近づく。すると、巨大猫が腹を上に向けて喉を鳴らしはじめたではないか。

都市警察は巨大猫に銃口を向けながら息を呑んだ。威風堂々と悠然とした態度で美しきゾルテはなおも巨大猫に近づいていく。

誰もが目を見張った。ゾルテは膝を地面につき、巨大猫の首筋に噛み付いたのだ。

誰もがゾルテの行動が理解できずに頭を悩ました。だが、立ち上がったゾルテの口から血が地面に吐き出されたのを見て、ぞっとした。

口元を腕で拭ったゾルテは笑みを浮かべる。

「臭味があるな」

次の瞬間、巨大猫に異変が起こる。背中が開け黒い翼が生え、犬歯が伸び爪も伸び、巨大猫の身体は紅蓮の炎を纏い揺らめいた。

炎を纏う巨大猫　炎猫が身体を震わせると、辺り一面に炎の雨が降り注いだ。

一般人の退避は済んでいるものの、炎は街路樹を燃え上がり、アスファルトを焦がし、置き捨てられた車が炎上爆発する。この場に駆けつけた鴉は小さく呟く。

「人間外のエスか、少々厄介だな」

「エスって何？　ウイルスか何かの名前？」

小柄な夏凜が鴉を見上げて問うと、鴉は巨大猫の横で嗤うゾルテを指差した。

「あそこにいる翼を生やした男はソエル、人間ではない。そして、そのソエルがホストとなり、血を吸った相手を怪物にする。その怪物のことをエスという」

夏凜は少し考えた後、思いついたように手を叩いた。

「ヴァンパイアと血を吸われた人みたいなもの？」

「そういう伝説にもなっていたな」

鴉は苦笑しながら説明を続けた。

「ソエルもエスもヴァンパイアのように驚異的な再生力を持ち、弱点は身体のどこかにある核を壊すことのみ」

「十字架とか日の光とかは弱点じゃないの？」

「ソエルは日の光に弱い、長時間日に晒されていなければ問

題ないだろう」

夏凜は全身を黒衣に包まれた鴉を一瞬見てなにかを思ったが、あえてそれに関しては問うことを止めた。

腕を上げた夏凜の手にはいつの間にか現れた大鎌が握られていた。この大鎌は夏凜が別の場所に保管しておいたものをこの場に召喚コールしたものだ。

大鎌を別空間から取り出した夏凜を見て鴉は感嘆した。

「数少ない魔導士のひとりであったのか。ならば、あの化け猫を君に任せよう」

「可愛い猫を傷める趣味はないんだけどお」

「私はあのソエルと話をしてくる」

黒衣を翼のようににはためかせた鴉は疾風のごとく駆けていった。

道路に置き捨てられた車の上を翔け、鴉は黒衣をはためかせた。

覇気を纏うゾルテは自然な体勢で鴉を出迎え、微笑った。

「余の敵となるか鴉？」

「どうやらそのようだ」

鴉に表情はない。かつては友であったとしても、鴉は過去を捨てられた者だ。

「余に勝てるか？」

「勝たねばならん」

「そうか……」

一瞬うつむいたゾルテはすぐに顔を上げ、戦闘の構えを取る

と邪悪な笑みを浮かべた。

次の瞬間、ゾルテは地面を蹴り上げて鴉に襲いかかった。

ゾルテの右腕は ソード と化し、鴉の右手も鋭い爪と化していた。

振り下ろされた ソード は鴉の鋭い爪によって振り払われ、空かさず鴉のハイキックが繰り出される。

鴉の蹴りがゾルテに命中する瞬間、ゾルテの身体が黒い霧と化して消えた。

空気に溶けた黒い霧から声がする。

「嘆かわしい、余と肩を並べるほどの貴公が、ここまで墮ちていようとは！」

愁いを帯びた声が当たり木霊した。その声は空気を大きく振動させ、ビルの窓を割り、比較的近くにいた人々の鼓膜を破った。

黒い霧はやがてゾルテをつくった。

「鴉、もしや貴公はエイースを十分に撰っていないのではないか？」

「理性を保てるだけ撰っていれば十分だ」

鴉の言葉を聞いて頷いたゾルテは武器を構え何もせずにいる人間たちを指差した。

「なるほど、それが原因であるか。エイースを飲むのだ、そうでなければ余の相手は務まらないぞ」

「断る」

「強情な奴だ。貴公に何があつたというのだ？ なぜエイース

を拒む？」

「私に与えられし罰だ」

「無実の罪であるう」

「それでも罰は受けねばならん、それが天の意思だ」

頑なな姿勢の鴉にゾルテは憤怒した。

「それが間違っているというのだ。だからこそ、余は樂園を眞の樂園とするために立ち上がったのだ」

「私は堕ちようと神に仕えるものだ」

「神などいない！ そのような存在がいるのであれば、今ここで余の身体を雷で射抜いて見せよ！」

何も起きなかった。

ゾルテは高らかに笑い、鴉は無表情なままだった。

「はははっ、何も起きないではないか！ やはり、神などいないのだ」

「神の意志は必ず遂行される、それが理だ」

「ならば、反逆者である余は必ず討ち取られるというのか？」

「そうだ」

鴉の黒衣が風もないのに、漆黒の翼のように大きく広がった波打つ黒衣はまるで生きているようであり、その動きは呻きもがいているようにも見えた。

ゾルテの耳には叫び声が届いていた。その声は確かに鴉の黒衣から発せられている。

鴉の無表情な蒼白い顔は宇宙を仰いだ。

天に広がる灰色の雲。曇天が蠢き、太陽を隠してしまってい

る。あの厚い雲の先に樂園アックエは存在する。

顔を下げた鴉の口元は笑っていた。

「還ることは許されん。これが罪と罰だ」

鴉が顔を上げたと同時に辺りに風が舞う。それが黒衣の成した業だとゾルテが知った時にすでに、彼の身体は触手のように身体に絡みつく黒衣によつて捕らえられていた。

黒衣の間に包まれ自由を奪われようともゾルテは臆することなく、笑みすら浮かべている。

「余は知っている。余を捕らえたこの“闇”が、嘗ては煌く“光”であつたことを」

「私の罪が衣を闇に変えたのだ」

ゾルテの身体を黒衣が締め上げる。だが、ゾルテの余裕に笑みは崩れることなく、鴉を見据えている。

「だから貴公は鴉と呼ばれるようになった。しかし、腑に落ちないこ　愚かなノエルどもだ」

言おうとしていた言葉を遮らせたのは帝都警察だった。黒衣に包まれたゾルテを見た帝都警察は今がチャンスと攻撃を開始したのだ。

すでに敵と認識されたゾルテに容赦ない銃弾の雨が浴びせられ、バズーカも撃ち込まれた。

煙に包まれた中から鴉の黒衣が引き戻される。煙の中にはゾルテがまだ居り、攻撃は続いていた。

黒い翼が大きく広げられると同時に煙が掻き消される。ゾルテは生きていた。傷を負つてはいるが、その傷は瞬く間に消え

てしまった。あの程度の攻撃ではゾルテを倒すことは不可能なのだ。

「力の差というものを知らんのか。ノエルとはそこまで愚かな生物であるのか。嗚呼、嘆かわしいぞ、それを糧として生きていたことが嘆かわしい」

ゾルテは掌にエネルギーを集めはじめた。それは地上にも存在する魔導の一種。身体の一部に魔導力を集め銃のように解き放つ魔導だ。

人間たちにゾルテが魔導を放とうした瞬間、鴉はすぐさまゾルテを止めに地面を駆けた。しかし、間に合わない。

「止めるルシエ！」

友の名を呼ぶが、ゾルテは聞く耳を持ち合わせていなかった。

「ノエルなどいらぬ。この大地ノリスから一掃してくれようぞ」

人間に向けられたゾルテの手が激しい光を放った。

炎を纏う巨大猫との戦闘は遠距離線を強いられていた。自らの肉体を武器にする戦闘を得意とする夏凜には不利な戦闘である。

背後からの援護射撃は巨大猫に命中するものの、その行為は巨大猫の神経を逆撫でする行為でしかなかった。

怒り狂う巨大猫は鋭い爪を夏凜に向ける。

炎を纏った猫の手は大きく振りかぶられるが、夏凜は軽やかなステップでそれを躲す。先ほどからこの繰り返しだ。新たな援護が来ない限り、状況は打開しそもなかつた。

夏凜は大鎌を構えるが、柄の長さよりも巨大猫を包む炎の方が大きい。これでは手の出しようがない。

その時だった、どこからかサイレンの音が聞こえる。ふと、その方向を見た夏凜は静かに笑う。

サイレンが止まると同時に赤い車体は止まり、中からすぐに消防士が降りてくるや長いホースを構えた。

巨大猫とじゃれ合いをしていた夏凜が素早くその場から離れると同時に、巨大な炎の塊に向けて放水が行われた。

危機感を覚えた巨大猫は逃げようとするが、その身体を包み込んでいた炎は弱まり、風前の灯となっていた。

逃がすまいと素早く動いた夏凜は大鎌を天高く振り上げて巨大猫に突き刺した。だが、巨大猫が激しく暴れ、夏凜は思わず大鎌から手を放してしまった。

鎌が突き刺さったまま逃げる巨大猫からは血が滴り、それを人間とは思えないほど瞬発力で夏凜が追い、巨大猫の鼻先に立つ。

「逃がさないよ」

夏凜の口から発せられた声は空気を凍らせ、その顔には慈悲の欠片もない。

大きく振れた夏凜の脚が巨大猫の顔面に炸裂し、巨大な身体を持つているはずの猫が大きく吹き飛ばされ、その衝撃でアスファルトの上を大きく滑った。

アスファルトに皮膚を削られた巨大猫は覚束ない足取りで立ち上がり、怒りの鳴き声を甲高くあげた。

「実力の差がわかってないのかね、この仔猫ちゃんは」

巨大猫は避ける間も与えられなかった。

舞い上がった夏凜は華麗に踵落とし巨大猫脳天に炸裂させた。

鈍い音と共に巨大猫は顎を地面に打ち付けられ、白目を剥いて地面に倒れた。

地面に倒れた“仔猫ちゃん”を見つめながら、夏凜ははつとした。

「きゃ〜っ、こんな可愛い仔猫ちゃんに手をあげるなんてアタシとしたことが……エヘ」

照れ笑いを浮かべた夏凜はスカート裾をふわりと巻き上げながら反転すると、地面に横たわる巨大猫に背を向けて歩き出そうとした。

軽やかなステップで歩いていた夏凜の足が止まる。

夏凜の背後から殺気が立ち昇る。

「まだなのお〜!？」

驚いた顔をした夏凜が後ろを振り向いた時にはすでに、地獄の業火を纏う巨大猫が大口を開けて迫っていた。

天から飛来する白い影が槍を巨大猫の身体に突き立て、そのまま槍を巨大猫に突き刺したまま白い影は宙を舞いながら地面に降り立った。

「エスは驚異的な再生力を持っておりますゆえ、こうして核を破壊してあげなければなりませんよ」

柔らかな女性の声を発した白い影の背後で、巨大猫は灰に変わり、塵と化して風に運ばれて逝った。

呆然と立ち尽くす夏凜に白い影は恭しくお辞儀をした。

「政府組織ヴァーツに所属するフィンフと申します」

金色の流れる髪を靡かせながら、純白の衣を纏ったフィンフは地面に刺さった槍を軽々と抜いた。

細身の身体で槍を華麗に扱うフィンフを見て夏凜は顔を紅く染めた。

「アタシ夏凜っていいいます、友達になってください。ケータイの番号は」

腕に巻いた腕時計型モバイルの液晶画面に映し出された電話番号を読み上げようとする夏凜をファンフは慌てて止めた。

「あ、あの夏凜様のことは存じております。ですが、今は世間話をしている暇ありませんので、次の機会に。では」

身体を地面から少し浮遊させたフィンフは、そのまま地面すれすれの距離を飛んだ。夏凜は誘われるままにフィンフを追った。

地面に立ったフィンフはすぐさま槍を回転させることにより、魔導で壁を作りあげて巨大な光を待ち構えた。

ゾルテの放った輝く魔導波はフィンフの構築した魔導壁によって防御された。

「危ないところでしたね」
呟くフィンフの目はすでにゾルテを見据えている。

ヴァーツたちの普段の仕事はエスと化した怪物を相手にすることなどだが、本来の仕事は地上^{ノリス}で問題を起こした墮天者^{ラエトル}たちと戦うことだった。

フィンフ、ゾルテ、鴉ともに互いを見据え動こうとしなかった。

ゾルテはゆっくりとフィンフに向かって歩き出した。

「ようやくヴァーツのご登場か。しかし、ひとりだけとは余も舐められたものよ」

ゾルテに姿はまだ遠くだが、フィンフの構える槍の切っ先はゾルテの心臓を狙っていた。

「墮天者ラエなどわたくしひとりです。鴉、貴方は動かないように。騒ぎを起こしたら貴方も処罰の対象となりますよ」

槍のグリップを強く握り直したフィンフはゾルテを睨み付けながら言葉付け加えた。

「夏凜様も手出しは無用です。戦いの邪魔となります」

ドキッとした夏凜は大鎌を背中後ろに回して後退した。

フィンフの身体が霞む。影をその場に残してフィンフの身体は地面を滑るように移動し、対天人用の槍ソエが雷のごとく走る。

常人では槍を躲すことはできない。それは並みの天人ソエであっても同じことだ。しかし、彼は違う。

ゾルテを纏う覇気が物語るものが大地を震え上がらせる。

「さすがはヴァーツ、と言いたるところだが、余に速さという概念は通用せぬ」

「しまった!？」

手に相手の身体を突き刺した感触が伝わって来ない。フィンフはすぐさま槍を引き戻そうとしたが、それすら叶わなかった。冷笑を浮かべるゾルテ。彼の手にはフィンフの槍がしっかり

と握られていた。

槍を持つフィンフの身体がそのまま持ち上げられて、滑らかな曲線を描きながら地面に叩きつけられる。

凄まじいスピードであったために、フィンフは何もできずにアスファルトに身体を埋めた。

それは幻だった。

ヴァーツは大地に墮ちた天人を管理する立場にある。ゾルテも今や墮天者に過ぎない。

地面に埋もれたフィンフが霞み、地面には“痕跡”すら残っていないかった。

槍は風の唸りをあげ、ソルテの核を狙う。

鬼の形相を浮かべるゾルテは ソード 化した腕を振るう。

しかし、それも幻。

ソード よって斬られたフィンフの影は霞み消え、ゾルテは遥か上空から飛来する白い影を見た。

音速を超える白い影はジェット機のような音を鳴らす。

地面が弾け飛び、破片が宙を飛び交い、砂が視界を遮る。

熱を帯びた槍先はゾルテの心臓の手前で止まり、槍を掴んだゾルテの手は焼け焦げて、彼の立つ地面はクレーターのように大きく抉られた。ゾルテはフィンフの槍を受け止めた。

だが、ゾルテの顔を歪んでいた。

感触は確かにある。ゾルテの掴む槍の先にはフィンフが宙に浮いた格好のまま動きを止めている。しかし、フィンフは別の場所にいるのだ。

二つの槍がゾルテの身体を左右から貫く。その槍を突き刺した人物は確かにフィンフであった。フィンフが三人いる。

身体を貫かれたゾルテであったが、最初に掴んだ槍を放すわけにはいかない。その槍は今も自分の心臓を貫こうとしている。フィンフは静かに微笑んだ。

「あと一本です」

次の瞬間、ゾルテは背後から刺された。

腹から突き出る槍を見ながらゾルテは口から血を吐いた。

槍を握っていたゾルテの力が弱まったのをフィンフは見逃さなかった。

最後の槍がゾルテの身体を貫き、四人のフィンフは串刺しにしたゾルテを天に掲げた。

天に捧げられたゾルテの身体からは槍を伝って血が滴り落ち、地面を紅く彩っていく。

四人のフィンフは神々しいまでの笑みを浮かべた。しかし、その内面には何か恐ろしいモノが潜んでいた。

「“わたくしたち”は慈悲深い、殺生は好みません」

轟々と雲海が唸り声をあげた。

ゾルテは逃げることもすらできなかった。普段ならば自らの身体を引き裂いても槍から逃れただろう。しかし、今はできなかった。

灰色に染まった天は時折雷を走らせ、誰もが息を呑んで空を見上げてしまっていた。

一際大きな雷光が幾つも天を泳いだ時、神々しい輝きとともに

に天に何かが現れた。それは巨大な門であった。

天に浮かぶ巨大な門を強烈な威圧感で場を萎縮させ、門の奥からはもがき苦しむ叫びが聞こえるような気がする。

無表情でゾルテとファンフの戦いを傍観していた鴉であったが、この時ばかりは目を細めて天を仰いでいた。

「裁きの門 か……ルシエほどの墮^ラ天^{エル}者ならば、相応と言える」

いつの間にか鴉の黒衣をぎゅっと握り締めていた夏凜は、天を仰ぐ鴉に息を詰まらせながら尋ねた。

「あ、あれってなに？ 裁きの門 って、太古の魔導書に載ってるやつ？」

「この地上が牢獄であるのならば、裁きの門 の先にある世界は地獄だ」

側面的には脅えを見えていないものの、鴉の精神は 裁きの門 に明らかかな畏怖を感じていた。そして、夏凜に内いる「モノ」も 裁きの門 に酷く脅えている。

鴉たちが見る中で、ゾルテの身体から槍が抜かれたが、ゾルテの身体は地面に落ちることなく緩やかなに天へと上がっていく。

「嫌だ、余はあそこだけにはいきたくない！ 止める、止めてくれ！」

必死に叫び、ゾルテは身体を動かそうとするが、彼の身体は見えない鎖によって拘束され、逃れることは許されなかった。

ゾルテからはかつての覇気は消えうせていた。

重々しい音を立てながら 裁きの門 が口を開く。

鼻を突く死臭が冷たい風に乗って恐怖を運び、開かれた門の先には闇しかなかった。しかし、確かにその先で何かが蠢いている。

フィンフは恐怖に顔を引き攣らせたゾルテに最期の言葉を捧げた。

「いつの日か救世主が解き放つてくれましょう」

天に昇る黒い影。

夏凜は酷い吐き気に見舞われ、足が大きく震えて地面にしゃがみ込んだ。

鴉の表情も険しかったが、彼は夏凜の身体を抱えて足早にこの場から立ち去ろうとした。

この場にいた人々が天から目を放すことも許されなくなっているなか、鴉と夏凜はゾルテが裁かれる前に逃げるように歩き出した。

天は怒り、雷光を地面に落とす、人々は脅え、天に畏怖する。一部始終を遠くから眺めていた天人ソエルは微笑んでいた。怒り狂う天を見ながら笑っていた。

「ゾルテが囚われるとは誤算だ。代わりを探さねばならん、やはり彼が適任か……」

この者から発せられた声は若々しく、まるで春の小川がせせらいでいるようである。それは「リリス」と通信をしていた時よりも柔らかかな口調だった。

純白に輝く翼を持つ墮天者ラエルは天を仰ぎ、そして、口元を歪ま

せた。

彼が天を仰いでいると、白い影が近づいて来た。

「来ていたのですね、ツエーン」

「お久しぶりだねフィンフ。せつかく加勢に来たのに、貴女には必要のないことだった」

それがツエーンにとつての誤算であった。政府組織ヴァーツの中で自分が一番初めにゾルテの前に現れなければならなかった。

例え強固な城壁を築こうと、城の中に反逆者がいたのでは意味のないことだった。

最新型の電化製品を見渡しながら、ファリスはダイニングの大きなソファアーに腰を下ろした。

することがない。ひとり留守番を任されてもファリスにはすることがなかった。

ファリスはソファアーの上に横になりながら天井を見つめた。

「はあ……」

ため息が出た。

ソファアーの感触はとてふかふかしていて、ファリスが使っていたベッドよりも断然いいものだった。そのことでファリスは少し腹が立った。

夏凜のことは嫌いではないけど、なぜか腹が立つ。

部屋の中は静かだった。何も音がしない。それがファリスにとって寂しく感じた。

窓の外に見える曇り雲もファリスの気持ちに憂鬱なものにする。

少しでも気分を紛らわせようと、ファリスはテーブルの上に置いてあったリモコンに手を伸ばした。

テレビの電源が入り、巨大な液晶画面に映像が映し出される。チャンネルを適当に回し、ファリスはすぐにテレビの電源を切った。

おもしろいとかつまらないとかいう問題の前に、ファリスはすることがないのでなく、何もする気がしなかった。

テレビを消してしまうと部屋は静かな空間に戻ってしまった。テレビリモコンの横にはオーディオ機器のリモコンもあった。ファリスはとりあえずプレイボタンを押してみる。すると、部屋中に取り付けられたスピーカーからけたたましいハードロックが流れはじめた。

ファリスはこういう曲は嫌いではなかったけど、今は耳障りにしか聞こえなかった。けれど、もう停止させるのもめんどろだった。

ゆっくりと目を閉じたファリスは全身の力を抜く。身体が重く、すごく疲れたような気がする。何もかも突然に起こりすぎた。

生まれ育ったホームを失い、小さな家だったけど愛着のあった自分たちの家を失い、この世で一番近くにいてくれたひとと失ってしまった。

ファリスは失って困るものはないような気がした。けれど、

死にたくない。別に命が惜しいわけではなく、悔しくて死ねない。自分から ホーム を奪った奴らが憎い。

しばらく目を閉じて考え事をしていたファリスは急に立ち上がった。特に何かをしようと思ったわけではない。ただ、じつとしていられなかった。

ベランダに続く窓にファリスは手を押し付けた。

空は灰色の雲に覆われ、ファリスの目で見る巨大都市エデンは倦怠な雰囲気醸し出していた。

雷光が雲の上を走った。

激しい稲光。防音工事がされているので音は聞こえないが、だいぶ激しい雷だ。

まるで空が怒っているように連続した雷が起こり、地面に雷光が落ちる。

土砂降りの雨が降ってきた。強い風も吹き荒れ、雨粒がファリスの目の前の窓を濡らす。

出かけた二人は大丈夫だろうかと、ファリスはふと思って再びソファーに腰を下ろす。

まだ、二人は帰って来ない。

早く帰って来て欲しいとファリスは心から願った。ひとりりは嫌だった。誰もいいから側において欲しい。

ファリスがすることもなく部屋を見渡していると、玄関の開口音が聞こえたような気がした。

二人が帰って来たと思ったファリスは逸る気持ちは抑えられず、玄関に急いで向かった。

玄関に立つ人影は一つだった。ファリスにとって見覚えのある人影。怒りが湧いてくるが、それよりも恐ろしさが優り、ファリスは身動き一つできなくなってしまうた。

人影はおぞましい笑みを浮かべていた。

息を呑み込んだファリスは喉の奥から声を絞り出した。

「どうして……!？」

「ガハハハハ、どうしてだと？」

高笑いをする大柄の男はまさしくハイデガーだった。

「俺が死んだとも思っていたのか？ 重傷を負いはしたが、この俺に死などあり得んだ。わかるか、わかるか愚かなノエル！」

「なんで、ここに……!？」

きつと、自分ではなく鴉に関係あるのだろうとファリスは思った。けれど、その鴉は今ここにはいない。

足を震わせるがファリスは逃げられなかった。逃げたいという気持ちはあるが、足が動いてくれない。

巨大な手がファリスの首を掴んだ。ファリスは巨大な手を必死に振り払おうとするが、全く歯が立たない。

「は……なして……」

「どうやら鴉はいないようだな。残念だ、残念だ……。だが、それもおもしろい」

ハイデガーはファリスの身体を壁に押し飛ばした。

「げほっ、げほっ……」

床に尻をついたファリスは咳き込みながらハイデガーを睨付

けた。

立ち向かっても勝ち目はない。ならば逃げるしかない。ファリスは部屋の奥に全力で走った。

必死に逃げようとするファリスとは対照的に、ハイデガーの動きはゆったりとしていた。

逃げ場は部屋の奥しか残っていなかった。しかし、それ以上の逃げ場はない。そのために、ハイデガーは余裕の笑みを浮かべてファリスとの距離を縮めていく。

後退りをするファリスの背中がガラス窓にぶつかった。後ろはベランダで、その先には巨大都市が広がっている。

ファリスの目の前で止まったハイデガー耳が微かに動き、彼は素早い動きで後ろに振り返った。

玄関のドアが開かれ、誰かが部屋の中に入って来た。

「ただいまあつ。ああ、もお、急に降り出すんだもん、濡れちゃったよお」

衣服を濡らしながら歩いて来る夏凜は視線を上げた瞬間、ハイデガーと鉢合わせしてしまった。しかし、ハイデガーの視線は夏凜の後ろにある。

夏凜の横を黒い影が擦り抜けた。思わず夏凜は床に手を突いてしまったが、すぐに体制を立て直して大鎌を構えた。

黒い影はハイデガーを押し飛ばし、ファリスの真横のガラス窓をぶち破ってベランダまで飛び出した。

ガラス片が飛び散り、強風と大粒の雨が部屋の中に吹き込んでくる。

ハイデガーの上に覆い被さる鴉は硬質化させた腕を大きく振り上げ、ハイデガーの顔を抉るように力強く殴り飛ばした。

首がへし曲がり、血反吐を鴉に向かって吐き捨てたハイデガーは、鴉の身体を掴んで柔道の投げ技のようにペランダの柵ごと空へと投げ飛ばした。

空に投げ飛ばされた翼をもがれた墮^ラ天^{エル}者は黒衣を大きく広げ、地上に落下していく。

ゆっくりと立ち上がるハイデガーに夏凜は大鎌を振り上げた。大鎌がハイデガーの胸を抉る。血が滲み、床に紅い雫が滴り落ちる。だが、ハイデガーは薄く笑いながら夏凜との距離を縮めて来る。

「下賤なノエルが俺に勝てると思っているのか！」

「うゝん、勝てないね」

あっさりと認める夏凜の表情はにこやかだが、内心は非常に焦っていた。

勝てないと認めたのは真実だ。

夏凜は部屋の隅で震えているファリスをちらつと見た。自分ひとりならば逃げられるかもしれない、だが……。

悪魔と天使が夏凜の耳元で激しい論争をはじめた。

悪魔は夏凜に逃げることを推奨する。天使も逃げることを推奨していた。そして、夏凜は決断を下した。

「生きるが勝ち！」

夏凜は玄関に向かって失踪した。

足音が激しく床を揺らす。夏凜は焦りの表情を浮かべながら

背中越しに後ろを見た。

「マジっ!？」

ハイデガーが追って来るではないか！

玄関は近い。玄関を出れば少しは状況がよくなるかもしれない。
い。

夏凜の手がドアノブに伸びる。だが。

玄関がぶち壊せれて、飛んで来るドアの直撃を受けた夏凜の身体が大きく飛び、ハイデガーを巻き込んで夏凜は床に倒れた。黒い影が床に寝転がる夏凜の上を飛び越し、ハイデガーの上
に飛び掛かった。

ずぶ濡れになった黒衣から水を滴らせ、鴉は鋭い爪を振り上げる。

水飛沫が煌き、爪はハイデガーの心臓を狙っていた。

ハイデガーが嘲笑う。

天人ソエルが持つ特殊能力 組織構造変質能力コリスエンシ。

変化が生じた。ハイデガーの両腕が二丁の銃へと変貌し、すぐに銃口から魔導弾が発射された。

黒衣が鴉の身体を包み込もうとするが、間に合う筈もなかった。

胸を貫かれた鴉は後方によるめき、その胸には拳大の穴が二つ空いていた。あと少しずれていたら心臓を貫かれていたに違いない。

ハイデガーの表情が急に強張った。彼は耳につけていた超小型通信機からの声に畏怖したのだ。鴉への復讐という私情でこ

こにやって来たが、事情は変えられた。

うづくまる鴉の身体を持ち上げたハイデガーはにやりと笑うと、鴉の胸に手を突き入れて何かを取り出した。

鴉の身体から取り出されたそれは紅く輝く宝玉に似ており、心臓のような鼓動を脈打っていた。紅い宝玉、それが“核”と呼ばれているものだった。

無造作に鴉を床に投げ捨てたハイデガーは、核をひと呑みにして胃の中に納めた。

軽くゲップをしたハイデガーは地面に転がって動かなくなっている鴉を見下した。

鴉の身体が枯れていく。それを見た夏凜はその場を動けず、そこで起こった現象を凝視してしまった。

萎みいく鴉の身体は黒い塊と化し、灰と化し、塵と化し、消滅した。

鴉が消滅してしまったのを見て、夏凜は頭を抱えながら床に倒れ込んだ。

「……絶体絶命だね」

翼を背中に生やしたハイデガーは夏凜を一瞥したあと、何も言わずにベランダの窓から外へと飛ばたいていった。

ふらふらと歩いて来たファリスは床に溜まった黒い塵を見つめた。声は出なかった。何が起きたのか見ていなかったが、そこにある塵が鴉だったものだということを感覚的に悟った。

ため息をついた夏凜は立ち尽くすファリスを見上げてすぐに視線を下げた。

「たぶん死んだね。鴉は死んだ……、そう、死んだよ」

「うそ、うそだよそんなの！ そんなの……」

死ぬはずがない、ファリスは信じられなかった。鴉は人間ではなかった。それを知るファリスは鴉が死なない生き物だと信じていた。しかし、それには根拠がない。死んで欲しくないから、死なないと信じていた。

壊れた玄関から武装した数人の警備員が駆け込んで来た。

床に溜まった塵が踏み荒らされ、ファリスは心から叫んだ。

「止めてよ！」

警備員たちはファリスに銃口を突き付けた。

銃口を突き付けられながら、ファリスは警備員を上目遣いで睨んだ。それを見た夏凜はファリスと同じく銃口を突き付けられながら、手を上げて吐き捨てるように言った。

「もう全部終わったから、帰ってくれないかな？ いちよこ

こ、アタシんちなんだけど？」

二人に向けられていた銃口は下げられはしたが、警備員たちが帰るようすはなく、夏凜は言葉を続けた。

「玄関はぶつ壊れちゃったけど、何もなかったから。被害届も出でないのに捜査を開始するほど、ヒマじゃないと思うし、キミたちも慈善活動がしたいわけじゃないでしょ？」

夏凜の顔は多くの人に知れ渡っている。そのためか警備員たちは去って行った。しかしながら、後に通達か何かがあって、このマンションを追い出されるのだろうなと夏凜は心の中でこちた。

立ち上がった夏凜はファリスの肩に手を回して無言で部屋の奥に導いた。

三日以内に部屋を出て行くように連絡を受けた夏凜は、ため息をついてファリスが座る向かい側のソファーに腰を下ろした。「引越して来て三ヶ月も経ってないのに……。別にね、鴉とファリスのせいだとは思ってないけどね、仕事が仕事だから部屋貸してくれるところが少なくて、しかも、襲撃を受けて部屋を追い出せるのってこれで六回目だから、大きなマンションとかは、もういい加減部屋を貸してくれないかもしれないんだよねえ」

「マンションじゃなくなたっていいじゃん、住もうと思えば路上にだって住めるよ」

「アタシに浮浪者になれって言うの!？」

「あたしは浮浪者じゃなかったけど、ホーム 育ちだから路上でも生きていけると思う」

夏凜は頬杖を突きながらファリスをじつと眺めて呟いた。

「ふん、どーりで品の乏しいお嬢さんだと思った」

「どうせあたしは下品だよーだ!」

「別に下品とかじゃなくてさ、髪の毛サボサとか、着てる服とか汚いし、ああ、それを下品っていうのか」

そう言っただけで夏凜は悪戯な笑みを浮かべた。

ファリスは顔を膨らませて、近くにあったクッションを夏凜に投げつけた。夏凜は造作なくクッションを受け止め、ファリ

スに投げるフリをして横に放り投げた。

「アタシはクッションを投げつけるような下品なまねはしないの」

「下品下品って、あたしだってあなたみたいにお金持ちだったら上品に振舞えるよ！」

「たしかに貧乏なせいもあるかもね。でもね、アタシは自分の力でここまで稼いだの、わかる？」

「スラム育ちは安い給料でしか働かせてもらえないの！」

「言つてなかったけ？ アタシの仕事はトラブルシューターなんだけど、スラム育ちでも有名なトラブルシューターはいくらでもいるよ。ヤル気さえあれば、アナタだって大金持ちになれるってこと、ただ、それなりの覚悟がいるけどね」

トラブルシューターの仕事は多種多様に渡り、トラブルシューターによって引き受ける仕事も違う。夏凜の引き受ける仕事は命がけの仕事が多い。だからこそ、夏凜は高級マンションに住むことができるのだ。

「ファリスは夏凜の言葉を受けて少し考え込み、真剣な顔をして言った。

「じゃあ、弟子にしてよ」

「はあ!？」

「あたしトラブルシューターになるって決めたから、だから弟子にして」

「アタシがトラブルシューターで一流になれたのは特別な理由があるから。それは人に教えてあげられるものじゃないから、

弟子になるなら他の人に頼んだ方がいいよ」

夏凜は自分ひとりの力でトラブルシューターになったのではなかった。「彼女」は特別なのだ。

「じゃあ、家事手伝いでいいから雇って」

ファリスはトラブルシューターになる気でいた。だから、せっかく見つけたトラブルシューターを逃がしたくなかった。夏凜の側にいれさえすればチャンスはある。

「アナタを雇うくらいなら、自動人形オートマタを買っね。そんなことよりも、ホームに帰ったら？」

「あたしの住んでたホームはなくなっちゃった」

「まさか、スラム三番街の住民だったの!？」

スラム三番街でのニュースは夏凜の耳にも届いていた。

「だから帰る場所がないの……」

「しよゝがないなあ、弟子はダメだけど、住み込みの家事手伝いで雇ってあげる」

「ホントに!？」

ソファアから身を乗り出したファリスは飛び跳ねて喜びを表現した。

しかし、夏凜は少し困った表情をしている。そもそも彼は家事手伝いなどが必要としていなかった。

「でもね、別にアナタの仕事ってないんだよね。食事は出前か外で済ますし……」

「じゃあ部屋の掃除は？」

「掃除はアタシの趣味。言っってなかったけど、アタシ、トラブ

ルシューターの副業で清掃員もしてるんだよね」

別にお金に困っているわけではない。清掃員をするのは本当に彼の趣味だからだ。

仕事がないと言われてファリスは少し困った表情をする。仕事がなければ夏凜が傍に置いてくれる理由もなくなるし、それでも夏凜がいてもいいと言われたとしても嫌だ。何もせずに人に養ってもらう気はファリスにはなかった。

「じゃあ、あたし、何すればいいの？」

「だ〜か〜ら〜、今考え中」

「だったらやっぱり夏凜のアシスタントになる」

つまりそれは弟子にしろということである。

「それも考慮には入れておく。アナタの仕事内容については明日までに考えておく。それよりも」

と言った夏凜はファリスを指差して、そのまま話を続ける。

「まず、その服をどうにかする。そうだなあ、今から買い物して、そのまま外で夕食で決定。アタシの決定は絶対だからね」

「服代は？」

「アタシが出すに決まってるでしょ。まあ、でも返す気があるなら、将来返して」

将来返すという言葉聞いて、ファリスの頭にあることが過ぎった。

「お金はあとで払うから、あたしの依頼を受けて」

「……………はあ!？」

まさか突然そのようなことを言われるとは思わず、夏凜は驚

きの表情をした。

「ファリスは夏凜に詰め寄って、真剣な眼差しで見つめた。

「だから、夏凜はトラブルシューターで、あたしは依頼人」

「アナタお金ないでしょ」

「将来返すから」

「そーゆー不確定なことは信じない。アタシはチヨー一流だから高いし、アナタが本当にお金を返せるとは限らない」

「だって、さっきは服の代金はあとでいいつて！」

「それとこれは問題が別。さっきの服とか食事の代金は雇い主として、住み込みで働くアタナに施さなきゃいけない義務、その義務だから」

夏凜はファリスに説明しながら、自分にも説明をしながら話していた。つまり、それは言い訳だった。

「ファリスは夏凜の眼前まで迫って押し倒しそうな勢いだった。

「あたしの ホーム を奪って、鴉まで殺したあいつを殺して！」

「ちよつと待って今なんて言ったの……やっぱり言わなくてもいいから黙っていて」

腕組みをして考え事をしはじめた夏凜は宙を仰いで何かを思いつきそうとしていた。

鴉を殺したのはあの男だった。そして、その男がファリスの ホーム を奪った。夏凜にはあの男の顔に見覚えがあったのだ。

「そうだ、あの男、ユニコーン社の社長のハイデガー!? あの

地区の開発事業をしようとしていたのはキャンサー社で、住民の排除を委託されたのがユニコーン社。なるほどね、ユニコーンの社長さんがアタシんちに不法侵入したうえに、部屋を荒らしてくれちゃったわけね」

不敵な笑みを浮かべた夏凜はファリスを見つめた。

夏凜は自分に害を及ぼした者に容赦しない。それに加えて相手が大物とあれば反発心がよりいっそう高まる。それに相手が大物であれば思わぬ金が自分に舞い込むことがある。

ファリスが夏凜の顔を覗き込む。

「依頼受けてくれるの？」

「考えておく」

この時すでに夏凜は事件に首を突っ込む気でいた。

ソファから立ち上がって歩き出した夏凜は途中で振り返った。

「雨に濡れたからシャワー浴びて着替えてくる。ファリスもア

タシと一緒に風呂に入る？」

「なにバカなこと言ってるの!? あなた男でしょ？」

「今はね……。じゃ、アタシがシャワーから出たらすぐに出かけるからね」

そう言っただけで夏凜はバスルームに姿を消した。

ファリスは夏凜の『今はね……』という言葉が頭に引っかかった。見た目も声も夏凜は女性だが、世間一般には男として通っている。だが、ファリスは夏凜の裸姿を見たわけではないのでなんとも言えなかった。もしかしたら夏凜は女性なのかもしれ

れないとファリスは思ったが、ではなぜ世間では男と言われ、夏凜の言った『今は……』の意味はどういうことだろうか？

結局考えが導き出せず、ファリスは再びソファーに腰を下ろして他の考え事をはじめめる。

夏凜が自分に見せた不敵な笑みの裏には何かがきつとある。自分の依頼を受けてくれなくても、夏凜が事件について何らかの動きを見せることは確信できた。ファリスはそう思うと少しだけ希望が見えたような気がした。

しかし、まだまだだ。ホームを奪った奴ら、そして、あのハイデガーに復讐しなくてはファリスの気はすまない。

ファリスの心に渦巻く感情は悲しみよりも怒りの方が勝っていた。ここままだハイデガーを放って置いては誰も何もしてくれないだろう。ならば、自分で復讐をするとファリスは誓った。

今のファリスにできることは少ない。けれど焦る必要はない。時間をかけて復讐をすればいい。焦って犬死にはしたくない。

ファリスは命を賭けても構わないと思っっているが、自分だけが倒れるのは絶対に嫌だと思っっているのだ

ホームで亡くなった人たちに想いを馳せて、復讐の念を募らせるファリスの脳裏に鴉が浮かんだ。鴉は不器用な性格だったように思えるが、決して冷たい人ではなかった。床に積もった塵が鴉であることはすぐに悟った。しかし、ファリスはまだ鴉が死んだとは思えなかった。どこかで生きているような気がする。

裁きの門　が呼んだ豪雨は深夜まで降り注ぎ、明日も一日雨が降り続くだろうと天気予報でいつている。

「雨の中、わざわざ集まってくれてありがとう」

千歳はそう言いながら楕円形のテーブルに座る者を見渡して言葉を続けた。

「とは言っても、集まってくれたのはわたしを含めて三人。集まったとは言っても、ルシエルは相変わらず中継で参加、三人が欠席、欠員がひとつ。まったく、ドウ・ラエルが聞いて呆れるわね」

実際にこの会議室にいるのは千歳とハイデガーだけであった。「ガハハハ、俺がいれば他の奴らなどいらんだらう」

ハイデガーは上機嫌であった。

墮^ラ天^エ者^ルの中にも地位というものがあり、その地位は楽園^アにいた頃の地位が繁栄されることが多いのだが、地上^ソでは楽園^アとは違い、その地位の変動が激しい。墮^ラ天^エ者^ルの中でも地位が高い者たちはドウ・ラエルと呼ばれるが、その中にも上下関係がある。七人の墮^ラ天^エ者^ルが同盟を組んだアンチ・クロス。その中のハイデガーの地位は下であったが、今回の働きを考えると地位が上がる可能性は高い。しかし、千歳はそれが気に食わない。

「あの鴉を捕まえたことは認めるけど、スラム三番街を消失させた責任はとってもらわうよ」

「責任だと？ どうせあそこは更地にする予定だったのだから。手間が省けていいではなか」

「ふざけないでよ、あんな大事件起こしておいて、後の処理が

どれだけ大変か考えてみなさいよ。あの事件のせいで当分の間ヴァーツに目を付けられてしまったじゃない！」

「ヴァーツに目を付けられているのはいつものことだろう！」互いを睨みつける千歳とハイデガーの間にスピーカーからの声が割って入った。

「二人とも止める。スラム三番街で事件を起こしたことは問題だが、鴉を捕らえたことは功績が大きい」

千歳とハイデガーはモニターに映る顔を見て、すぐに興奮を抑えて沈黙した。

モニター越しに会議に出席しているのはツェーン　ここでルシエルと呼ばれていた。

ハイデガーが鴉を捕らえた功績は大きい。しかし、千歳には反論があった。

「そもそも、ルシエルがゾルテを止めていれば鴉を代用にする必要はなかったのではないの？　あなたが自分で行くと言ったのをお忘れかしら？」

「他のヴァーツが先にゾルテを見つけただうえに、裁きの門を開けられてしまつては余にできることはない」

千歳は「そんなのは言い訳にしか聞こえないわ」と言つてやりたかつたが、そこまで口にする力はなかった。アンチ・クロスで最も地位が高い者　それがルシエルであった。

ルシエルはアンチ・クロスの創設者メンバーであり、当初のメンバーで今も残っているのはルシエルと千歳だけである。そのため自然とルシエルと千歳の地位は高くなるのだが、千歳の

前に聳え立つルシエルという壁は異常なまでに高い壁であった。唇を少し噛み締めた千歳はハイデガーに顔を向けた。

「三番街のことは忘れてあげるわ。それよりも鴉はどうなったの？」

ハイデガーの代わりに答えたのはルシエルであった。

《鴉は余の研究所で核のまま捕らえてある。Mの巫女が見つかるまでは核のまま置いてもらうことにする。リリス、Mの巫女 の選定は終わったのか？》

「Mの巫女 は見つかったわ、けれど、所在が掴めないのよね。その Mの巫女 がスラム三番街にいたらしいから困っているのよ。もしかしたら、死んでるかもね」

そう言つて千歳はハイデガーを睨みつけた。だが、ハイデガーも負けじと睨み返す。

「おまえが俺に仕事を委託したのだろう！」
「更地にしろつて誰が頼んだのよ！」

千歳とハイデガーは自分の席を立ち上がつて、互いを殴りかかりそうな勢いであつたが、スピーカーから聴こえた咳払いによつて二人は拳を握り締めながら席に座つた。

《Mの巫女 が死んだと決まつたわけではない。それで、Mの巫女 はどのような人物だった？》

ルシエルに問われた千歳はすぐさまコンピューターを操作して、3Dホログラム映像でひとりの少女を映し出した。

会議テーブルの上に投影された少女の映像を見たハイデガーが思わず声を張り上げた。

「この娘、この娘、見たことがあるぞ！ 俺が鴉を捕らえた時に一緒にいた娘だ！」

「なんですって!？」

偶然にも Mの巫女 が見つかった驚きもあるが、それよりもハイデガーに手柄を取られたという落胆の方が大きく、千歳は肩を落として椅子に深くもたれかかった。そこに追い討ちをかけるルシエルの言葉が続く。

《ならば、 Mの巫女 の件はハイデガーに任せるとしよう》

「ちよつと待ってよ、それはわたしの仕事 。」

再び席を立った千歳の言葉をルシエルは遮る。

《リリスには アルファ の調整を行ってもらう。異存はないな?》

「あるわよ、 アルファ の調整はとつくに終わってるじゃない!？」

声を荒げる千歳を見てハイデガーが声を押し殺してクツクツと笑っている。

画面に映し出される映像とともにルシエルの声には表情がなかった。

《Mの巫女 の剣であり盾である Mの騎士 がゾルテから鴉へと代わったのだ。 アルファ を起動させるにはそれなりの整備が必要だろう》

巨大都市エデンの地下に眠る巨大コンピューター アルファ。巨大コンピューターと言っても、実際は巨大なヒト型をした兵器 いや、神を模った兵器である。 アルファ とは

アンチ・クロスは長い年月をかけて創り上げた人工の神なのだ。

アルファ を完全体にするためには Mの巫女 と Mの騎士 と呼ばれる存在が必要であった。しかし、そのことについてハイデガーには気がかりなことがあった。

「ゾルテから鴉に Mの騎士 が代わっても不具合はないのか？ 今の鴉が以前の力を持っていないことは戦った俺が知っている。あれは違う、違う存在であったぞ。まさに輝きを失った鴉であった」

《問題ない。鴉は余に匹敵するやもしれん存在。 Mの巫女 は アルファ の生贄である制御装置、 Mの騎士 は アルファ の動力源となる 鴉にはその器がある。 Mの巫女 には特殊な遺伝子構造を持つ者が求められるが、 Mの騎士 は アルファ を動かせるだけの強大な力を持つ者ならば誰でもよい。何も問題なく事は進んでいる、二人は自分に与えられている使命を果たせばいい》

いつからこのようになったのかと千歳は思う。いつから自分はルシエルに命じられてしまう立場になったのか。楽園^{アッヘ}での地位は確かにルシエルの方が上であったが……、これでは対等の同盟関係とは言えないではないか。

千歳は深く息を吐いて、「……まだだ」と心の中で呟いた。「墮^ラ天^{エル}者が会議をしても碌な会議にならないことはわかっていたわ。いつものことだもの。今日はお開きにしましょう、お疲れ様」

会議テーブルに片手をついて、千歳は俯いたままもう片方の

手で出口を指し示した。

ルシエルの通信は切られ、ハイデガーも会議室を後にして行った。

残された千歳は俯いたまま唇を噛み締めている。身体が振るえ、怒りが込み上げて来る。自分はまだルシエルの掌の上で踊らされている。そのことが彼女のプライドを酷く傷つけていた。身体が火照るように熱い。聖水エイクスを欲している。怒りが渴欲に変わり、欲情に変わる。

千歳は舌なめずりをして急いで部屋を出た。

深夜のスコピオン社には人は居らず、深々としている廊下はほとんど暗闇に近いほどの明かりしか点っていない。

近くに人でも歩いていればすぐにでも吸血行為ケトウィルを行いたい。そう思うと千歳の身体は発作によって震えた。

廊下の奥からライトの光が千歳を照らした。

千歳にライトを照らしたまま近づいて来る人影は警備員のものであった。

「社長？ こんな夜遅くにどうしたのですか？」

「これで我慢してあげるわ」

千歳は女性の聖水エイクスを好んで呑む。だが、目の前に立っているのは男。それでも千歳の手は動いていた。

長く伸びた爪が太い首を締め上げ、男は声をあげる間もなく首をへし折られた。

千歳は無我夢中で男の首に噛み付き、肉を喰い千切りながら大量の血を喉に流し込んだ。

口から零れる紅い雫を舌で舐めた千歳は徐々に精神を落ち着かせていった。

床に転がる男はエスに変異して怪物になることはない。もう、すでに息を引き取っているからだ。

甘い吐息を漏らした千歳は再び歩き出し、隠しエレベーターのある場所まで向かった。

エレベーターは社長室の中にあり、デスクに隠されたボタンを押すことによつて壁の中から現れる。

隠しエレベーターは地下に降り、一瞬止まったかと思うと横に移動する。この時のエレベーターの速度は時速一〇〇キロメートルを超えて移動している。

キャンサー社ビルが建つ敷地内からはすでに出ていていると思われる。いったいどこに向かっているのだろうか？

エレベーターは緩やかに速度を下げて、やがて止まるとドアを左右に開いた。

巨大な格納庫のような場所。

千歳の足音が反響する金属やコンクリートでできた床。

どこからか微かにモーターが回転するような音が聴こえて来る。

千歳の足が止まった。

ゆつくりと首を上げる千歳の視線の先にはライトアップされた巨大な何かがあった。それは巨大なヒト型をしたロボットであった。

ヒト型と言っても、顔や手足や胴といった部位があり、二本

足で立っているだけで、その姿は人間には似ても似つかなかった。これがスーパーコンピューター アルファ だ。

アルファ のボディには曲線が少なく、塗装も施されておらず灰色をしている。ただ、所々に向けられる血管が浮き出たような模様からは蒼白い光が淡く輝いている。

アルファ を見上げる千歳の口が綻ぶ。

「これはわたしの物……。そして、これを使ってわたしが王になるのよ」

千歳の静かな笑いが格納庫の中に響き渡った。

壁は金属で頑丈に造られ、薄暗い部屋の中には大きなガラス管がいくつも置いてある。そのガラス管の中にはキメラ生物たちが入れられ、時折口や鼻から泡を吐いている。

キメラ生物は毛のない猿のようなものやアメーバのようなもの、角のある犬のような生物もいたが、その中のひとつはまるで宝石のようであった。

紅く輝くそれは弱々しく脈打ち生きている。それは鴉の核であった。

核こそが鴉であり、核の内に鴉という存在がいると言ってもいい。

激しく核が脈打った。鴉の内では何かが起こっている。

鴉は自分自身の中に封じられている。彼はそこから無意識の内に出ようとしていた。

意識は朦朧としている。辺りは暗闇に包まれ、五感は頼りに

ならなかった。

鴉が目を開けるとそこは花畑だった。辺り一面に咲き誇る花は蒼くきらきらと氷の結晶のように輝いている。

蒼い花が風に揺られ、いくつもの鈴の音が鳴り響く。

地平線まで続く花畑の真ん中で、鴉は空を見上げた。空は海中から見た水面のように揺らめき、その先には何かがあるが、揺ら揺らと動く空のせいでよく見ることができない。

空に黒い幕が下り、強風が吹き荒れる中で蒼い花が紅い花に変わった。

紅い花びらは天に舞い上がり、世界を燃やす。

突然鴉の身体が天に引きずられた。墮ちている、鴉は天に向かって墮ちていた。

天地が逆さまになり、鴉の身体は闇となった天に墮ちようとしていた。

鴉は翼を広げようとしたが、彼には翼がない。

翼を失った天人ラエルは墮ちることしかできなかった。

闇が徐々に近づいて来るにつれて、それが蠢いていることがわかり、それが蛭のような無脊椎動物の群れであることがわかってきた。あそこに墮ちれば苦しみの末に全てを失うだろう。

鴉が気づくと、彼の身体は見えない鎖によつて繋がれていた。迷いの中に生まれた魔物がその鎖を掴み、闇の中に鴉を引きずり込もうとしている。

頭上にある地に鴉は手を伸ばしたが、誰も彼を救ってはくれなかった。

闇の中に鴉が墮ちた。それはまるで泥の中に飛び込むような
感触で、闇が鴉の身体にべとべと纏わり憑いてくる。

心理に巢食う檻に鴉は捕らえられてしまった。

蛭のような闇たちが鴉に喰い付き、鴉の肉を剥いで内へと進
入する。

酷い苦痛で鴉は思わず叫び声をあげた。しかし、声が出ない。
闇が貪り喰われながら、鴉は手を伸ばした。

鴉の伸ばす手の先からは、白い羽根がいくつも揺ら揺らと降
って来る。

白い羽は暗闇の淵に捕らえられた鴉の頭上から、いくつもい
くつも降り注ぎ、鴉の周りにいる闇たちを溶かしていく。しか
し、溶かしていくのは闇だけではなかった

白い羽根が鴉の身体に触れるたび、鴉の身体は焼け爛れてい
く。

焼け爛れた肌は腐臭をあげて腐っていく。

鴉の腐った背中から黒い翼が生え、それは大きく広がって鴉
の身体を包み込んだ。

黒い翼は鴉のことを白い羽から守った。しかし、黒い翼は翼
ではなく、黒衣であった。

辺りに風を巻き起こしながら鴉が黒衣を広げた。

鴉の髪は風に遊ばれ、その風に運ばれた香が花をくすぐる。

天は眩く輝き、色取り取りの花が咲き誇り、小川の近くでは
白い翼を生やした者たちが神に贈る詩を謳っていた。そこは楽
園の名に相応しい場所のように思えた。

黒衣を広げた鴉が見た光景は夢幻の世界。遠い過去に見た光景であった。

鴉が眺める視線の先で誰かが会話をしている。

「わたくしは信じております」

そう言つて白い衣を纏つた女性が小川の辺に座る男性に声をかけた。

男性はゆつくりと女性の方を振り向いて微笑んで見せた。その顔は類稀なる美しさを持ち、天で最も輝ける者の称号も持っていた。その称号に相応しく、彼の持つ羽は黄金色に輝き、見る者を魅了する力を秘めていた。

「そのことについては明日にならねばわからぬ。全ての判断は審問会によつて下される」

「もし、それで地上ノリスに墮とされることになったら、わたくしは……」

「恐らく私は処罰を下され、地上ノリスに墮ちることになるだろう」

「ですが貴方は何もしていない！」

「それでも私は神の意志に従うのみ。それに私は何もしていないわけではない。いや、何もできなかったことが罪だ」

女性は黙り込み、涙を流しながら羽ばたいて行つてしまった。残さされた男性は小川のせせらぎに耳を傾けながら、ゆつくりと目を瞑つた。

遠くから眺めていた鴉の胸はきつく締め上げられ、彼の心は哀しみに溺れた。

鴉の頬を滑り落ちた雫は天の光を受けて輝き、雫の落ちた地

面は水面のように哀しく揺れた。

世界が液体と化し、鴉はこの世界から解き放たれた。

弾け飛ぶガラス片は砂のように宙を漂い煌き、床に放り出された紅い核は脈打つ。

紅い核が細胞分裂をはじめ、ぶよぶよと細胞が膨れ上がり肉体を構成していく。やがてそれはヒトの形を形成し、類稀なる美しい顔はまさに鴉のものであった。

生まれたままの姿でそこに立ち尽くす鴉。長い黒髪を靡かせ、引き締まった筋肉は決してゴツゴツとした感じではなく、美しくスリムであった。

鴉の身体が一瞬脈打ち、彼の背中から黒い翼が生え、それは黒衣に変わり鴉の身体を包み込んだ。

鴉は翼を失う代わりに黒衣を得た。黒衣は鴉の身体の一部であり、矛であり、盾である。しかし、それを捨てることはできない。鴉が黒衣を纏うのは彼に課せられた罰であり、呪いなのだ。

鴉は辺りを見回し、ここがキメラ生物の研究所らしき場所だということとは理解したが、それ以上のことはわからなかった。

疾風の如く走った鴉は金属のドアを蹴り破り廊下に出ると、そこはけたたましいサイレン音とともに赤いランプが点滅を繰り返していた。

金属でできた廊下に金属を叩き付けた音が大量に鳴り響いた。全長五〇センチほどの蜘蛛型ロボットの群れが川の流れのよ

うに鴉に向かって来る。

蜘蛛型ロボットは床だけでなく、壁や天井を歩き、まるで建物が蠢いているよう見えた。

鴉は蜘蛛型ロボットに背を向けて走り出した。廊下は一本道で逃げ場は一方しかなかったのだ。

蜘蛛型ロボットとの距離を離し走る鴉の前に、白いボディを持つロボットが立ち塞がった。

ロボットの足はキャタピラ型で、腰にあたる部分から上はヒト型になっている。そして、一方の腕は銃器となっていた。

建物のことなど関係なしにロボットから銃が乱射される。鴉はそれを躲しつつ、硬質化させた手でロボットの顔面を殴りつけた。

顔面を破壊されつつもロボットは巨大な手で鴉の胸を掴み、残った腕から銃を乱射させて鴉の身体を蜂の巣にしようとした。しかし、鴉は自分を掴んでいる腕をへし折って逃げると、その腕をロボットに目掛けて投げつけた。

投げつけられたアーム部分はロボットのボディをへこませはしたが、ロボットの動作性にはなんら問題はない。

ロボットの背中から巨大なバズーカ砲が出てきて、轟音を立てながらバズーカ砲は鴉に向かって発射された。

黒衣が鴉を包み守る。

金属の通路が黒くくすみ、黒衣を広げた鴉は瞬時にロボットに爪を向けた。

鋭い爪が何度も何度もロボットの身体を貫通し、火花を撒き

散らしながらシユートしたロボットは動きを止めた。しかし、鴉に脅威が迫る。

蜘蛛型ロボットの群れが鴉にいつせいに飛び掛かった。

群れを成す蜘蛛型ロボットは鴉に噛み付き肉を剥ぐ。黒衣が徐々にどす黒く染まっっていく。

鴉は表情ひとつ変えず素早く回転し、広がった黒衣は大きな鎌へと変わり、蜘蛛型ロボットが薙ぎ払われる。

蜘蛛型ロボットは地面に転がりシユートするが、壁一面には蠢く群れは鴉を狙っている。

計ったように蜘蛛型ロボットがいつせいに鴉に飛び掛かる。

地面を蹴り上げた鴉は廊下の奥へと走って逃げる。

金属を鳴らしながら群れが鴉を追って来る。

走っていた鴉の脚が後ろに引きずられ、片腕が大きく後ろに引かれる。鴉の四肢は蜘蛛型ロボットから吐き出された糸によって捕らえられていた。

鴉は腕に力を入れ、強引に巻きついた糸を引き破ると、すぐに手を硬化化して脚に絡みついた糸を断ち切った。

再び鴉に向かって糸が吐き出される。鴉は床を転がり避けると、再び立ち上がって走った。

蜘蛛型ロボットとの距離は広がっていくが、鴉の足が急に止まってしまった。

鴉の前に立ちはだかる壁。後ろからは蜘蛛型ロボットが迫ってくる。そして、右手にはドアがあるが、鴉の目に入ったのは左手にあったダストシユートであった。

ダストシユートの蓋を開けた鴉は、その中に勢いよく飛び込んだ。

滑り台のような坂を滑り降りた鴉は瓦礫の山に降り立ち辺りを見回す。

金属片やプラスチック、薬品の入ったビンなどが分別されずに捨てられている。効率を優先されたこのようなダストシユートにはリサイクルなどという概念はない。そして、このようなダストシユートの中には決まってある種の生物が飼われている。鴉の立つ瓦礫の山が大きく揺れた。

低い唸り声が部屋中に響き、生臭い臭いが地面の下から上がって来る。

鴉の立つ地面が揺れるとともに大きく下がり、瓦礫の隙間からギロリと輝く目が覗いた。

地面が激しく揺れ、瓦礫を噛み砕く音が鳴り響き、巨大な何かが瓦礫の山の下から姿を現した。

ナメクジのようにぶよぶよとした身体はヌメヌメとした粘液に覆われ、褐色の身体は一定の形を持っていないらしく、変幻自在に動き回る。通称ジャンクイーターと呼ばれるキメラ生物だ。

ジャンクイーターが臭い息を吐きながら大口を開けと、そこには鋼鉄をも噛み砕く三角形の刃が並んでいる。

伸縮自在の身体を活かし、ジャンクイーターが鴉に襲い掛かった。

鴉は飛び上がり、ジャンクイーターガシツと歯を鳴らし空に

喰らい付いた。あの歯で噛み付かれては鴉とて無事ではすまない。それにジャンクイーターの強靱な胃の中に放り込まれてもしたら、助かる見込みはまずないだろう。

黒衣を大きくはためかせながら、鴉は硬質化させた爪でジャンクイーターを切り裂こうとした。しかし、軟らかだったジャンクイーターの肉が硬く変化して鴉の攻撃を弾いた。

弾かれた鴉は暴れ回ったジャンクイーターに体当たりをされ、黒衣を靡かせながら瓦礫の山に叩きつけられる。

瓦礫に倒れる鴉の黒衣が蠢き幾本もの槍と化し、ジャンクイーターに襲い掛かる

ジャンクイーターは身体を硬質化させるが、槍と化した黒衣には通用しなかった。

闇色の槍がジャンクイーターの身体を串刺しにし、傷から出た粘液が迸り瓦礫を溶かす。

暴れ狂うジャックイーターは大きな口を開け、鴉を喰らおうとする

黒衣が激しく揺れる。鴉はジャンクイーターを見据える。次の瞬間、鴉はジャンクイーターにひと呑みにされた。

ジャンクイーターの胃液はありとあらゆるものを溶かす。その胃の中で鴉は生きていた。黒衣に全身を包むことによって、鴉はジャンクイーターの胃で生き抜くことができたのだ。

黒衣から闇色の針が幾本も飛び出し、ジャンクイーターの身体を内側から突き破った。

ジャンクイーターはのた打ち回り、胃液とともに鴉を吐き出

すと、ゆっくりと息を引き取った。

どこからか水の流れる音がする。

鴉は辺りを見回した。すると、微かに見える壁の下部が鉄格子になっていて、その鉄格子は人が寝そべって通れるほどの大きさで、その奥から水の流れる音がする。

鴉は瓦礫を掻き分けて鉄格子に手を掛けると、そのまま力強く後ろに引いた。頑丈な鉄格子はいとも簡単に外れ、鴉は小さな隙間に身体を滑り込ませた。

鴉が出た場所は帝都大下水道であつた。

オレンジ色の埋め込み式ランプが取り付けてあるが、下水道は薄暗くどんよりとした雰囲気が漂い、鼻を衝く強烈な臭いが汚水から立ち上がってくる。

帝都の大下水道は危険極まりない場所であり、帝都政府ですら立ち入ることを拒む。突然変異で体長一メートル、二メートルまで大きくなった巨大ネズミなどはまだ可愛いもので、下水に棲む大海蛇リヴァイアサンの全長は六〇メートルから大きいものでは一〇〇メートルにも達し、時には帝都に局地的な地震を起こすことで有名だ。

闇の奥からいくつもの生物が鴉のようすを窺っているが、出て来る気はないようだった。それどころか生物たちの気配が鴉から遠ざかって来る。

っ来る！

鴉は感じ取った。去って行く生物たちとは別に、鴉に向かって何か近づいて来る。

静寂の後、下水が波打ち、水面から切るように進む背鰭が見えた。

身構える鴉の瞳が見開かれる。

水面が波打ち激しい水飛沫が大気中に舞い、水の底から大きな何かが咆哮をあげながら姿を現したのだ。

水面から出ている部分だけでも一〇メートルを超えているであろう、その長い身体は蛇のようであるが、下水とは不釣り合いに美しい輝く透き通る鱗はゴツゴツとしていて、それはまるでオーロラの甲冑を纏っているようだ。

長い二本髭がまるでそれ自体が生きているように動いている。そうこれが帝都の下水に棲むキメラの中で最も出遭いたくない大海蛇リヴァイアサンだ。

氣勢をあげるリヴァイアサンの口には剣のような歯が並び、下は蛇のように忙しく動いている。

互いを見据える鴉とリヴァイアサン。先に仕掛けたのはリヴァイアサンであった。

唸り声をあげる大きな口が槍を突き刺すような動きで鴉に襲い掛かる。

円舞を踊るようにリヴァイアサンの攻撃を躲した鴉は、そのまま黒衣によってリヴァイアサンも首を断ち斬る。

巨大な首が地面の上に落ち、巨体は水飛沫を上げながら下水の中に沈んだ。しかし、まだ終わりではない。

驚異的な生命力を持つリヴァイアサンの頭部が口を開けて鴉に飛び掛かる。

鴉は黒衣を巻き上げるようにしてリヴァイアサンの髭を切った。するとリヴァイアサンは方向感覚を失うが、髭はすぐに生え変わる。そこで鴉は空かさず自分の手首を切って、滴り落ちる血をリヴァイアサンの口に垂らした。

リヴァイアサンの頭部が枯れていく。干からびて、灰になり、塵と化した。

鴉の血は生物にとつて有毒であり、リヴァイアサンはそれによつて塵となった。

水面が動いた。

再び身構える鴉。

激しい咆哮とともに水底からリヴァイアサンが現れた。先ほど水の底に沈んだリヴァイアサンが再生したのだ。

鴉に襲い掛かろうとしたリヴァイアサンであつたが、その動きが急に止まる。鴉も動きを止めて「それ」を感じていた。

目の前にいるリヴァイアサンよりも強大な何かが近づいて来る。

下水が海のような大きい波をつくり、鴉が頭から下水を浴びた。

けたたましい咆哮が下水道に響き渡り、巨大な影が水底から頭を出した。それは鴉が先ほどまで戦っていたリヴァイアサンの二倍はあろう、超巨大リヴァイアサンの頭部であつた。それを見た小さなリヴァイアサンは恐れを成して一目散に逃げ出した。

巨大なリヴァイアサンはギラギラと輝く瞳で鴉を見据え、ヒ

トの言葉をしゃべった。

「おまえが鴉か……随分と違うな……」

低く重々しい声が下水道の奥まで響き渡った。

リヴァイアサンを前にする鴉は無表情で、そこから彼の思いを窺い知ることはできなかった。

腹から唸り声をあげたリヴァイアサンは、その大きな瞳を鴉の目の前まで近づけて、臭い息を吐き散らした。

「鴉、俺がわかるか？ おまえも随分と変わってしまったが、俺も負けてはいないぞ」

「過去は捨てた おまえとは“初めて”会った」

「そうか、俺も楽園^{アケエ}を夢見るのは止めた。しかし……いや、いい。同じ墮天者^{ラエル}同士で争うのは莫迦らしい。今は俺とおまえは戦う理由がない、それでいい。それに俺が動くたびに上に被害が出てはヴァーツに目を付けられる」

ここにいる理由はない。鴉は踵をきびしてゆつくりと歩き出した。

鴉の背中にリヴァイアサンが声をかけた。

「知っているか鴉。もうすぐ地上^{ノース}におもしろいことが起きるぞ。おまえはどうするのだ、おまえは誰の見方だ？」

鴉は返事をしない。リヴァイアサンの言葉など耳に入っていないように歩き続ける。

無表情のまま歩く鴉の背中に大きな笑い声が届いた。

ベッド上で目覚めたファリスは部屋を見回し夏凜を見つけた。

朝食を食べ終えた夏凜は紅茶を飲みながらテレビニュースを見ている。

「おはよう夏凜」

「うん、おはよ。昨日はよく眠れた？」

「……うん」

昨日はショッピングをして、夕食をファーストフードで済ませた。玄関が破損し、窓が割れて雨が吹き込む部屋に戻るのが嫌で、夏凜は高級ホテルに泊まったが、いっしょにいたファリスは少し落ち着かなかった。

ファリスは大きな窓から外を眺めた。窓は高い位置にあり、地上を行き交う車が小さく見える。雨が深々と降っていて、空はどんよりとしていた。

テレビを消した夏凜がファリスに声をかける。

「朝食食べるなら運ばせるけど、どう？」

「うん、食べる」

夏凜は朝食を頼み、フロントに電話を掛けてからしばらくして、部屋のベルが鳴った。

食事が届いたのだと思った夏凜はドアに向かった。ドアスコップを覗くとボーイと食事を乗せたカートが見える。

夏凜がドアを開けるとボーイがカートに朝食を乗せて部屋の中に運んでくれた。

「ありがとう」

そう言っただけで夏凜がボーイにチップを渡そうとした時、ボーイが不可解な行動を起こした。

瞬時にジャケットの内から銃を抜いたボーイは、ファリスを捕まえ銃口を夏凜に向けた。

「動くな！」

叫んだボーイを見て夏凜は大きな欠伸をして眠そうな表情をしている。

「誰に向かって口を訊いているのかな？」

夏凜の手が素早く動き、突如現れた大鎌によってボーイの手首が切断され、銃と手が宙を舞った。

ボーイが怯んだ隙にファリスは夏凜の後ろに素早く隠れた。

床に転がった銃を拾おうとするボーイの手を誰かの足が踏みつけ、ボーイが上を見上げると、そこには可愛い表情をした夏凜がいた。

「殺すんだったら、さっきの一撃で殺ってるよ。ちょっとお話
がしたいの」

「話すことなんかない！」

「じゃあ、バイバイ！」

大鎌が振り下ろされる瞬間、ファリスは強く目を閉じた。暗闇の中で男の断末魔が聞こえた。

目を瞑っているファリスの手を夏凜が引いた。

「早く逃げるよ」

「どこに？」

「どっか」

夏凜はファリスの手を引っ張って半ば強引に部屋の外に出た。廊下に出たところで、遠くにいる男たちと夏凜の視線が合う。

次の瞬間には男たちは夏凜たちの方へと駆け出して来た。

ファリスの手を放して夏凜が大声を出す。

「全力ダツシュ！」

夏凜が先を走り、ファリスが後を追って走る。その後ろからは男たちが追いかけて来る。

エレベーターの横を抜け、非常階段に差し掛かった夏凜は下ではなく上に向かった。

「どうして下に逃げないの!？」

「そんな普通なことしないの」

階段を上りきった夏凜は屋上のドアを蹴破って外に出た。

屋上は強い風が吹き荒れ、雨が二人に吹き付ける。ファリスには逃げ場があるように思えなかった。

「こんなとこに来てどうするの!？」

「ついて来て」

夏凜は大鎌でフェンスを切り裂いて下を覗いた。

地上は遥か下。人や車の往来が激しい道路が小さく見える。

夏凜が呟く。

「飛ぶよ」

この言葉を理解するのにファリスは少し時間を要した。

「えっ!? どういうこと?」

「そのまんま」

「無理だよ!」

屋上のドアから銃を構えた男たちが流れ込んで来た。もう、逃げ場はない。しかし、飛び降りるなど無謀だ。

「アタシは人間じゃない。行くよ！」

夏凜はファリスの身体を抱きかかえて屋上から飛び降りた。落下する二人を風が煽り、轟々という音が耳に響き渡る。

あまりの恐怖にファリスは顔面蒼白になり、叫び声すら出せない失神寸前だった。それに引き換え夏凜は微笑んでいる。

地面が見えて来た。落ちて来る二人に気が付いた人々が指差して目を見開いている。

「衝撃に備えて！」

夏凜はそう叫んだが、もはやファリスの耳には届いていない。激しい音が鳴り響き、コンクリートの地面が激しく砕け飛び、揺れを起こしながら夏凜は着地した。

「さすがに今のは身体の芯まで痺れたあゝ！」

「……………」

ファリスは放心状態だった。夏凜が地面に下ろしてもまともにならず、結局夏凜に担がれながらこの場から逃げた。

夏凜は路地裏に入り、物陰にファリスを下ろして自分も壁に凭れ掛かりながら座った。

「大丈夫、精神は還って来た？」

「……………うん」

ファリスは小さくうなずいて見せたが、目の焦点が合っていない。

「ぜんぜん大丈夫じゃないじゃん」

「……………大丈夫、少しずつ落ち着いてきた」

徐々にファリスの心臓はゆっくりと脈打ち出し、呼吸も静か

になつてきた。

ファリスはゆっくりと息を吐きながら空を見上げた。細いピルの一筋の隙間から、微かに灰色の空が見え、雨が顔を濡らす。どうしてこんなことになつてしまつたのだろうと、ファリスが考えていると、横では夏凜がため息をついていた。

「もお、今日もサイテー。あのホテルには二度と泊まれないし、追いかけられるし、服は汚れるし、雨には濡れるし、しかも清掃員の仕事無断欠勤決定だよお」

「どうしてホテルにあんな人たちがいたんだろう。夏凜が誰かの恨みを買つたとか？」

「バカでしょアナタ。明らかにファリスを狙つてに決まつてるじゃん」

ファリスは酷く驚いた表情をした。自分が狙われるようなことがあるとは思えなかつた。

「そんな、どうして？ 夏凜なら仕事のトラブルとかでわかるけど、あたしが何で？」

「あのボーイに化けてた奴はファリスを捕まえて、アタシに動くなつて言つたでしょ？ アタシを殺すなら動くなつて言う前に銃で撃つただろうし、あいつはファリスに銃を向けずにアタシに銃を向けた。アタシに用があつてファリスを人質に取るなら、ファリスに銃を向けるでしょ。だから、たぶん用があつたのはアタシじゃなくてアナタだと思つ。勘だけどね」

ファリスが狙われたのかもしれないが、理由が思い当たらない。

「狙われるような覚えはないよ」

「本当に？」

「ないって、夏凜が狙われたんだよ」

「まあ、どつちでもいいや。それよりも、これからどうするか
が問題。ホテルに泊まっているのがバレるくらいだし、しかも
ボーイに変装して襲撃に、男たちが持っていた銃はいい代物だ
った。それなりの組織に狙われちゃってるのかもね。そーなる
と、ここがバレるのも時間の問題ってことになるね。最近の偵
察衛星って高性能でイヤになっちゃう」

「じゃあ、早く逃げなきゃ」

「どこに？」

それを問われてファリスは黙り込む。ファリスには行くところ
もなければ、頼る人もいない。強いて言えば目の前にいる夏
凜くらいが頼れる人だった。

ファリスが返事を返さないのを見て夏凜が口を開く。

「逃げ込む場所の候補はいろいろあるけど、その人たちにあま
り迷惑かけたくないし、逃げ隠れしていてもダメ。アタシなら
敵を完膚なきまでにやっつける」

悪戯な笑みを浮かべた夏凜は立ち上がった。ファリスもそれ
につられて立ち上がる。

「どこに行くの？」

「まずは電話。ケータイホテルに置いてきちゃった。で、財布
も置いてきちゃったから、お金の調達をして、服を買う」

「はっ？」

「ファリスはこんな事態に、と思った。

「何か疑問でもあるなら受け付けるよ」

「服なんか別にいいじゃん」

「レディーの嗜み」

「夏凜って男でしょ？」

「それについてもそのうち詳しく話す」

そういえばと思い、ファリスの頭にある言葉が思い出される。あの時は動揺していて聞き違えだったかもしれないが「アタシは人間じゃない」と夏凜が言ったような気がする。もしか

「夏凜ってアンドロイド!？」

「はあ、何言ってるの？ そんなこと言っていないで早く行くよ」

夏凜は呆れ顔をしながら歩いて行ってしまった。ファリスは慌てて夏凜の背中を追った。

人々が傘を差す中、二人は雨に濡れながら街中を歩いた。追っ手が来ているようすはないが、油断は許されない。

ファリスは再びこの質問を投げかけた。

「どこに行くの？」

「だから、電話を掛けられるところ探してるんだけど。やくめた、電話じゃなくてタクシーに乗る」

「お金ないんでしょ？」

「あとで払えば済むから大丈夫」

夏凜は道路に出てタクシーを止めた。

びしょ濡れの二人を見て運転手は嫌な顔をしたが、相手が夏

凜だとわかり態度を変えた。

「夏凜さんですよね？」

「うん、そうだよ。今はお金持っていないんだけどお、着いたら
払うから乗せて」

「いいですよ、どうぞ乗って下さい」

びしょびしょの二人が後部座席に座ると、シートもびしょび
しょになったが、運転手は嫌な顔ひとつしなかった。

「雨の中大変でしたね、タクシーの中なら濡れなくて済みます
よ、当たり前ですけどね」

声を出して笑う運転手に合わせて夏凜も楽しそうに笑って見
せた。横にいるファリスは夏凜の二面性を見て苦笑いをした。

二人を乗せたタクシーは大きな洋館の前で止まった。

絢爛豪華な装飾の施されたバロック建築の屋敷。この辺りで
は有名な屋敷だ。特に魔導に関するものならばよく知っている
場所だ。

タクシーを鉄門の前に待たせた夏凜はファリスとともに屋敷
の敷地内に足を踏み入れた。

蔓の生い茂った鉄格子の門を潜るとそこには、白い女神の石
像の置いてある噴水に出る。この噴水の水は聖水であり、魔物
や悪魔などの類をこの一帯に寄せ付けない魔除けの力を持つ。

夏凜はこの噴水の横を通る時、いつもなぜか気分が悪くなる。
足早に夏凜は噴水の水を通り抜け、屋敷の玄関まで辿り着き、
呼び鈴を鳴らした。

「マナちゃんいるっ？」

しばらく待ったが返事がない。

この洋館の主人は海外に出かけることが多く、家を空けることが多い。今も外出中なのかもしれない。

ややあつて、扉が軋む音を立てながら開き、蝟燭を手に持った小柄な少女が現れた。

少女はゴシック調の黒いドレスに身を包み、長く美しい金髪を腰まで垂らし、蒼く透き通る瞳を上目遣いにしながら夏凜をまじまじと見つめていた。

「夏凜様、こんにちは。何用でございましょうか？」

「アリスちゃん、お金貸してえ」

機械人形アリス。機械仕掛けである彼女は自称超人天才魔導士マナの自宅である洋館に住み込んでいるメイドのような存在である。

「御話はお伺い致します。どうぞ中へ御上がり下さい」

胸に手を当て軽く会釈をしながらアリスはもう片方の手で夏凜を洋館の中へと招き入れた。だが、夏凜は屋敷の中に入ろうとしないで、遠く道路を指差した。

「お金がないのにタクシーに乗っちゃったの。だから、立て替えて置いて」

「承りました。夏凜様はいつもの部屋でお待ちになってください。コード000。二〇パーセント限定解除。コード002 シールド 召喚^{コール}」

光り輝く シールド を傘代わりにしてアリスは鉄門へと向かって行った。それを見送った夏凜は屋敷の中に入り、ファリ

スもその後が続いた。

屋敷の中はシャンデリアによって煌びやかに照らされ、玄関ホールは天井が高く、目の前には上る箇所が双方にある階段が交差しながら二階へと伸びている。下を見ると華をモチーフにした昏い色の絨毯が敷き詰められている。

夏凜はここに何度も来ているようすで、広い屋敷の中を迷うことなく進んでいく。

長い廊下を抜け、客間についた夏凜はソファアに座った。ファリスはソファアには座らず、部屋に置いてある調度品や高級そうな置物を眺めていた。

しばらくして、ファリスが二着の洋服と大き目のタオルを持って現れた。

「ひとまずこのご洋服にお着替えになられてください。すぐに服を洗って乾燥してまいります」

ファリスに着替えとタオルを渡されたファリスは夏凜の顔を睨んだ。

「あつち行つて、絶対こつち見ちゃダメだからね」

「別にファリスの裸なんて見たくないから平気。見るんだったら、もっと可愛い娘かカッコイイ男の人じゃないとお」

少しにやけた夏凜にファリスの投げたタオルが直撃する。

「早く向こう行け、変態！」

「変態とは失礼な」

夏凜は怒って部屋を出て行った。

乾燥機によって乾いた服に着替え終え、テーブルに着いてお菓子と紅茶を飲みながら、夏凜とファリスはアリスにこのあらましをざっと話し終えた。

アリスは深く頷いた。

「^{マスター}主人が外出中なので、私がお金を工面いたしましょう。それで、これからどうなさるおつもりでしょうか？」

出された紅茶を飲みながら、夏凜は宙を仰いだ後に答えた。

「ファリスを狙った相手についてははつきりとわからないから保留。今は昨日の借りを返しにユニコーン社に行ってみるつもり」

夏凜に意見を求められるように視線を向けられたファリスは、口いっぱいに詰め込んでいたクッキーを紅茶で流し込んで、息を吐いた。

「そのユニコーン社にあたしと夏凜で殴り込みに行きたいんだけど？」

「実際に行くのはアタシひとりでもいい。ファリスはここにいた方が安全だから。そーゆーわけでえ、アリスちゃんにファリスの面倒を見てもらいたいんだけどお？」

「よろしいですよ」

ニッコリと微笑んだアリスだったが、ファリスは椅子から立ち上がって大きな声を出した。

「あたしも行く！」

「足手まといになるだけ」

さらっと言った夏凜にファリスは少し頭に來た。自分が足手

まといになることはわかっているが、それでも一緒に連れて行って欲しかった。

「あたしも行くの！」

「だ〜か〜ら〜、足手まといになるって言うてるでしょ〜。アタに何ができるの、言えるものなら言ってみて」

「……行ってみなくちゃわからないよ」

行ってみなくてもファリスにはわかっていた。自分には何もできない。最悪、殺されてお仕舞いだろう。それでも、行きたかった。

困った表情をしているファリスを見て夏凜が嘲笑う。

「ほら、そんなことじゃ足手まといになるだけ。だから、ここにいるのが一番なの。マナちゃんは留守だけど、アリスちゃんも強いから、どんな敵が来てもへっっちゃらだし」

「私を頼られても困ります。主人の屋敷で敵と戦うわけにはいきません」

アリスは魔導師によって造られた戦闘兵器であり、その実力は計り知れない。そのことを知っているからこそ、夏凜はファリスをここに置いて行こうとしたのだ。

「この屋敷が全壊することになっても、アタシからマナちゃんにちゃんと話しするから平気平気だから、敵が来たらコンテンツパンにしちゃってね」

席を立ててどこかに行こうとする夏凜をファリスが呼び止めた。

「待って、ホントにひとりで行っちゃうの？」

「当たり前でしょ。アタシとアナタじゃ住む世界が違う。アナタは普通の人間でも、アタシは違うから、だから敵と戦える」
「でも！ あたしが行かないと意味がないの。そうしないと、一生後悔すると思う」

「死んでもいいなら来てもいいよ　でも、アタシは思う。刺し違えて復讐するなんてバカじゃない？　アタシはアタシのために生きてるから、刺し違えるなんてしないの。死んだら楽しいことも悲しいことも味わえなくなるからね」

夏凜の話聞き終えたフアリスは席を立って反論を唱えた。

「それは違うよ。死んでもやらなきゃいけないことであるの。死んだ　ホーム　の人たちのためにも、あたし自信が何かをしなくちゃいけない」

「あっそ、死んだ人のことなんてアタシにはカンケーないね。アタシはアタシのために生きてるって言ったでしょ？」

「でも、　ホーム　を奪われて住むところがなくなっちゃった人が、この都市のどこかにいるから……その人たちのためにも……」

「アタシだったら死んで誰かのために何かを果たすくらいなら、自分のために生きるね」

「なんで!?　違うの……だから……」

フアリスは泣きそうな表情になり、何を言ったらいいのかわからなくなった。夏凜と自分が思っていることは違う。でも、自分の気持ちを夏凜にもわかって欲しい。それなのに夏凜は否定ばかりする。

泣くつもりなどないのに涙が零れてきたファリスに、アリスがそつとハンカチを手渡してくれた。

「私にはどちらが仰る意見が正しいのか判断しかねますが、夏凜様がついて来てもいいと仰りました。夏凜様と意見が合わなくとも、夏凜様はファリス様にチャンスは下さつた。あとはファリス様の判断次第ではないでしょうか？」

頷いたファリスは夏凜を見つめた。それを見た夏凜は薄く笑い椅子を指差した。

「じゃあ、なるべく死なないように準備しなきゃね。アリスちゃん、ファリスでも使える魔導具をチョイスして」

「承りました」

アリスはお辞儀をして部屋を出て行った。

夏凜は椅子に再び座り、ファリスも椅子に腰掛ける。

ティーポットから空いた二人分のカップに夏凜が紅茶を注ぐ。「え」と、ファリスの分の魔導具の料金は給料から引くからな。そうすると当分の間ただ働きになるけどいい？」

「うん、食事と寝るところさえあればいい。それだけあれば給料なんて別にいいよ」

「じゃあ、一生ウチでただ働き」

「それは嫌」

「ワガママだなあ」

夏凜は笑うと、息を天に向かって吐いた。これからしばらくの間、ファリスと暮らすのかと思うと、とてもおもしろい気がした。そして、一緒に暮らすのであれば、あの話もしなくては

いけないと思ひ、夏凜は急に真剣な顔になった。

「話して置きたいことがある」

「何を？」

「キメラ生物って知ってる？」

「なんとなくだけど」

ファリスの認識でのキメラ生物は怪物でしかない。

夏凜はファリスの顔を見つめて黙り込んだ。そして、しばらくしてため息を吐き出すように言葉を吐き出した。

「あんな物と一緒にされるのは侵害だけど、アタシもそんなもん。ある魔導師に魔導手術の実験台に無理やりされて、悪魔と呼ばれる存在の力を得たの。それに加えて、あのクソ魔導師はアタシの身体を男にしたの、信じられる？ そっちの方が性格に合ってるなんて言ってる……」

「えっ、どういうこと……？」

ファリスはいつか夏凜が言っていた『アタシは人間じゃない』という言葉を思い出す。だが、ファリスにはいまいち理解がでなかつた。

「だから、アタシに向かって“男”って今後一切言わないでね。知らない人に言われたら、笑って済ますけど、知ったアナタに言われたらキレルから、覚えて置くよくに。質問は一切受け付けないからね、今後これについて話をするかはアタシ次第」

「でも、どうして男に？」

「だから質問は受け付けないうって言ったでしょ」

「……わかつた」

口ではわかった言いながらも、聞きたいことは山ほどある。

夏凜は何かを思い出したように手を叩いた。

「そうだ、あとアタシに能力についても少しだけ教えといてあげる。アタシの能力は身体の硬質化させることと重さを自由に変えること。あの時ビルから飛び降りた時には身体を硬質化させたの。普段は自分ひとりだったら身体の重さをゼロに近くするんだけどね、硬質化にも限界があるから。他にもいろいろあるけど、企業秘密。あつ、そうだ、それから、もう一つ大事なことがあるんだけど、他言しないと誓って」

「えっ、うん、誓う」

「ホントにいい？」

「誓うよ」

「満月の晩には普通の女の子になるの、これはアタシの最大のヒミツ。この時に敵に襲われたら堪ったもんじゃないからね。絶対他言しないでよ、したら殺すからね」

殺すと言うのは本気であった。この秘密が多く敵に知られてもしたら、夏凜の命がいくらあっても足りないだろう。夏凜は自分の命に関わる話をフアリスにしたのだ。

フアリスにも夏凜が自分に話してくれた秘密の重みがわかった。それとともに、その話を自分にしてくれたことが嬉しかった。

しばらくしてアリスが一つの木箱を持って現れた。

「こんな物しかありませんでした」

アリスはテーブルの上に置いた木箱の蓋を開ける。木箱の中

には紅い布に包まれた何かが入っていた。その布をアリスが丁寧に取り払うと、中から装飾の美しい銃が現れた。

この銃はアリスの主人である魔導師マナがつくり出した魔導具である。

銃を手にとったアリスはホルスターと一緒にフアリスに渡す。「使用の仕方は普通の銃と同じですが、銃は扱えますか？」

「うん、まあなんとか」

フアリスの言葉に頷いたアリスは説明をはじめた。

「使用方法は普通の銃と同じですが、弾は無限で御座います。ですが、エネルギー源は魔導であり、サラマンダーと呼ばれる存在の力を借りて炎の玉を出しています。そのため、条件が悪い場合に使用ができなることが御座いますのでお気をつけください」

銃を物珍しそうにフアリスは見てアリスに質問をした。

「条件つて何？」

「簡単に言いますと、サラマンダーの気分次第でございます。弾が出なくなることは早々あることではありませんので、ご心配なさらずにお使いください」

フルメタルのボディに紅蓮の炎がデザインされている銃。その銃の形状はセミオートピストルで握りに弾倉を差し込むタイプになっているが、その部分が外れることはなく、あくまでデザインだった。

アリスの耳が微かに動く。

「 来客です。ですが、不法侵入の招かれざる客のようで御

座います。それも多勢の乱暴者たちのようで御座いますね」

アリスの耳はこの屋敷に侵入した者たちを感知していた。

この屋敷は特殊な魔導結界によって守られているはずだった。妖物やキメラ生物の類は庭にも立ち入ることができず、人間なども中から入り口を開かない限り、外から進入できないはずだった。

夏凜は大鎌をどこからか取り出し構える。ファリスも受け取った銃を構え、辺りを見回しながら呼吸を落ち着かせる。

窓と扉が同時に打ち破られた。流れ込んで来る戦闘員。ライフルがファリスたち向かっていつせいに構えられた。

夏凜が不敵に笑う。

「敵意丸出し、つまり敵ってことだねえ。アリスちゃんに任せるから、屋敷が破損したらアタシのところに請求しちゃっていいからね」

夏凜は敵から目を離さないようにファリスに近づこうとしたが、銃弾が夏凜の足元に打ち込まれ、歩くことを妨害された。

機械人形の口元が微かに動く。彼女は何かを小声で唱えていた。

「コード000アクセス　　八〇パーセント限定解除」

コードを唱えるアリスに気が付いた夏凜は急いでファリスに近づき、ファリスの身体を抱きかかえると発射される銃弾を死ぬ気で避けながら敵を掻い潜り、窓から外に逃げ出した。

アリスが不敵に笑い、高らかに声をあげる。

「コード008アクセス　　シヨックウェーブ　発動！」

水面にできた波紋のようにアリスを中心として空気が震える。家具が揺れ、シャンデリアが砕け散り、戦闘員が持っているライフルが暴発する。戦闘員たちは床に転げまわりながら身体を痺れさせて振るえている。

「コード002・005・006・007・013連続アクセス シールド 召喚^{コール}・ウイング 起動・ブリリアント 召喚^{コール}・メール 装着・シザーハンズ 装着」

アリスは手に シールド を構え、背中には黄金に輝く骨組みだけの翼、身体の周りには四つの球体がダイヤのようにきらきらと輝きを放っている ブリリアント が浮かんでいて、右手には鳥の嘴のような鉤爪が装着された。

「屋敷中に塵が散らかっているようでございますね。主人がお帰りになられるまえに掃除をいたしましょう」^{マスター}

ふわりと宙に浮いたアリスは、そのまま上空を高速で飛んで部屋を出て行った。

底なし沼の大地。紅蓮の炎でできた雲。稲光の走る黒い空。

闇色の翼を大きく広げ、ゾルテは出口を探して夢幻の世界を彷徨っていた。

泣き叫ぶ風がゾルテの耳を腐食するが、驚異的な再生力によって元に戻る。しかし、痛みはある。すぐに再生するといっても、痛みは人間と同じように感じるのだ。

ゾルテの身体には大量の蟲が群がっていた。黒い蟲が蠢いている。振り払っても、振り払っても、すぐにゾルテの身体を覆

つてしまい、やがてゾルテは振り払うことを止めた。

蟲はゾルテの肉を喰らい、内臓を喰らう。それでもゾルテは死ぬことなく、ただ苦痛に耐えるのみであった。

底なしの沼から次々と黒い触手が現れ、それはゾルテの行く手を塞いだ。黒い触手は十メートル以上の長さがあり、太さは一メートルほどだった。天を貫く先端には楕円の穴があり、そこにはギザギザした歯が並んでいる。

黒い触手に囲まれたゾルテは大きく両腕を広げた。

「滅す！」

ゾルテの言葉とともに轟々と黒い風が巻き起こり、黒い触手が沼から引き抜かれ、ゾルテの周りで竜巻となつて回った。

回り続ける黒い触手は身体を引き千切られ、黒と赤の破片が上空に舞い上がり、地面に落ちた。

「余を誰と心得る！ このような空間に閉じ込めおつて、許さぬぞ、決して許さぬ！」

ゾルテは炎で身を焦がしながら飛び続けた。

どこまでもどこまでも広がる空間。果てなどあるのだろうか？

沼から時折、炎が吹き上げ、遙か遠くからは呻き声が聞こえてくる。

陽の光はなく、人間ならば凍え死ぬ寒さがゾルテを襲う。

天などないのに天から煌く星が降り注いでくる。

針に覆われた幾つもの星がゾルテに直撃する。ゾルテは避けることをしなかった。数の多さから避けられないことは判りき

っていたし、避ける気すら起きなかった。

ゾルテは傷つき、大量の血を流す。身体に取り付いた蟲たちもいる。これでは再生のスピードも遅くなっていく。ゾルテは骨になるうとも、空を飛翔し続けた。

多くの血を失ったことで、ゾルテは急激な渴きに襲われる。しかし、ここには聖水エイセスなどなく、永遠に渴欲が付きまとい、喉を掻き毟りたくなる。

そして、ついにゾルテは壁に到達した。

光り輝く門が見える。その傍らには何者かが立っていた。

ゾルテはすぐさま門に近づき、そこいる者を見定めた。

門の傍らにいたのは女性であった。女性と言っても、姿は人ではなかった。

上半身は女体であったが、下半身は鱗に覆われて醜く、とぐろを巻いたそれはまさに蛇そのものであった。

ゾルテはこの者は何者なのかと訝った。

「凄惨な姿をした異形の者よ、貴様は何者だ。門番ならば余に道を開けよ、さもなくば灰と化して塵となる運命を負うことになるぞ！」

大胆な態度でゾルテは異形の者に詰め寄るが、異形者として負けじと冷然たる態度でゾルテを睨みつけた。

「何人たりともこの門をお通しするわけにはいきません
ルシエ」

いと高き楽園アケエにいた頃のゾルテの名　それがルシエ。

「なぜ余の名を知っている!？」

「まさか、貴方までもがここに投獄されようとは思いませんでした。わたくしをお忘れですかルシエ。無理ありません、今のわたくしはこんなにも醜い姿に成り果ててしまいました」
「まさか、貴女は！」

異形の者の微笑みは崇高さを感じさせた。

「やっとおわかりになりましたか。楽園^{アケエ}での長閑な日々が懐かしい。しかし、アズエル様が“鴉”の烙印を押されてしまったから、全ては変わってしまった」

「貴女は鴉が地上^{ノリス}に墮とされた後、審問官たちに抗議をして貴女も地上^{ノリス}に墮とされてしまったと聞いていた」

「確かにわたくしは審問官に抗議いたしました。ですが、わたくしに与えられた罰は地上^{ノリス}に墮ちることではなく、この門番をすることだったのです」

ゾルテは目の前にいる嘗ては美しき天人^{ソエル}だった者を見て酷く悲しんだ。

罪を犯した者は地上^{ノリス}に墮とされ、大罪を犯した者は 裁きの門 の審判を受ける。それ以外の罰はないはずだった。では、なぜこの門番はここにいる？

ゾルテは肩を大きく下げて深くうなだれた。

「天は何をしたいのだ。やはり、天の真意は天人^{ソエル}が思っている理想とは違うようだ。余も楽園^{アケエ}では崇高な地位にいた。しかし、それでも偽りばかりを教えられてきた。もはや、天は信じられん。だからこそ、余は余の理想のために地上^{ノリス}に墮ちた」

「ルシエは自らの意思で地上^{ノリス}に墮ちたのですか、なぜ？」

「地上を這つて生きる者、それが第二のヒトである地人だ。嘗て樂園に叛逆者が現れた時、そ奴らは新しく創造された地上とこの空間に閉じ込められた。そして、神と呼ばれる存在は他の天人たちにも罰として、“渴き”を与えた。自然の摂理から外れた存在であった天人が食物連鎖に組み込まれたのだ。ノエルの聖水を糧として生きている天人だが、生物の頂点に立つのは我ら天人だと信じていたしかし、違うらしい」

「貴方は神に刃向かう気なのですか？」

「余は神など信じてはおらぬ。天は体制であり、その体制によつて樂園の秩序は守られている。しかし、その体制は余の望むものではないようだ。天の体制はノエルこそを いや、ノエルの中から生まれる第三のヒトこそを真の支配者として世界に君臨させる気なのだろう。全ては余の勦に過ぎぬが、余と同じ考えを持つ者が多くいることも事実」

ゾルテは自分よりも下等だと思つていた存在に支配されることが屈辱であつた。ノエルは天人の糧でしかない、とゾルテは今でも思っている。そのことを地上でのうのうと生きているノエルたちに思い知らせねばならない。

樂園で聖水が創られるようになってからか、太古に比べてノエルの数は増殖している。地上を支配しているのは他でもないノエルだ。そのこともゾルテは気に喰わなかつた。

天人の絶対数は増えることがない。その代わりに“死”というものも最初はなかつた。しかし、樂園で叛逆者が現れた後、天人に“死”が与えられてからというもの、天人の数は徐々に

減少している。幾星霜を経るかはわからないが、いつか天人^{ソエル}はひとりもいなくなる時代が来るだろう。

ゾルテは神を否定するが、神を憎んでいた。

「神がいたとしても、その存在は全知全能でもなければ善なるものでもない。それを貴女は信じ敬うというのか？」

「神はわたくしたちをお創りになられた」

「だから何だというのだ、そのような証拠はあるまい。余は余の意思を持っている。わかつたらその門を開けてくれ」

「それはできません」

「なぜだ！」

ゾルテは憤怒した。しかし、開けられないというのは事実であつた。

「わたくしには門を開ける術がないのです。この門には鍵がない」

「貴女は門番ではないのか？」

「わたくしは門番です。見えない鎖で繋がれ、門から離れることが許されない。わたくしは貴方と違いここに棲むモノたちに襲われることはないのです」

門番はゾルテに群がる蟲を見てそう言った。確かに門番には一匹たりとも蟲が寄り付いていない。そして、門番の役目は門を守ることはなかつた。

「わたくしの役目はこの空間を見つめ続け、ここに囚われた全てのモノたちを見つめ続け、哀しみにくれることなのです。ですから、ルシエが門を通りたいと言うのでしたら、わたくしは

止めません。しかし、門は一方通行であり、向こう側からしか開けることしかできない。嘘だと思っのならばお試ください」

ゾルテは門番に言われるままに門の前に立ち力を込めて門を打ち破ろうとした。

衝撃とともに世界が揺れ、ゾルテを覆っていた蟲は吹き飛ばされ、雷鳴が轟いた。

「クツ……ググ……」

ゾルテの顔が苦悩に歪む。彼の両腕は吹き飛んだが、門はびくともしなかつた。

門には鍵穴はなく、ゾルテを拒み。門番はいるが、それは門を守っているわけではない。門は向こう側からしか開くことはない。

ゾルテはその場に呆然と立ち尽くした。彼には門を開ける術がなかつた。

「余はここで死ぬことも許されず、永遠に囚われたままなのか……？」

「多くの者が、この門を訪れました。しかし、何人に対しても門は開くことを拒みました」

「ならば、余を殺してくれ。天人^{ソエル}は自ら死ぬことができないように、魂にそのことが刻まれているのを貴女も知っておるであらう」

「それはわたくしにはできません。裁きの門^{ソエル}の中では天人^{ソエル}を殺めることができませんように魂に刻まれるのです」

力を失ったゾルテは落下した。

ゾルテの身体は底なしの沼の中に飛び込み、沈みゆく。墮ちても墮ちても底はない。

沼の中にはゾルテを喰らう魚のようなモノがいた。魚はゾルテの核には決して手を出さない。ゾルテを殺してはくれないのだ。

強烈な光が沼に落下し、汚泥を吹き飛ばすとともに上に伸びる光の道をつくり出した。

墮ちていくゾルテの腕を何者かが掴んだ。

「我が子よ、お前にはまだやるべきことがある」

光に包まれた存在がゾルテの身体を沼の底から引き上げる。

ゾルテは自分を助けた者を睨みつけた。

「なぜ余を助けるのだ。貴様は何者だ！」

「余はルシエル。お前の元となった主だ」

「主とはどういうことだ、貴様は神だともいうのか!？」

「余は余でしかない。お前は余の身体から生まれた、云わば余の分身である」

「わからぬ、貴様の言っていることは余には理解できん」

「天人ソエルの祖となった者とも言うっておこう。最初の者である余たちは今の天人ソエルよりも多くの能力を持つのだ。天人ソエルの多くは最初の者たちの複製でしかなく、その能力は最初の者に比べ劣る」

沼を抜けた先では門番が顔を手で覆い、ルシエルに恐れおののいていた。

「なぜ門が開かれたのですか!? 門を開いた貴方はいったい何者なのですか?」

門は開かれていた。門の外から大量の光がこの空間に差し込み、遙か遠くまで照らし輝かせる。その光を見た者たちが軍勢となつて押し寄せてくる。

外に出るチャンスが訪れたことを知る罪人たちは我先にと門を指す。

ルシエルが鼻で笑つた。

「まだその時ではない、救世主が現れるまで貴様らにはここいいてもらおう」

身体の前に突き出されたルシエルの手から光の壁が現れた。現れた壁の高さは永遠を思わせ、壁は光速で動き出し全ての罪人を押し流した。

ゾルテは理解できなかつた。そして、悔しかつた。自分は誰かの掌の上で踊らされているのでは、と考えたのだ

「放せ、余を放すのだ!」

叫ぶゾルテに対してルシエルはただ不敵な笑みを浮かべるだけだつた。

「放せというのか、愚か者が。ここに永遠に囚われている気か? 余と来るがよい」

ルシエルはゾルテの腕を強引に引き、開かれた門から発せられる光の中に飛び込んだ。

二人が門に飛び込んですぐに、門は重々しい音を立てながら閉じられた。

門番は顔を覆って泣き叫んだ。恐ろしいことが起きた。未だ嘗てないことが起こってしまった。それは何かが起こる前兆としか考えられなかった。

裁きの門を開くことができる者は限られているはず。門を開くことができる者は天人ソエルを罰する立場にある者のはず。では、なぜにゾルテを外に連れ出すようなまねをした。そもそも、裁きの門を開けることのできる者でさえ、その中に入ることはできないはずであり、中に入れたとしても外に出ることはできないはずであった。

雨が降り続く中、ファリスを抱えながら走る夏凜が怒鳴り散らす。

「つたく、雨降ってるし、戦いに巻き込まれたら服が汚れるし、まだお金貸してもらってなかったのに！」

「そんなこと言っていないで早く逃げなきゃ」

「ファリスに言われなくなつたつてわかつてる。それにアタシのこの屋敷の敷地ないじゃ力が封じられて、分が悪い」

走り続けた夏凜は屋敷を囲う鉄格子の前まで来た。普段の夏凜ならばファリスを抱えて楽々飛び越えることができるだろうが、今は無理だった。

夏凜は息を切らしながらファリスを地面に降ろし左右を見渡した。

「門での待ち伏せは基本だけど、そこ以外に出る場所がない。どうするファリス？」

「どうするって聞かれてもあたし困るよ」

鉄格子の壁はジャンプして登れる高さではなかったし、鉄格子の先端は槍のように尖っている。

「夏凜見て！」

フアリスが後方を指差した。追っ手が迫っていた。この場で立ち尽くしている暇はない。夏凜は大鎌をどこからか出して大きく振りかぶった。

金属音が鳴り響き、大鎌は鉄格子に弾かれた。

「手が痺れたじゃん。やっぱ普通の鉄格子じゃないし、切れるわけないじゃん」

夏凜が逆切れして喚き散らしている間にも追っては迫っていた。

フアリスは夏凜の腕を掴んで強引に走り出した。

「逃げなきゃ！」

「アリスちゃん助けに来てっつ！」

爆音と共に発射された魔導弾が光の尾を引きながら追っ手に襲い掛かる。その光を見た夏凜は、それがすぐにアリスが発射した コメット と呼ばれるロケットランチャーだということがわかった。

轟々と地面ギリギリに飛ぶ魔導弾は、大地を剥ぎ取り、風を巻き起こす。巨大な光は追っ手を呑み込み、そのまま夏凜たちの横を掠め飛んだ。その反動で夏凜は巻き起こった風によって大きく飛ばされた。

「この機械人形がっ！ アタシらまで殺す気!？」

地面に倒れた夏凜は身体を泥だらけにしながらずさま立ち上がり、近くに倒れているファリスに手を貸して立たせると、再び走り出した。

追っ手の姿は今のところは見えないが、いつどこで出くわすかはわからない。

正面門まで辿り着くと、そこにはやはり敵が待ち伏せをしていた。そこにいたのはハイデガーだった。それもひとりですわいていて、屋敷の敷地内に入ってくるようすはなかった。

夏凜はすぐに察した。

「中に入って来れないんでしょう？」

「ガハハハ、よくわかったな、その通りだ。だから早く外に出て来い」

ハイデガーは嘘をつくことをしなかった。それに対して夏凜が微笑う。

「アナタ交渉ごとか下手でしょ。こっちに来れないのがわかって、わざわざ出るはずないでしょ……と言いたいところなんだけど、こんなところでいるわけにもいかないんだよねえ。中の敵はいつかはファリスちゃんが殲滅させるとしても、居場所がばれている以上は次の敵が来る。つまり、ここは何があるの外に出なきやいけないってわけ」

夏凜は何時にもない真剣な顔をしていた。それを見たファリスに不安が過ぎる。

「夏凜……」

「ファリスのことはウチの使用人をやってる限りは守ってあげ

るから。アナタはここにいるように、中にいればハイデガーは手を出せないから。それから中の敵はアリスちゃんに殲滅されている頃だと思うから、そっちもたぶん平気」

大鎌の柄を強く握り直した夏凜は足に力を入れた。ここを出たらすぐに力を取り戻すが、出たと同時にハイデガーも襲ってくるだろう。

夏凜は屋敷と外の境目に立って、後ろを振り返った。

「やっぱいい、裏門に逃げるって作戦に変更しようか？」

と言った次の瞬間には、夏凜は身体を回転させて外に飛び出し、大鎌を大きく天に向かつて振り上げていた。

大鎌は見事にハイデガーの首を跳ね飛ばした。それでも夏凜は攻撃の手を止めずにハイデガーの左腕を切り落とし右腕も切り落とそうとした。しかし、ハイデガーの右手の方が早かった。拳が夏凜の横を掠め、夏凜は後ろに飛び退いて間合いを取った。

「核つてのがあるらしいけど、アタシはそれがどこにあるのか詳しく知らないの！」

大鎌を地面に投げ捨てた夏凜は素手で構えた。

ハイデガーの再生していく。首が生え、腕が生え、不死身を思わせる。

「ガハハハ、武器を捨ててどうするのだ？ 今更命乞いをしても無駄だ」

「命乞いなんてしない。する前に走って逃げる。アタシが大鎌を使うのはそっちの方が見た目的にいいと思うてるからで、実

は素手の方が強いの！」

「おもしろい、おもしろいぞ。ノエルが俺たちに素手で挑むか？」

「それはちよつと違う。今ならわかる。アタシはアタシの中に組み込まれた存在が何であるか詳しく知らなかった、でも鴉と出逢つてわかつたの。アタシはアナタたちの力をこの身体に組み込まれた。アナタたちが悪魔　墮天使つてところだね」

妖艶とした笑みを浮かべた夏凜に力が漲ってくる。

ハイデガーが目を見開く、こんなことがあるはずがなかった。「なんとということだ、なんとということなのだ。そんな莫迦なことがあつてたまるものか……ノエルが天人ソエルの力得るはずがない、まさか貴様も　Mの巫女　なのか!？」

「Mの巫女　つて何?」

「俺たちが最も恐れる未来に現れるであろう第三の種族のことだ。その遺伝子を持つているのが、そこにいる娘だ！」

ハイデガーに指差されたファリスはびくつと震える。やはり敵はファリスを狙っていたのだ。

ファリスが狙われているとわかれば、それだけで状況はある程度好転する。

夏凜がファリスに向かって叫ぶ。

「裏門まで逃げて！　運が良ければアリスちゃんと一緒に外に逃げるの。こいつはアタシが喰い止めるから……」

夏凜から表情が消え、氷のような瞳でハイデガーを見据えていた。

「ガハハハ、いい度胸をしている。俺を喰い止めるというのか、いいだろう相手になってやる」

「相手をしてあげるのはこっち。ファリス何してんの、早く逃げろって言ったでしょ！」

夏凜に怒鳴られてファリスは走り出した。夏凜はすでにファリスを見ていない。ハイデガーもそうだ。二人は互いを見据えている。

「今のアタシは前のアタシとは違うって言いたいところだけど、雨に濡れるとどういいうわけだか力が出ない」

「そうだ、俺たちは水に濡れると運動能力が下がってしまう」

「なるほどね、それはアナタも同じでしょ？」

「そうだ、だが、俺は強い。お前が持つ天人^{ソエル}の力見せてもらおう」

「今日は特別サーピスでね」

地面を蹴り上げ天に舞う夏凜から水雫が落ちる。

ハイデガーの頭に夏凜の回し蹴りが炸裂する。夏凜はそのまま地面に手を突き着地しつつ飛び上がり、間合いを取って地面に落ちていた大鎌をハイデガーに向かって投げつけたしかし、大鎌の刃はハイデガーの胸に突き刺さる寸前に受け止められてしまった。

「そんな攻撃では俺は倒せんぞ」

「でも、アナタは自分の生命力を鼻にかけて防御が甘い。乱暴な戦い方をしているうちはアタシの繊細な攻撃を避けられない」

「それがどうしたというのだ、攻撃をしても俺を仕留めることができないのだろう」

ハイデガーは大鎌の柄をへし折って後ろに放り投げた。

夏凜はハイデガーと間合いを取りながら考える。確かにハイデガーに攻撃を喰らわすことができても、ダメージをならないのでは意味がない。

鴉は夏凜にこう説明したことがある。ソエルを倒すには「弱点は身体のだどこかにある核を壊すことのみ」だと。この説明から察するに核はそれぞれのソエルで違う場所にあることになり、もしかしたら移動することが可能なかもしれない。

自分にとってこの戦いが不利であることを悟った夏凜は軽くした打ちをした。

ハイデガーの両腕が二丁の銃へと変化する。

銃口が火花を噴き魔導弾が夏凜目掛けて連続発射された。

アクロバットを決めながら、夏凜はヒトとは思えぬ洞察力と瞬発力で銃弾を躲す。夏凜はそのままハイデガーとの距離を縮め、回し蹴りを放つ。

夏凜の右足がハイデガーの頭部に炸裂し、そのまま回転を維持し左足が胴を蹴り飛ばし、もう一度回転した夏凜の手にはどこからか取り出した大鎌が握られており、その刃はハイデガーの膝を切断した。

足を失い倒れつつもハイデガーは銃を放った。銃弾が夏凜の右肩を貫き、彼は後方に吹き飛ばされ、左手を地面に付きながら着地を決めた。

右肩は重症だった。

「くっ……アタシの再生力はアンタらほどじゃないけど、それなりにあるつもり。でも、さすがにこれは……」

大鎌をどこかに消した夏凜は右腕で肩を抑えた。それで血が止まるはずもなく、夏凜の表情は厳しい。

ハイデガーの脚が生え変わり、ゆっくりと立ったハイデガーは銃口を夏凜に向ける。

魔導弾を一発受けただけで重症だ。あれを二発も三発も受けてはいられない。

夏凜は冷静になれと自分に言い聞かせる。

核の位置を考えなければいけない。再生は核を中心に起こっていると推測される。つまり、首を切り飛ばした時も、腕を切り飛ばした時も、脚を切り飛ばした時も、胴体から再生した。いつか鴉が核を奪われた時は、心臓の位置に核があったが、ハイデガーも同じ場所にあるのか。普段は心臓の位置に核があり、それは自分の意思で移動することができるということなのか。

どこに核があるのかわからない以上は、可能性の高い場所を狙うしかない。

夏凜はハイデガーに向かって走り出した。飛び掛かる銃弾を避けるが、その動きは先ほどに比べて切れがない。自然と身体が左肩を庇う動きをしてしまっているのだ。

銃口が火を噴き、その銃弾を夏凜は避け損なってしまった。

夏凜の頬に紅い線が走った。かすり傷であったが、夏凜は地面にうずくまり、顔を伏せて震えた。

ハイデガーは銃口を夏凜に向けているが撃つ気配は見せない。「どうした、どうしたのだ。もっと俺を楽しませろ！」

ハイデガーは何があるかと負けるとは思っていない。だから、この戦いを楽しみ、夏凜を弄んでいる。簡単には殺さない。

俯き震える夏凜は嗤っていた。

「……ふふっ」

「何が可笑しいのだ、恐怖のあまりに精神を病んだのか？」

高笑いを張り上げながら夏凜が凄い勢いで顔を上げた。

「ざけんなクソ野郎！ 俺様の顔に傷つけやがって、いい度胸してじゃねえか teme エツ！」

狂気の目をした夏凜はアスファルトの地面を砕きながら地面を蹴り上げ、ハイデガーでも捉えることのできなかつたスピードで拳を大きく振った。

夏凜の拳が顎を砕き、ハイデガーの巨体が大きく吹き飛ばされ、落下しながら地面を滑った。

地面に転がるハイデガーに夏凜が上空から襲い掛かる。身体の重さを重くした夏凜の足がハイデガーの顔とともに地面を大きく砕き飛ばす。

攻撃の手を止めない夏凜は大鎌を天高く構え、ハイデガーの胸に大きく振り下ろした。銃口が火を噴く。大鎌は肉を貫く前に止まり、夏凜は腹を押さえながら地面に背中から倒れた。

首のないハイデガーが夏凜の首倉を掴んで持ち上げる。

夏凜は抵抗を止めた。

ハイデガーの首が生える。その顔についている双眸は燃える

ように紅い。

「なかなかだったと褒めてやろう、だが終わりだ。血を多く失ってしまったので、お前の血を飲んでやろう、光荣と思え」

「嫌だね」

不敵に笑った夏凜は両足でハイデガーの腹を蹴り、うまいこと逃げ出すと、大声で叫んだ。

「心臓を狙って！」

銃口が炎を噴いた。紅蓮に燃え上がる炎は咆哮をあげ、銃弾が纏っていた炎は大きな口をハイデガーを呑み込み、銃弾そのものはハイデガーの胸を貫いた

何かが弾ける音がした。それは硝子が割れた時の音に良く似ている。

ハイデガーが大きな口を開けて喉を押さえた。彼の身体に流れる血が枯れていく。

灰は灰に塵は塵に。ハイデガーは消滅した。その先には銃を構えたファリスが地面に尻餅をついていた。

ファリスはすぐさま地面に横になっている夏凜に駆け寄った。

「大丈夫、夏凜！」

「そうじゃなくって、どうして戻ってきたの、行けって言ったのに！」

「だって！ 助けてあげたんだから、ありがとうくらい言ったらいいじゃん！」

「助けてくれなんて言っていない」

「今の見たでしょ、あたしだって役に立てる」

「銃が自動照準で念じた方向に飛んだだけ。それに相手も油断してから」

ファリスは顔を膨らませて、すぐに笑った。よかった、夏凜は大丈夫そうだ。

しばらくしてファリスがこの場にやって来て、重症の夏凜を見て驚いた表情を見せた。

「まあ、夏凜様がこんな重傷を負うなんて、すぐに救急車をお呼びいたします」

「早く呼んで……そうしないとマジでアタシ死ぬから」

そう言いながらも夏凜の右肩の血は止まっている。じきに腹のから出る血も止まるだろう。

夏凜は近くで自分を見つめるファリスの顔をちらつと見てから目を瞑った。

命賭けるなんて自分らしくもない。そう思って夏凜は苦笑したが、近くにいたファリスはその笑いの意味を理解できなかった。

病院に着いた頃には夏凜の出血は止まっており、輸血だけをしてすぐに病院を出ることにした。ここに長居をするのは危険だ。うっかり普通の病院来てしまったことによつて、敵に居場所がばれてしまう確率が大きくなってしまった。夏凜は今更ながら悔やんだ。

雨はすでに止んでいたが、空に広がる曇天が地上を圧迫して

いる。

病院を出ると二人の人物がファリスたちを出迎えた。白い影のひとりには夏凜にも見覚えがあった。

「こんにちは夏凜様」

夏凜に声をかけたのは政府組織ヴァーツに所属するフィンフであった。その横にいるのは同じくヴァーツに所属するツエーだ。

ファリスを後ろに押し退けて夏凜が前に出た。

「こんにわぁ、フィンフさん。アタシ今すぐくヒマなんですよぉ、だから一緒にお食事に行きませんか？」

夏凜の声のトーンはいつもよりも高めで、態度もぶりっ子している。

失笑を浮かべるフィンフはすぐに表情を戻して落ち着いた口調で話しはじめた。

「夏凜様、嘘はいけませんよ」

「ウソだなんて、そんなことないです」

「いえ、あなたは敵に命を狙われているはずですよ。ですから、こうしてわたくしとこちらに居りますツエーンで、あなた方お二人の保護と事情聴取に参りましたのですよ。事情がお分かりなられたらのなら、わたくしたちとあちらの車にお乗りください」

フィンフは後ろに止まっているリムジンを指差した。

夏凜が後ろを振り向くとファリスが心配そうな顔をしていた。

「この人たち誰なの、夏凜の知り合い？」

「申し訳ありません、わたくしとしたことがファリス様に自己紹介をするのを忘れておりました。政府組織ヴァーツに所属するフィンフと申します」

続いてツエーンも自己紹介をした。

「僕も同じくヴァーツに所属するツエーンと言います」

ツエーンの口調はとても柔らかかで、それを聞いたファリスの心をほっとさせた。

夏凜はフィンフがヴァーツであることを知っていたし、フィンフが戦っているところも見ている。そのため、何の疑問も抱かずにリムジンに乗り込んだ。

ファリスもまた、夏凜がリムジンに乗り込んだのを見て安心してリムジンに乗り込む。そして、全員が乗り込んだのを確認してから、最後にツエーンは車に乗り込んだ。

走り出した車は大きな通りを進み、巨大都市の中心に向かっている。

都市の中心には円形の土地があり、その周りは濠で囲まれている。その都市の中心に聳え立つ絢爛豪華な巨大建築物は天を突き、現代風というよりはバロック建築の宮殿を思わせる宗教かかったデザインがなされていた。その宮殿の名は夢殿 政府の総本山だ。

リムジンの中で寛くファリスと夏凜は、フィンフに勧められるままに飲み物を受け取った。

車内は広々としていたが、フィンフは夏凜の横に、ツエーンはファリスの横に、常に神経を尖らせながら座っていた。

咳払いを軽くしたツエーンはファリスをちらつと見てから夏凜に目を向けた。

「僕たち二人で夏凜様とファリス様の護衛をさせていただきます。僕がファリス様を、フィンフが夏凜様の護衛をさせていただきます。そして、今向かっている場所は夢殿です。夢殿の中に入れば、お二人の安全は絶対に保障されます」

ツエーンの言葉に真剣に耳を傾けていた夏凜の眉がぴくりと動く。ファリスも驚いて口をO型に開けてしまった。

夢殿の出入りを許されているのは主に要人であり、一般人の出入りは基本的に許されていない。つまり、ファリスと夏凜は基本的外ということになる。それほどまでの重要人物のファリスと夏凜はなってしまったということだ。ヴァーツがわざわざ向かいに出向くだけのことはある。

ツエーンは一息つき、

「質問はありますか？」

とファリスと夏凜の顔を交互に見た。

ファリスはいろいろと尋ねたいことがあったが、考えが錯綜して何を質問していいのかわからなかった。ファリスが難しい顔をしていると、夏凜が可愛らしく手を上げて「魅せた」。

「はぁ〜い、質問で〜っす。アタシたちはどこの誰に狙われているから、保護されるんですかあ？」

ツエーンが答える前に、フィンフが速答した。

「それは夏凜様たちもご存知のはずです。わたくしたちにはそれ以上申し上げられません」

何かを隠すような言い方をしたフィンフに対して、夏凜は顔を伏せて舌打ちをした。

「では、僕たちからも質問をさせていただきます。夏凜様たちは誰に狙われて、狙われる理由を何かご存知ですか？」

今のツエーンといい、先ほどのフィンフの回答といい、どちらも遠まわしな言い方だった。必要以上に政府の事情を知られたくないという意図と、それでいて夏凜たちが知ってしまった事情を聞きだしたいのだ。

答える気のなさそうな夏凜は外の景色を眺めている。できれば夏凜から事情を聞いた方が、より詳しいことがわかるのではないかと考えていたツエーンであつたが、相手に答える気がないのならファリスに訊くしかない。

「ファリス様は何かご存知ですか？」

「ユニコーン社のハイデガーって奴が」

話している途中で自分を睨みつける夏凜が目に入ったので、ファリスはすぐさま口を噤み俯いた。

口を閉ざす二人に対して強引な手を使うこともできたが、あくまで二人は保護する対象であり、犯罪者の類ではない。ツエーンはお手上げという素振りを見せてフィンフに後を任せた。

「仕方ありませんね。夏凜様たちを狙っていたのはハイデガーだということはおわかっています。しかしながら、夏凜様とハイデガーの接点はなく、ハイデガーとの唯一の接点はファリス様です。ファリス様はハイデガーが社長を勤めるユニコーン社によつてホーム から立ち退かされたところまででは調べ

がついていきます。ですが、それがハイデガーに狙われる原因に成り得るのか。　そもそも、狙われたのはどちらなのか、それともお二人が狙われたのか、そのことについてお聞かせ願いたいのですよ」

ファリスは夏凜に顔を向け、夏凜は無表情に外の景色を眺めている。

あやふやな状況下であったが、それでも政府は二人を保護というより野放しにできない理由があるのだ。最悪の場合、このようなことも検討されている。

「お話し願えないのなら、お二人を“拘束”もしくは、この世から消えていただく場合もありますよ」

フィンフは微笑みながら言つてのけた。真横にいたファリスはぞつとする思いだつた。これでは車に乗り込んだその時から、“保護”ではなく、“拉致”されたようなものだ。

人心に穏やかではない霧囲気が車内を満たし、ファリスは全てを告白したい思いだつた。しかし、夏凜が話すようすを見せないでファリスは想いを喉の奥へ呑み込んだ。

場の霧囲気を吸んでツエーンが苦笑いをして見せる。

「夏凜様は一流のトラブルシューターとして名を馳せていますから、脅しには屈しないでしようし、こちらのファリス様も口が堅いようで、ホーム　育ちの人はみなさんこのようなのでしようかね」

突然車内が揺れた。

リムジンは何かの攻撃を受け、近くを走っていた車に衝突し

ながら緊急停止した。

運転手からの声がスピーカー越しに響いた。

「街中ではありえない数のキメラ生物が襲ってきます！ どうしますか、このまま逃げますか？」

窓の外ではリムジンを囲うようにキメラ生物が群がっていた。それを見たフィンフが車外へ飛び出そうとする。

「わたくしが足止めしている間にお行きなさい！」

夏凜も席を立った。

「狙われているのはファリスだから、さっさと車を出して！」

急いでフィンフが車を降り、夏凜もそれに続いた。

車を降りた夏凜を見てフィンフが渋い顔をする。

「わたくしひとりですら十分でしたのに」

「加勢しますから、その後食事に行きましようねえ」

ニコニコする夏凜を見てフィンフは肩を落とした。

二人をこの場に残してリムジンがタイヤを鳴らす。フィンフたちの手を溢れたキメラ生物たちが、高速で走るリムジンを追って来る。

見た目が白い虎であるキメラ生物　その名も白虎と名づけられた四つ足の獣が長い道路を失踪する。空からは翼のある獅子に鷹の頭を付けたグリフォンが追って来る。

風を切るリムジンは周りを走る車両にお構いなしに無謀な走行を続ける。車の往来が多い道路をジグザグに走り、道が空かないものなら体当たりをしてでも空ける。市民の安全よりも任務が優先なのである。

道の脇から白い塊が出て来て道路を塞いだ。わき道はなく、逃げ場を塞がれてしまった。

運転手の叫びが車内に木霊する。

「アーマーの大群に道路を塞がれました。でも、こんなにも多くのキメラを見つからずにいつせいに街に放つなんて……」

道路を塞いだ白い生物の通称はアーマー。その全長は約五から六メートル、全身が硬い甲殻に包まれていて、濁った白色をしている。そう例えるならば白い色をした巨大ダンゴムシのような生物だ。

多くの車がアーマーを見て引き返して来る。リムジンは動きを止めている。

道路に並んだアーマーが五つの紅い眼を光らせて行進してきた。後ろからは白虎が来る。空からはグリフォンが飛来して来た。

ツエーンがファリスの腕を引き車内に飛び出した。そこにすぐさまグリフォンが襲い掛かる。

紅が道路を彩った。身体と切り離されたグリフォンの頭部が嘴を痙攣させて動かしている。

ツエーン右手の手首から肘にかけて刃が生えていた。それは鯨の背鰭のような形をしており、拳を振りながら敵を斬るというものだった。

息つく暇もなく白い四つ足の影が飛び掛かって来るファリスから手を放したツエーンの腕が槍と変わり、白虎を串刺しにした。

血の雨がツエーンに降り注ぎ、身体中に血臭がこびり付く。微かに笑うツエーンは口元についた血を舌で舐め取った。

白い波が道路にある車などを呑み込んでいく。足をばたつかせて移動するアーマーによって地面が揺れる。

手を元に戻したツエーンがファリスを抱きかかえた。

「失礼します。しつかり僕に掴まっていてください」

大きく広がった翼から羽が抜け落ち宙を舞う。ツエーンの背中に現れた白い翼を見てファリスははっとした。

天高くファリスはツエーンとともに舞い上がった。

「ここまで来ればまずはひと安心と言えるでしょう」

ニッコリと笑うツエーンの顔を不安げにファリスは見つめた。ファリスは夏凜のマンションで黒い翼を生やし空に飛び立つハイデガーを見た。翼を背中に生やすヒトが滅多にいるはずがない。ということとは、このツエーンも鴉やハイデガーと同じ種族なのだろう、とファリスは思う。

廃墟ビルではじめて出逢った鴉はファリスにとって信頼できる存在であった。ツエーンも政府で働いているのだから、信頼にたる人物なのだろう。鴉と同じ種族の人たちが、種族同士で戦っている。ファリスは自分がどんなことに巻き込まれてしまったのか、不安になった。

「あなたたちは何者なの？」

「僕に答える権限はありません。ファリス様も全てことが済んだら、僕たちのことを忘れてください。では、ここまま空を飛んで夢殿に向かいましょうか」

翼を羽ばたかせたツエーンの後ろから何かが来た。ファリスはそれを見て叫ぶ。

「後ろに敵！」

「えっ？」

ぽかんと口を開けたツエーンの身体が大きく揺れ、ファリスがツエーンの胸から投げ出された。

「きゃーっ！」

声をあげながら落下するファリスをツエーンは追った。

ファリスの手が天に伸び、ツエーンがそれを掴もうとした瞬間、横から割り込んで来たグリフォンが嘴でファリスを挟んで掻っ攫って行ってしまった。

嘴に挟まれながらできる限りの抵抗をしたが、ファリスに逃げる術はなかった。肝心の護衛であるツエーンは新たに襲って来たグリフォンと交戦中で、ファリスを追うことができないようだった。

ファリスの叫びは虚空に呑み込まれてしまった。

千歳は巨大兵器 アルファ を前でうろつろと歩き回っていた。その歩調は足早で、足音がよく響いている。鴉が逃げ出したという連絡を受けてから、千歳の怒りは治まることを知らなかった。

「ルシエルは何をしていたのよっ！」

鋭い爪によって千歳の近くで機械の整備をしていた男の首が血飛沫を上げた。

床に転がる首を力強く蹴飛ばした千歳は肩で息をしながら心を落ち着かせていく。

千歳の気まぐれで殺された男は運が悪かったで済まされ、他の者たちは見て見ぬふりをして自分の仕事を続ける。

アルファの調整はだいぶ前から整っている。それなのに関わらず、Mの騎士であるゾルテが裁きの門によって審判を下され、代わりになるはずだった鴉は逃亡した。そして、Mの巫女を捕らえたという連絡はまだ来ない。千歳の苛立ちが募るばかりだ。

天人に伝えられている伝説では、神は己の姿に似せて天人を創った。しかし、それは己を美化させた存在であり、その美しさの奥には神の持つ悪を備えていた。だから、樂園で反逆者が現れたのだと云われる。

天人の次に神は己の姿に似せて地人を創り出した。天人を清らかな炎で創ったのに比べ、地人は天人を創った時に出た汚泥で創られたと云われる。しかし、この地人も神の望む種族にはならなかった。

神は去った。全ての生けるものたちを置き去りにして去ってしまった。

そして、千歳たちは神に代わる存在アルファを創り出したのだ。

地人の住む地上に墮とされ、墮天者がなぜ身を潜めて暮らさねばならないのか。千歳は天人は地人の上に君臨するものだと信じている。それは自分が墮天者となった後も変わらない。

「墮^ラ天^{エル}者たちが身を潜めて暮らさねばならないのは、地上^{ノリス}を管轄するヴァーツの存在があるからだ。

地上^{ノリス}に墮^ラ天^{エル}した天^ソ人^{エル}は楽園^{アフエ}には還れない、それはヴァーツも同じことだった。還れないのなら、地上^{ノリス}を楽園^{アフエ}にするしかない。ヴァーツも墮^ラ天^{エル}者もそう思っている。

千歳はもう待てなかった。

「この地上^{ノリス}を支配するのはヴァーツでもアンチ・クロスでもルシエルでもない。このわたしが支配するのよ」

永遠とも思える時の流れを刻んだ。生きた時間に比べれば、地上^{ノリス}で過ごした時間など短いものだ。しかし、その時間は千歳にとつて耐えがたいものだった。だから一秒も待てない。

苛立ちを覚える千歳に近づいてはいけなという暗黙のルールがある。それを知っていながら、男が駆け寄って来た。それほどまでの事情があるということだ。

「千歳様、ハイデガー様が消滅したと連絡が入りました」

「ハイデガーが!?!」

驚きはした。天^ソ人^{エル}には死という概念が抜け落ちているところがある。そのため、他者^ソの死^{エル}に対して実感がわかない。だが、ハイデガーの消滅を実感した千歳は妖艶とした笑みを浮かべた。例え力のある墮^ラ天^{エル}者として、自分に牙を向ける可能性がある者には必要ない。千歳の目の前には凄然と立つアルファがいる。千歳にはこの守護神がついている。この神に魂さえ宿れば、全ては千歳の手の内に治まる。

巨大な神を見上げる千歳の横顔に男が話し掛ける。

「ハイデガー様の部隊は殲滅させられ、Mの巫女の所在は掴めていません」

「それで、ハイデガーを殺したのは誰なの？」

「Mの巫女と行動を共にしているらしいトラブルシューターの夏凜という人物か、もしくはハイデガー様の向かわれた館の主である魔導師か……詳しいことはわかっていません」

「それにしても地人ノエルに殺られてしまうなんて、ハイデガーも悔しかったでしょうね。命令よ、Mの巫女を早急に探しなさい」

艶めかしい笑みを浮かべる千歳を見て男はぞっとした。Mの巫女を探さなければ命が幾つあっても足りない。

男が去つてすぐに別の男が現れた。その男の顔を見た千歳は驚きの表情を隠せなかった。

「まさか……なぜ、どうやって 裁きの門 から出て来たの……？」

「余の主と名乗る者に連れ出された」

そこに立っていたのはゾルテであった。それが千歳には信じられない。夢か幻としか思えないのだ。

「ありえないわ、そんなことができる者がいるはずがない」

「だが、余はここに存在する。余は 裁きの門 から出たのだ」

「いいわ、そう、別に構わない。あなたが戻って来てくれればM計画は遂行できる。アルファの整備は整っているわ、あなたの核を捧げれば、アルファは起動できる」

「Mの巫女はどうなっている？」

「心配ないわ、すでに アルファ に制御装置として組み込まれたわ。さあ、あなたの核を アルファ に捧げて」

千歳は待てなかった。だから堂々と嘘をついた。その嘘をゾルテは見破ることができなかった。墮^ラ天^{エル}者の成り切れていないゾルテは疑うというのを忘れていたのだ。

「よかろう、余の核を受け取るがよい」

鋭い爪を自分の胸に突き立てたゾルテは、そのまま一思いに自分の核を取り出した。

表面は濃い紅色をしており、内側から発せられるダークレッドから明るいローズのモザイクの濃淡が心を奪う。この核を宝石に例えるならば、類稀なる美しさを持つルビーであるピジョンブラッドに似ている。

鮮血の滴り落ちる核は天に掲げられ、ゾルテの手を離れて空にゆっくりと上がっていく。

まだ、魂の宿っていない アルファ の瞳が、ゾルテの核と反応して緋色に妖しく輝く。

低い重低音が格納庫に響き渡った。それは アルファ の咆哮であった。口を大きく開けた アルファ が叫んでいる。

核が炎を発し、巨大な闇の中に放り込まれた。核を呑み込んだ アルファ に魂が宿る。

アルファ の全身に浮き出ている血管のような模様が、蒼白い輝きから真紅に変わり、脈動感が溢れんばかりに生命根源の力が奮い起こされる。

重低音が空気を震え上がらせ、千歳の身体をゾクゾクと痺れさせた。

恍惚の表情を浮かべる千歳。目の前には千歳を地上の覇者へと導く魔神が聳え立つ。

全ては自分の中にあると千歳は確信した。だが。

壁が叩き壊され、地面に穴が空き、魔神 アルファ の咆哮が響き渡る。それは暴走だった。制御装置となる M の巫女を生贄として捧げなかつた千歳の誤算。全てはわかりきっていた結果だった。

暴走を起こすことなど千歳にもわかつていた。それでもどうにかなると思いついていたのだ。愚かな妄想を現実だと思いついた末路。

けたたましいサイレンが鳴り響き、赤いランプが点滅を繰り返す。技術者や研究者たちが逃げる中、千歳は魔神を見上げていた。

「わたしの命令を聴きなさい！ おまえはわたしを地上の覇者とする道具なのよ！」

千歳の声は木霊するだけだった。

なぜ自分の言うことを聴かない。千歳は納得がいかず、怒りが腹の底から湧き上がってくる。

「わたしが支配者よ、わたしがおまえの創造主なのよ！」

やはり、アルファ は言うことを聴かない。

巨大な足が横に振られ、そこにたまたま立っていた千歳の身体を大きく飛ばす。骨が折れて肉を突き破り、全身血だらけに

なりながらも千歳は喚いた。

「わたしの言うことを聴かないものに用はないわ、おまえは塵よ、鉄屑よ！」

千歳の眼が大きく見開かれた。巨大な影が千歳の頭上に迫っていた。

骨が砕け、軟らかいモノが潰れた音がした。

上げられた アルファ 足の裏は真っ赤な色で染まっていた。

アルファ に呑まれたゾルテの意思はない。では、アルファ には意思があるのか？

巨大な腕を振り回し暴れまわる アルファ は、やがて天に向かつて吼え、背中に鋼色の翼を生やした。翼に魔導力が集まり黄金に輝き出す。

天井には地上へと続く道がある。

模造の神が天に向かつて飛び立つ。

大きく羽ばたかれた金属の翼から、本物の翼のように羽根が抜け落ち舞う。

強風に煽られ千歳が顔を覆った。次の瞬間、魔神 アルファ が飛んだ。壁にぶち当たりながら、ぎこちなく地上に向かつて行く。

天井には光が見えない。地上に通じる昇降口は閉められたままだった。それでも アルファ は地上に向かつて突き進んだ。強烈な音を立てながら鋼鉄の扉が破壊された。

爆発が巻き起こり、地の底から唸り声があった次の瞬間、道路を破壊し、ビルを倒壊させ、巨大な影が街中に姿を現した。

空に浮かび、地上を統べる者の風格を持つ　アルファ　が激しく吼えた。

新たな神が今、人間たちの前に姿を現した瞬間だった。

グリフォンに連れ去られたファリスは泣き叫んでいた。恐怖よりも悔しいという気持ちの方が強い。

憎むべき相手だったハイデガーを自分の手で殺し、ヴァーツの保護により夢殿に向かうはずだった。あと一歩というところだったのに、敵に攫われたことが悔しかった。そして、自分の戦いがまだ終わっていないことも実感した。

ピルの合間を縫うように飛ぶグリフォンはどこに行くのかなどということは今のファリスには、どうでもいいことだった。今は逃げたい一心で身体を動かす。だが、両腕は嘴によって挟まれ、動かせるのは宙に浮いた足のみだった。これではいくら暴れてもどうにもならない。

大声を出しても誰も助けに来てはくれない。声を出すのが虚しくなってくる。それでもファリスは諦めたくない。何も打つ手がなくても、何もできない自分が嫌だった。

強引に腕を動かしていると右腕が偶然にも抜けた。ファリスは迷うことなく腰のフォルスターから銃を抜いた。

こんな場所で魔導銃を撃ち放ったら、どんなことになるかファリスにもわかっていて。それでも彼女は銃の引き金を引いた。紅蓮の炎に包まれたグリフォンが叫び、思わず開いた口からファリスが落ちる。

銃を放った際にファリスも軽い火傷を負った。近距離で銃を放って軽症で済んだのは炎が意思を持ってに他ならない。しかし、軽症で済んだと言っても、このまま地面に落ちれば意味がない。そこに待っているのは死だ。

敵の手に落ちるなら、いつ自分から死んでやる。ファリスはそう思いながら目を閉じた。自分はよくやったと思う。ハイデガーを倒したのだから、これで死んだ兄も少しは報われるだろう。

ファリスは地面に向かって落ちる中、ビルの屋上から黒い影が空に向かって飛んだ。そう、それは鴉であった。

黒衣を大きく広げ、鴉はファリスの身体を受け止めた。

ファリスが目を開けると、そこには自分を見つめる黒瞳があった。とても愁いを帯びた瞳。

血のように紅い唇が言葉を発する。

「衝撃に備えろ」

同じような状況で、同じようなことを言われたことをファリスは思い出した。自分を助けてくれる人がいるうちは死ねない。

黒衣が風に煽られ、地面に落ちる速度を緩めてくれるが、それでも地面に落ちた時の衝撃は激しい。アスファルトが砕け、隕石でも落ちて来たのかと思うほどの穴が空く。それでいて鴉もファリスも無事だった。

地面にファリスを下ろした鴉は無言で歩き出す。

「待ってよ、どこに行くの？」

「静かに暮らせる場所を探す」

ファリスは返す言葉を喉に詰まらせてしまった。鴉には自ら敵と戦う意思がないのだとファリスは思ったのだ。それはファリスにとつてまさかの発言だった。鴉は敵を倒しに行くものだとばかり思っていた。

「ねえ、あたしはどうなるの？」

「好きにするといい」

「それって鴉に着いて行ってもいいってこと？」

「好きにするといい」

「何その返事！　じゃあ、さつきはどうしてあたしのこと助けにくれたの？」

鴉は答えなかった。

命の恩人にファリスは腹を立ててしまった。決して憎いわけではなく、自分でも何に對して怒っているのかわからない。

「ハイデガーをこの手で殺してやったの」

遠くを見つめながら歩く鴉の横で、ファリスが顔を上げながら話しかけるが、鴉は顔を向けようともしせず無表情なままだった。

「ねえ、聴いてるの？」

「……………」

何も答えない鴉にファリスは一方的に話しかけることにした。「ハイデガーは死んだのに、あたしはまだ誰かに狙われているの。さつきの怪物もそう。あとね、ハイデガーがあたしのことを第三の種族だとか言っていたの、だから狙われているんだって。第三の種族って何のことだか知ってる？」

「天人^{ソエル}でもなく、地人^{ノエル}でもない、新人類^{ニユエル}と呼ばれる者だ」

やっと口を開いた鴉にファリスは質問をした。

「ソエルとかノエルとかニユエルって何？ どの言葉なの？」

「天人^{ソエル}とは私たちの種族を言い、地人^{ノエル}とはファリスたちの種族を言う。新人類^{ニユエル}とは天人^{ソエル}と地人^{ノエル}の力を持つ者。しかしながら、それはエスと呼ばれる怪物とは違う。エスとは天人^{ソエル}によって怪物に変えられた地人^{ノエル}のことを言う。天人^{ソエル}が怪物と化すことをエンシュという。エスとはエンシュから派生した言葉だ。そして、新人類^{ニユエル}の存在は伝説でしかないと言われている。天人^{ソエル}は新人類^{ニユエル}を認めたくないのだ」

「全然わかんないよーっ」

「知る必要もない」

その声はいつもの鴉の声であつたが、ファリスにはとても冷たく聴こえた。

昏い黒衣が揺れている。鴉はすでにファリスの先を歩いていった。このままでは置いて行かれてしまふ 心が。

ファリスは鴉の横に付くと、嬉しそうに顔を上げた。

「やっぱり生きてたんだね」

今更の言葉だった。だが、そこにファリスの想いは詰められた。鴉に通じたかはわからないが、ファリスは満足した。

街中はいつもと変わらない。先ほど空から鴉とファリスが降つて来たことなど忘れられている。刻々と変化を続ける街。

雲の流れも速くなっている。

急に足を止めた鴉は天を見上げてファリスを抱き寄せた。ファリスは顔を紅く染めたが、次の瞬間には驚きに変わっていた。誰かが叫んだ。黒衣が触手のように天に伸びる。そして、再び悲鳴が上がる。甲高い悲鳴はグリフォンのものであった。

黒衣が元の形に戻り、串刺しにされていたグリフォンが地に落ちる。

地面で口をパクパクとさせるグリフォンを一瞥しながら鴉は言う。

「元凶を断たぬ限り、狙われ続けるだろう」

「だったら、やつつけちやつてよ」

「墮^ラ天^{エル}者とて、共に楽^ア園^クで」

言葉を途中で切った鴉の表情が険しくなった。視線は遠くを眺めている。それも地に底だ。

地面が揺れる。地面を揺らしながら何かかが地上に上がって来る。

「来るぞ！」

鴉が言ったと同時に激しい揺れが起こり、遙か遠くで地面が弾け飛んだ。

地の底から黒い影が天に昇った。

曇天の下で輝く翼を持つそれは、まさに天から光臨されたし天使のようである。しかし、この天使は地の底から這い出て来た。天使の名よりも墮天使の名が相応しい。

天に向かって吼えた アルファ は翼を大きく広げた。巻き起こる風は叫び声のような音を立て、抜け落ち風に煽られた黄

金の羽が刃と化して地に降り注ぐ。

アルファ の発する魔気に誘われ、天に雷鳴が轟き巡る。人々は精神こころの底から震え上がり、次元の違う存在から逃げようとす。車の玉突き事故で道路が炎上し、倒れた人の上を踏みつけて我先に逃げるような状況だった。

鴉はファリスの瞳を見据えた。

「どこにいても危険だ。しかし、私と来ればどこよりも危険になる。それでも私と来るか？」

「あのバカデカイロボット倒しに行くんでしょ。あたしが行くと邪魔になるよね。だいじょぶだって、あたしだって自分の身ぐらい守れるよ」

そう言つてファリスは腰から魔導銃を抜いて見せた。

「行つて来る」

走り出した鴉の背中にファリスは声を投げかけた。

「帰つて“来る”だよね！」

その声が鴉に届いたかはわからない。待つしか他にないのだから、ファリスは待つしかない。自分が付いて行つても邪魔になることぐらいわかっている。それでも……。

ファリスは鴉の向かった方向に走り出してしまっていた。

近場にいたキメラどもを倒し終えた夏凜とフィンフは、リムジンの激走して行つた方向へと走った。

フィンフの移動速度は異常なほど早かったが、夏凜は難なく付いて行く。そんな夏凜にフィンフは感嘆の声を漏らした。

「普通の人間がわたくしのスピードについて来られるとは。これでもヴァーツの中では最も移動速度が速いのですが」

「じゃあ、驚きついでに今度お食事でもあ」

「全然ついでではないようですが？」

「じゃあ、フィンフさんを抜かしたらお食事を？」

「ならば、わたくしも“本気”で走らせて頂きますが？」

「いや、辞退させていただきます」

夏凜にはこれが限界であつた。すでに時速八〇キロメートルを超えているというのに、フィンフはまだ早く走れると言ふのか。夏凜はフィンフが光速で移動できることを知らなかつた。

地面に足の裏を擦りながらフィンフが急ブレーキをかけた。

夏凜も慌てて止まろうとする。だが、地面の窪みに足を引っかけた。

巻き上がってしまったスカートを素早く直して夏凜は苦笑いを浮かべた。常時スパッツ着用で本当によかつたと思ひながらも、フィンフに失態を見せたことが夏凜に残る乙女心を傷つけた。

照れ笑いを浮かべながら、服に付いた汚れを払い、くるっとスカート裾の裾を巻き上げながら回転する夏凜。だが、その足は一八〇度回つたところで止まつた。

「ム、ムシいゝ!？」

ダンゴムシによく似たアーマーの大群が道路を爆走してくる。鳥肌を立てた夏凜はこれに乗じてフィンフに抱きつき、ニヤリと笑つた。

「ムシ怖いですう」

「夏凜様、大丈夫でしょうか？」

「あんなムシ早くやつつけちゃってくださいあゝい」

「夏凜様は蟲がお嫌いなのですね。わかりました、夏凜様はしばしここでお待ちください」

巨大な槍を構えたフィンフは蟲の大群に向かって行った。

敵を察知したアーマーはいつせいにフィンフに飛び掛かった。下腹部についた鋭い牙を持つ口が蠢いているのがよく見える。

アーマーの頭脳は犬並みで、連係プレイを得意とする生き物だ。しかし、その連係プレイも虚しく終わる。

飛び掛かってきたアーマーの吐いた粘液を巧みに躲し、フィンフは一匹、二匹と、次々に串刺しにしていく。

空気を鳴らすように『キシヤーツ』と叫ぶアーマーが次々と息絶えていく。

華麗な戦いを前に夏凜はフィンフを惚れ直した。

アーマーの甲殻はダイアモンド並みの強度を誇るが、腹部に当たる部分はぶよぶよしていて柔らかい。そこを攻撃してやればいとも簡単に仕留めることができる。夏凜ならばそうやって倒す。だが、フィンフは違う。硬い甲殻をいとも簡単に串刺しにしている。それは武器の性能が、それともフィンフの技量の成しえる業か 両方なのだろう。

フィンフの戦いに見惚れていた夏凜の耳に地響きが届いた。その音は後ろから迫ってくる。

「ムシいゝっ！」

ビルの角を曲がり現れたアーマーの大群が、夏凜がいる方角へと走って来る。フィンフは夏凜の遙か後方で戦っている。夏凜は仕方なく大鎌を出してアーマーに向かって行った。

嫌な顔をしながらも夏凜は大鎌を振るう。

「こんな汚らわしいの斬りたくないなあ」

アーマーは獲物に飛び掛かって襲う習性がある。そこが狙い目だ。

飛び掛かって来るアーマーに合わせて飛翔した夏凜は、意を決してぶよぶよした蟲の腹を斬り裂いた。斬り裂腹から勢いよく緑色の粘液が飛び出したが、夏凜はうまくそれを避けた、のも束の間で、次のアーマーたちが襲い掛かってきた。

笑みを浮かべながら華麗に舞う夏凜は三匹同時に腹を斬ってやった。しかし、その瞬間、夏凜は身も凍る思いをした。

「イヤあゝっ！」

緑色の粘液が夏凜に襲い掛かる。夏凜は避けきれず、身体は緑色の粘液で汚された。しかも、顔までやられている。

まだ、アーマーは残っているというのに、夏凜の手からは鎌が滑り落ち、地面にへたり込んでしまった。その表情はまるで魂の抜けた美しい西洋人形のような。しかし、顔は汚れている。蟲たちがいつせいに粘糸を吐き出す。それは夏凜の自由を奪い拘束する。

糸のキレた操り人形の口元を少し上げる。

「下等な蟲の分際で粹がつてんじゃねえぞ、俺様の顔を汚した代償はつくぞオラッ！」

粘液を豪快に引き千切った夏凜は大鎌を力強く構え、大きく円を描きながら乱暴に振り回した。

爆裂風が巻き起こり、真空を作り出しことにより虫たちは大鎌に吸い込まれるように斬り裂かれ、緑色の粘液が夏凜の全身を汚した。

大鎌を持ち立ち笑う夏凜の周りには、原型を留めていないミンチがあつた。

急いで夏凜のもとへ駆けつけたフィンフは一部始終を傍観してしまつていた。

ふと、フィンフと目があつてしまつた夏凜は、凄く慌てたように大鎌を地面に投げ捨てた。

「あ、えつと、蟲さんたちいゝ、アタシを怒らせると酷い目に遭つちやいますで御座いますよお……てへっ」

今先ほどの夏凜とは別人であるが、これはこれで可笑しい。ずいぶんと動揺していることは間違いない。

夏凜はポケットからハンカチを取り出し、顔をこしこし拭きポイツと投げ捨てると、後退るようにその場を離れてフィンフの横にびつたりとくつついた。

「怖かつたですう〜」

「ええ、わたくしも怖かつたです」

苦笑いを浮かべるフィンフは夏凜の本性を知つた。それでも夏凜はめげずにブリッコをする。

「早くファリスとツエーンさんを探しに行きましょうよお」

「そ、そうですね。いや……」

「嫌？」

「何かが来ます、それも凄まじい鬼気を発しています」

轟々という音を立て、地面が空に飛び砕け、地の底から巨大な何か飛び出てきた。

雷鳴轟く曇天の下で、輝く翼を持つ アルファ が吼えた。

輝く黄金の槍が地面に降り注ぐ。

フィンフは言葉を失った。

「あんなものが地上ノリスに在ろうとは、信じられない」

「あるんだから、しょくがないですよねえ」

「わたくしひとりでは歯が立たない。ここは応援が来るまで、どこから湧いて出たキメラたちを倒して回るしかないようです
すね」

「じゃ、アタシは行つて来まゝす」

夏凜はフィンフに背を向けて走り去ろうとした。

「行くのですか夏凜様は？」

「勝てない敵に立ち向かうほどバカでもないし、熱血でもない。でも、あつちの方って大好きなお兄様の家があるから」

フィンフに見えない位置で夏凜は苦笑した。そして、アルファ に向かつて走つて行つた。

空を飛び移動し続ける アルファ の身体から何か地上に降つて来た。

地上に降り立ったそれは女の顔を持っている。

女は妖艶な上半身をさらし、豊かな乳房を揉みしだく。濡れ

た唇から熱い吐息が漏れる。紅い液体を口から滴らせる女は、舌を上手に使って口の周りについた液体を拭き取った。

鴉の目の前にいる女の上半身は女体であったが、下半身は蜘蛛のようである。そして、その妖艶な顔はまさしく千歳のものであった。

巨大蜘蛛の怪物と化している千歳は近くに止まっていた車の中で震える家族に狙いを定めた。

千歳は車の窓を打ち破り、運転席にいた中年男を車外に引きずり出し、その頭から喰らい付いた。

道路が血に染まり、車内に乗っている中年女性は失神し、男の子は目を大きく開けたまま固まり、女の子は悲鳴をあげながら泣きじゃくった。

次々と千歳は車の中に乗っていた人間を喰らっていき、最後に残した女の子を車外に引きずり出した。

この場に駆けつけた鴉は見た。怪物と化した千歳の周りには血を吸われ、拳げ句の果てに身体の一部を喰われた人間たちが転がっていた。凄惨な光景にまともな精神を持つ者なら目を覆いたくなる。

鴉が深く呟いた。

「……エンシュカ」

千歳は幼い女の子の顔を舌で舐めると頭から喰らい付こうとした。

黒影が風に乗る。次の瞬間には女の子は鴉の胸に抱かれ、千歳から遠く離れた場所にいた。

「早く逃げる」

女の子は震えながら瞬きを何度もして叫びながら走って行った。それを千歳がすぐに追おうとする。

「飲み足りないわ、もつと、もつとわたしの聖水を頂戴」

声をあげる千歳の前に黒い影が立ち塞がる。

「行かせはしない」

「嗚呼、その声、姿は誰かしら……、遠い昔に見た顔……、もう頭が蕩けてしまつてわからないわ」

恍惚の表情をした千歳が虚ろな目で鴉を見ている。

鴉は遠い記憶を手繰り寄せた。楽園での日々を思い出す。そこに千歳の顔があつた。

「確かりリスと言つたな。大量の地人を虐殺して血を貪り、拳げ句の果てには天人の血も飲んだ。そして、お前は墮とされた」

天人の血は他の生物にとつては有毒でも、墮天者にとつては最高の美酒であり、地人の聖水を飲んだ時よりも格段の力を得ることができると云つた。

「そうよ、わたしは地上に墮とされるのが嫌で抵抗したのでも、あなたは許さなかつた。最終的にわたしを地上に墮としたのは、あなたよ　輝ける称号をお持ちのアズエル様」

千歳の口調は皮肉たつぷりだった。鴉は表情も変えず口を開かない。彼はただそこに立っているだけだった。

天から稲妻が地に落ちる。鴉がここでこうしている間にも

アルファ は街を 世界を滅ぼそうとしている。

漆黒の髪が風に揺られ、美しき鴉の顔は愁いを帯びていた。彼の瞳は千歳を映している。しかし、彼の見ているものは全ての天人と呼ばれる生き物だった。

千歳は六本の足を巧みに動かして鴉に近づき、自分の顔を鴉の眼前まで持つて行った。

「もうわたしは成れの果てになってしまいわ。醜く変わってしまふ。あなたの美しい顔が憎い、憎い、憎い」

「おまえの核が嘆いている。エンシュと成れば消滅はすぐそこだ」

微動だにしない鴉の瞳は千歳の双眸を見つめていた。

静かに言う鴉が千歳は腹立たしかった。

「楽園にいた頃はあなたに嫉妬したもののよ。でもね、あなたもわたしと同じ墮天者。嗚呼、嬉しくて堪らない。あなたの全てに嫉妬はしていたけれど、わたしはあなたに恋い焦がれていた……嗚呼、もう駄目よ、あなたに貪りつきたい」

自分の胸を鷲掴みにした千歳の顔が崩れてく。妖艶な美しさを持つていた顔が醜くなっていく。口が裂け、目玉が飛び出し、舌がだらりと伸びる。

長く伸びた舌が鴉の顔を舐めようとする。妖々と動く舌は鴉の拳に収まり強く握り締められた。

千歳は自ら頭を後ろに引いて舌を引き千切った。鮮血が口からぼとぼとと零れ落ちる。

ジャンプをしながら間合いを取る千歳の口から、何メートル

にも伸びた舌が鞭のようにしり出る。

残像を残し何本にも見える舌の間を潜り抜け、鴉は速攻を決める。巻き起こる風に血の臭いが混ざる。

黒い影が巨大な翼を広げたのを千歳は見た。闇の中に浮かぶ蒼白い顔、血のように紅い唇。鴉の顔は無表情であったが、それが千歳の胸を強く締め上げた。

鋭い爪に牙を剥く千歳。黒衣がはためいた。

鮮血が迸る。鴉の肩には骨をも砕く口がかぶり付いていた。

鴉の爪が動く。彼の爪は千歳の喉元に突き刺さっていた。その爪を横に払うと同時に千歳の首が天に舞う。

地面に落ちた首は尚も引き千切った鴉の肉を粗食していた。

「美味しいは、あなたの肉は今までわたしが喰らってあげた誰のものよりも美味しい。クセになりそうよ」

地面に落ちていいる頭がそう言い終わると、頭のない首から赤黒い触手が伸びて、地面に落ちていいる頭を拾い上げると元の位置に戻した。

冷たい双眸で鴉は千歳を見つめていた。

「おまえが墮とされた理由が実感できた」

「あなたも墮ちたのよ。天人ソニエルの肉を喰らってみなさい、とても甘美な味があるわよ」

「天人ソニエルは天人ソニエルの肉を喰らい血を飲むこと禁忌とする」

「でも、わたしたちは墮ラエトル天人ラエトル者よ。欲望の赴くままに生きるのよ」

鴉は千歳の言葉を聞きながら別のことを考えていた。

「私たちは不死ではなくなった。だから生きているのだな……もとより死のないものには「生きる」という言葉は必要ない」
儂げな鴉の瞳が天に吸い込まれる。その気を緩めた一瞬の間であつた。千歳の身体が鴉に飛び掛かる。

黒衣が大鎌と化す。鴉は未だに天を見つめている。千歳は不意を衝いたつもりが、不意を衝かれた。

六本の足を全て斬り飛ばされた千歳に鴉が視線を落とす。

「この黒衣は意思を持ち合わせている。黒衣は私を死なせまいとする。それが私への罰だ」

すぐさま新たに足を生やした千歳が鴉に牙を向ける。その瞳は色を失いつつある。血が足りない。

体内の血が極端に失われると天人ソエルの身体は変異し、無我夢中で血を求めるようになる。それがエンシユと呼ばれるもの。エンシユは天人ソエルの自己防衛本能であり、死への危険信号である。

鴉の爪を巧みにジャンプして躲した千歳は上空から蜘蛛の糸を発射した。糸は鴉の四肢を捕らえ、鴉の動きを完全に封じること成功した。

アスファルトの地面に磔にされた鴉は身体を動かそうとするが、糸はまるで鋼のごとく硬いものだった。

上空から飛来する千歳は全身で鴉に押し掛かった。鴉の上に載る千歳は、自分の身体を鴉の身体に擦り付けながら、長い舌で鴉の顔を汚した。

口からだらだらと零れる唾液が鴉の顔を覆う。鴉は無表情だった。そのことが千歳に酷い苛立ちを覚えさせる。

「どうして、あなたはこれからわたしに喰われるのよ。脅えなさい、恐怖に顔を歪めなさいよ！」

「黒衣は意思を持つ、それゆえに私の指示を聞かぬことがある。黒衣は私を死なせないとするが、少々意地が悪い」

「何が言いたいのだよ！」

数秒の間を置いて千歳の口が開けられる。その口からは唾液に変わって血が落ちた。

鴉の身体から伸びた黒い幾本もの槍が千歳の身体を貫いていた。

糸から開放された鴉は素早く立ち上がった。

千歳の身体はすでに再生力を失いつつあり、身体全体から血が吹き出ている。それでも千歳はまだ動く。

「まだよ、まだわたしの核は生きているわ。もっと上手に突かなきゃ、わたしはやれないわよ」

「いや、私が止めを刺すまでもないようだ」

突然、千歳の顔が苦痛に歪む。鴉には聴こえていた　千歳の核に輝が入ったのを。千歳はもう長くない。

狂気の形相で千歳が鴉に襲い掛かろうとする。しかし、脚が動かない。

脚が枯れていく、身体が枯れていく。千歳の脚は灰色になって碎け散り、その灰色は身体全体を侵食しようとしている。

「嫌よ、まだ飲み足りないわ！」

すでに動けなくなつた千歳を見ようとせせず鴉は歩き出した。もう、鴉が何もしなくても千歳は消滅する。

歩き去る鴉の背中を見ながら千歳の怨念は増幅していく。

「わたしは生き続けるのよ」

下半身の蜘蛛の部分はすでに灰と化し、上半身についている両腕も灰と化した。

この場には千歳以外誰もいない。千歳がいくら助けを求めようと、彼女の消滅は決まつている、はずだつた。

「わたしは、わたしは支配者になる存在なのよ！」

地面で苦しみもがく千歳の前に、天から白い翼を持つ者が舞い降りた。

天から舞い降りた者の顔はとても冷たく美しかった。それはツエーン ルシエルであつた。

「余を裏切つたなりリスよ」

冷たく声に千歳は震えた。恐怖で口元が震える。

何も言えない千歳の身体を持ち上げたルシエルは、微かに笑つた。しかし、その笑みは悪魔の笑みだつた。

「なぜ アルファ を起動させた？ そんなにも貴女は辛抱のない女であつたのか。いや、余の前で猫を被つていた貴女ならば待てたはずだ。貴様が余を裏切ろうとしていたことなど、百も承知であつた」

「……………」

自分がルシエルに逆らえなかつた理由を改めて千歳は思い知らされた。千歳はルシエルの掌の上で踊らされていたに過ぎな

かったのだ。

ルシエルは自分の腕を千歳の前に差し出した。

「核は一度傷つくと元には戻らん。しかし、余の血ならば貴女を救えるが、余に救いを求めるか？ 憎むべき余に救いを求めてみるか？」

ルシエルの問いに千歳は消え入りそうな声で答えた。

「わたしは……墮^ラ天^{エル}者よ……どこまでも墮ちて……身も心も……

……あなたの奴隷にでも……なつてあげるわ」

それは屈辱であつた。しかし、千歳はルシエルの腕に被りついた。

ルシエルの血は千歳の喉を潤す。何と甘美な味がするのだろうか。

千歳は身も心の地に墮ち、ルシエルに屈服した。そして、いつの日か復讐することを胸の奥で誓つた。

疾走を続け鴉は アルファ の足元まで辿り着いたが、成す術がなかつた。相手は空を飛びながら黄金の羽を地面に撒き散らしている。空を飛ぶ相手にどうやって近づくか。

アルファ の飛ぶ進行方向に高いビルを見つけ、その方向へと鴉が先回りしようとしたその時、アルファ が突然地面に降り立った。

巨体が降り立ったことにより地面が縦に揺れ、その振動は近くにいた鴉の足を掬うほどであつた。

鴉はすぐさま アルファ 足に飛び乗つた。

聳え立つ塔のような脚に爪をかけながら、鴉は上を目指した。昇らなければならぬ、天に向かって。

アルファ はビルを障害物とも思わずに壊して進む。倒壊したビル片が雨のように降り注ぎ、砂煙の中に魔神の影が浮かぶ。

砂煙の中に浮かぶシルエツトが天に向かって吼えた。制御装置のない アルファ は本能のままに行動し、あるものを探していた。

アルファ は一度動きを止め、慎重に、建物や車などを壊さないように歩きはじめた。本能が感知した。探しものはすぐそこにいる。

巨大な頭がビルの合間を滑らかに縫い動き、緋色の眼球がそこにいた少女と目を合わせた。

ファリスは心の底から震え上がった。自分とあの魔神の目が合ってしまった。目を放そうにも放せず、そこに立ち尽くしてしまった。

緋色の瞳の奥はファリスだけを映し、他のものは一切映っていない。他のものは必要ない。

身動き一つできずにいるファリスに巨大な手が伸びる。その動きは決して乱暴なものではなく、美しい一輪の花を愛でるように、刈り取ってしまうように。

巨大な手がファリスに触れようとした瞬間、上空から黒い魔鳥が飛来し、ファリスを魔神の手から救い出した。

「私を追って来るとは、死を覚悟してのことか？」

「だって……」

だってもなにもなかった。迷惑をかけるのがわかっていて、本当に迷惑をかけた。ファリスは居た堪れなかった。

巨大な両手が風を切って動き、ファリスを掴もうとする。鴉はファリスを抱きかかえながら、アクロバティックを決めながら華麗に宙を舞い飛ぶ。

だが、鴉が天に足を向けた時、その脚が巨大な手によって鷲掴みにされた。宙吊りにされた鴉はまるで蝙蝠のように宙にぶらさがり、その腕にはファリスが抱きかかえられている。ファリスがいては、鴉は大きな動きが取れない。

鴉は腹筋に力を入れ、上体を上に向けると、片腕を硬質化させていた

ファリスは両手で顔を覆った。次の瞬間、ファリスの手の甲に生暖かい液体が迸った。

胸から下を失った鴉がファリスを抱えながら落下していく。黒衣から黒い触手が伸び、ビル屋上のフェンスに引っかかった。フェンスがガタンと揺れ、軋めき悲鳴をあげる。

黒い触手を使って鴉は振り子のように宙を舞う。フェンスが外れた。勢いがついた鴉はそのままビルの窓を殴り割り、ビルの中に飛び込んだ。

地面に落下したフェンスの反動で鴉の身体が窓の外へ引きずられそうになったが、爪を床に立てて、すぐに黒衣を元の形に戻した。

ファリスは鴉の腕から離れ、口をあんぐり開けながら呆然と

してしまった。その類には硝子片で切ったと思われる、一筋の紅い線が走っていた。

紅い線から流れ落ちる雫。鴉は唾を飲み、歯を食いしばった。ここ数日で鴉は極度の渇欲に襲われていた。多くの血を失い、核だけとなった身体を再生させなければならなかったこともあった。失われた下半身は血は止まってはいるが、再生していない。

「鴉、大丈夫！」

「死にはしない……だが、私から早く離れる、ひとりで逃げる」

「そんなことできないよ！」

「私を困らせないでくれ」

鴉の身体に異変が起きつつあった。身体が血を求め、変異がはじまろうとしていた。

身体を振るわせる鴉の横に跪いたファリスは、鴉の手を取ろうとした。しかし、ファリスの手は激しく撥ね退けられた。

「早く行け！ 私がファリスを喰う前に！」

ぞっとしたファリスは急いで立ち上がった。しかし、この場を離れることはできなかった。

ファリスは急に窓の方に顔を向ける。

「きゃーっ！」

窓の外から巨大な手が室内に入って来た。ファリスの身体が掴まれる。鴉は動こうとしたが、下半身がまだ再生していない。再生のスピードが明らかに遅くなっていた。

鴉は腕の力だけで蛙のように アルファ の腕に飛びつこうとしたが、それも失敗に終わった。

ファリスが連れ攫われた後に、鴉は唇を噛み締め、罵った。

「なぜ、私の言うことを聞かなかった、そこまでして私を苦しめるのか“闇”よ！」

ファリスが付いて来たことにはない。自身にでもない。鴉は自分の命令を聞かなかった“黒衣”に罵った。

下半身を失った鴉は地面に倒れながら、地面を殴り碎いた。その瞳は緋色に染まっている。

黒衣は鴉の命令を聞かなかった。鴉はファリスが連れ攫われた時に、アルファ の手に向かって黒衣を伸ばそうとした。

その命令を黒衣は無視したのだ。それで已む無く腕の力だけでアルファ に飛び掛かるうとしたが、それも失敗に終わった。

窓の外で アルファ が高らかに吼えた。

ビルの中に再び巨大な手が伸びる。それは鴉を鷲掴みにしてビルの外に引きずり出した。

緋色の目が互いを見据える。

アルファ は鴉を捕まえたまま、上空へと羽ばたいた。

アルファ は M の巫女 を手に入れたのだ。

巨大な口から空気の波が発せられ、鴉の髪を激しく靡かせた。《わかるか鴉、余は意識を取り戻した。これで地上は余の支配

下に置かれたも同じだ》

「ルシエか？」

《その名はもうない。ここにいるのは魔神ゾルテだ。そこで見

ているがいい、神となった余の力を！」

翼を広げた アルファ から、黄金の槍が、地獄の業火が地面に降り注ぎ、死が地上を覆う。

アルファ の視線にジェット戦闘機が入った。

《無力なものよ》

ジェット機から発さされたミサイルが アルファ に直撃する。しかし、傷一つ付かず、少し機体が黒ずんだだけであった。大きく広げられた黄金の翼から、ミサイルのように羽が飛び、ジェット機は空中爆発を起こして散った。ジェット機程度でアルファ を破壊することは不可能であった。

ジェット機は次々と破壊されていき、やがて残った数機のジェット機は逃げるようにして旋回して行った。

アルファ の瞳が再び鴉を掴んでいる手に戻された時、すでにそこには鴉の姿はなかった。下半身の再生を終えた鴉はアルファ の機体を飛び交い、上を目指した。

鴉はどこからか アルファ の中に入れないかと考え、見つけたのが巨大に開けた口であった。

口に並び尖った牙の一つに手を掛け、鴉は闇の中へと飛び込んだ。

アルファ の中はまさに体内と言えた。その部屋は壁も床も天井も、脂肪のようなもので囲まれており、脈打ち動いている。

肉の壁とも言えるその中に、上半身だけを出して誰かが埋も

れている。それはファリスだった。

ファリスの意識はないようで、深く項垂れている。Mの巫女となつたファリスはまだ生きていた。

鴉がファリスに近づこうとすると、彼の背後で複数の気配がした。どれもこれも冥府の風を纏う気配。それも複数でありながら単体だった。

後ろを振り向いた鴉の目に飛び込んできたものは、何人にも増幅したゾルテであつた。ゾルテが地面から生えているという表現が適切だろう。

「余の邪魔をする気が、鴉よ？」

「そういうことになるだろう」

「ならば相手をせねばならぬか」

鴉を取り囲んだゾルテたちがいつせいに襲い掛かつて来る。

左右前後から襲い掛かつて来る敵を、鴉は身体を回転させて黒衣を大鎌のように振るつた。

斬り裂かれるゾルテたち。肉片となつたゾルテは床に吸収される。鴉が危険を察知した時はすでに遅かつた。全てがゾルテナのだ。

突然、鴉の脚が掴まれた。下を見ると地面から伸びた手が鴉を捕らえている。

「この程度か鴉という男は！」

「……まだだ」

無理やり脚を振り上げてゾルテの手から開放された鴉は走つた。

鴉を追うように地面から次々と手が伸びる。壁からも天井からも手が伸びる。鴉は黒衣と爪を使って切り裂いていくが切がない。

部屋を覆う肉が芋虫のように動き出し一部に集約していく。やがてそれはひとりのゾルテをつくり出し、その腕にはフアリスが抱かれていた。

「あのままではどちらも切がない。余が直々に相手をしよう」
そこは綺麗な花畑の真ん中であった。空に広がる青い空、白い雲、詠う風の音色。

鴉は辺りを見回してゾルテに問うた。

「どこだここは？」

「余の精神世界だ。貴公は アルファ の体内に入ったその時に余の精神界に迷い込んだのだ」

「精神が死ねば魂も死ぬ」

「そうだ、もし貴公がここで死ねば、現実世界に残して来た肉体は死ぬ。余も然りだ」

「お前の精神は穏やかなのだな」

この世界のことを言っている。美しい花々が咲き誇るこの場所に戦いは不釣り合いだった。

真剣な顔をしている鴉を見てゾルテが微笑う。

「これが余の望む世界だ」

「では、なぜ地上を支配する？ なぜ血を流すのだ？」

「天に愛想が尽きた」

「それだけか？」

「それだけだ」

天人には寿命がない。永遠に続く時間を持ち合わせているにも関わらず、樂園での日々は変化のない生活だった。何をするのにも十分な時間があるに関わらず、変化を恐れて暮らしている。

ゾルテは深く息を吐いた。

「地上は面白い。常に変化し続けている。地人は限られた時間の中で生きるからこそ、変化の速さも天人に比べて早いのだろう。しかし余は平穩が、樂園が恋しくも感じる」

「だから、この世界が……」

不変の長閑な風景。そして、ゾルテの表情は戦いを忘れさせるほど安らかだった。

「余は天に愛想が尽きたと言いながら、天に思いを馳せている。可笑しな話だが、地上になぜ堕ちたのか、余にもわからん。本当は樂園で永遠に過ごすはずだった」

「それなのに堕ちたか、確かに可笑しな話だ」

「誰かに呼ばれたような気がした……かもしれない。もう、過ぎたことだ。一度堕ちてしまえば樂園には還れぬ」

ゾルテは地上を支配するために堕ちた。しかし、本当にそんなことがしたかったのか、ゾルテにはわからなかった。

揺れ動くゾルテの心に鴉が言葉を突き付けた。

「地上で静かに暮らすことはできないのか？」

「できぬな。地上を支配する気はまだ残っている」

「それはお前の意思か？」

「さあな。しかし、余には他にすることがない」

「そうか」

二人はその場に立ち尽くした。沈黙の中で時間だけが過ぎ去っていく。

地上に堕ちて間もないゾルテは、この時間を早く感じた。

地上に堕ちて多くのものを見てきた鴉は、この時間を永く感じた。

強い風が吹き、花びらが空に舞い上がった時、ゾルテの方が口を開いた。

「はじめよう」

鴉は何も言わなかった。答えなくとも時間は流れる。

戦いははじまった。

漆黒の翼を大きく広げたゾルテが掌に魔導を溜めた。

「受けてみよ鴉！」

放たれた光の弾が地面を抉りながら鴉に向かって飛ぶ。

鴉は避けようとせず、地面を踏みつける足に力を入れた。

当たる。

光弾の前に黒い壁が立ちはだかる。それは鴉の黒衣だ。

黒衣によって弾かれた光弾が空に向かって輝く尾を引いた。

ゾルテは嬉しそうな顔をしていた。

「輝く翼がなくとも、貴公はその闇で戦うか」

「そうだ、この闇とともに生きる」

「しかし、今の貴公では余に勝つことはできん。十分な聖水を貰っていない貴公は勝てない」

「いつかは必ず終わりが来る」

「何のだ？」

鴉は答えずゾルテに向かって走り出した。

黒衣が大きく風に揺られ、鴉は抉られた地面の上をゾルテに向かつて一直線に突き進んだ。

「私も前も、全てのものにだ！」

大きく振るった鴉の爪が ソード と化したゾルテの腕に受け止められた。すぐさまもう片方の手を爪と化し、鴉はゾルテに爪を向ける。しかし、それは二本目の ソード に受け止められた。

ゾルテの蹴りが鴉の腹に入る。一步下がった鴉を二本の ソード が串刺しにしようとする。鴉はそれを華麗に躲して、回し蹴りを放った。

鴉の足が突如空で喪失した。脚から鮮血が噴出すが鴉は構わず、片足で飛び上がり、その脚でゾルテの顔面に蹴りを喰らわした。

地面に着地した鴉の脚はすでに二本ある。しかし、この再生は鴉に極度の疲労を与えた。血が足りない。

鴉は地面に片手を付いたゾルテの胸に、下から抉るように爪を突き刺した。ゾルテは笑った。

「そこにはない！」

自分の身体に突き刺さっている腕を引き抜き、ゾルテはそのまま鴉の身体を遠く後方に投げ飛ばした。

宙で回転し体制を整えながら鴉は地面に乱れなく着地した。

鴉の着地した足元のすぐそこにファリスがいた。

地面に横たわるファリスからは息が聴こえない。仮死状態のような状態に置かれているのだ。ファリスの精神は夢幻の世界に囚われている。

ゾルテが声を張り上げた。

「鴉よ、その娘の聖水を飲むのだ！」

「断る」

「今の貴公では余の相手にならぬと言うておろう」

「それでも断る」

頑なな鴉の言葉を聞くや、ゾルテは拳を握り締め震えた。

「なぜ拒むのだ！ 地人は天人の糧として創られた存在なのだ

ぞ！」

「果たしてそうなのか？」

この言葉にゾルテは愕然とさせられた。恐れていた言葉が鴉の口から発せられた。想つていても誰にも口にできなかつた言葉だ。ゾルテは己の考えを否定した。

「地人は糧である。万物の頂点に立つ者は天人なのだ！」

「そうだな、今は。神は万物の法則から外れた存在であると云われるが、神は全能ではない。その神は天人を創り、次に地人を代わりとして創った。この意味がわかるか？」

「神などいない！」

「いいや、全能なる神ならば私も信じないが、神が己に“似せて”創ったと云われる天人や地人のような神であれば信じる」

ゾルテは花畑の上に寝転がるファリスを見て震えた。第三の

ヒトと呼ばれる新人類ニコユエルがそこにいるのだ。その娘の力を使ってアルファを制御しているのは紛れもない事実だった。

Mの巫女をアルファに取り込むまで、ゾルテの精神は完全に吞まれていた。それがMの巫女の出現により、ゾルテは今ここで存在を保つていられる。

「鴉、その娘の聖水エイリスを呑め、さすれば全てが明らかになる。その娘が新人類ニコユエルであるのならば、エスとならずに済むはずだ！」

「断る」

「怖いのか、新人類ニコユエルの出現を恐れているのか！」

「それはお前だ。不変を望む楽園アウエの民よ、この地上は天人ソエルの住む場所ではない。そして、墮天者ラエルの住む場所でもない。いつかは終わりが必ず来る」

墮天者ラエルとなった天人ソエルは地上ノリスに墮ちて、そこで多くの終わりを
見ることになる。楽園アウエでは己の存在が消えることなど考えもし
なかつたのに、長い時間を地上ノリスで過ごすことにより、己にも終
わりが来るのではないかと脅える者の中には出てくる。そうい
う死の恐怖に苛まれた墮天者ラエルは社会を乱しヴァーツに狩られる
運命にある。地上ノリスは不変ではないのだ。

「終わらぬ、天人ソエルは永遠を生きる民だ、滅びはせぬ」

「終わりが安らかであることを祈るのみだ」

「まだ言うか貴様は！ 滅びぬぞ、滅びぬ、天人ソエルも余もだ！」
花畑が燃える。美しく儂く、一面が真っ赤に染まっていく。
高笑いをするゾルテの身体をも炎は包む。

ひらひらと火の粉のように舞い上がる炎の花びらは、光を閉

ざした黒い空に吸い込まれて逝く。この世界が終わる。

天の闇が急速に墮ちてくる。そして、闇は全てを呑み込んだ。次の瞬間には鴉は灰色の壁に囲まれた広い部屋にいた。その部屋の奥には十字架に磔にされたファリスの姿と、それを守るようにして立つゾルテの姿があった。

「余は眠りから覚めてしまった。即ち、アルファは動きを止めた。鉄屑となったアルファを落とすのは容易い」

アルファが激しく揺れて、壁が地面となり鴉は壁に向かって落下した。空を飛んでいたアルファが地面に落ちたに違いない。

鴉の上からゾルテがソードを構えて落下して来る。

「最後の勝負だ鴉！」

ゾルテはこの一刀に賭けた。鴉もまたそれを感じ取った。

二人は一瞬という時の流れをとても永いものに感じた。

ゾルテが来る。鴉が爪を構える。二人の視線が絡み合う。

激しくも儂い一瞬。

煌く閃光が世界を走る。

爪がソードが、突き刺さった。ゾルテのソードが鴉の身体を貫き、鴉の爪もまたゾルテの身体を貫いていた。

同時に爪とソードは引き抜かれた。そして、胸を押さえ倒れたのは鴉であった。

地面に気高く立つゾルテ。その翼は白く美しく輝いていた。

「先に行くのは余のようだ。しかし、貴公の核は傷つけた相打ちだ」

「傷ついた核は治らん。すぐに後を追うことになるだろう」

ゾルテの身体は死に侵食されていく。色褪せる身体は崩れ、灰になり、塵となった。

膝を突き立ち上がった鴉は頭上を見上げた。礫にされていたファリスの身体が開放され、鴉に向かって落下して来る。

黒衣が大きく広がり、ファリスは柔らかなその上に包まれながら着地した。

ファリスを抱きかかえる鴉。すると、ファリスはゆっくりと目を開けた。

しばらく見詰め合っていた二人だが、やがてファリスが口を開く。

「やっぱり助けてくれたんだね。全部見てたよ、夢の中で」

鴉は何も言わなかった。その代わりに、鴉が微笑みを浮かべた。とても優しい微笑だった。そして、鴉はファリスを抱きかかえながら床に崩れた。

「どうしたの鴉！」

「永かつた生命じかんが終わりを告げる」

鴉の胸に空いた穴は塞がっていなかった。血が止め処なく流れ出る。

「死んじゃヤダよ、あたしを残して逝くなんてズルイ。だったら、あたしのことなんて助けてくれなくてよかったのに……そうすれば、こんなの見なくて済んだのに……」

鴉の身体が灰になって崩れていく。手足の先が徐々に崩れ、緩やかに緩やかに死が近づく。ファリスにとってこんなにも辛

い別れはなかった。目の前の人が逝ってしまふのに、それを長い時間見ていなくてはいけないなんて辛すぎる。

「ばかばかばか！ 死んだら一生呪ってやるからね。助けられたお礼なんて言っただけだからね、言っただけじゃ生きてよ……」

泣ぐむファリスは辺りを見回した。アルファ が揺れている。アルファ もまた逝こうとしているのだ。

「私もこの兵器も、人間の世界には不要なものだ」

鴉の脚も腕もすでに灰と化していた。それなのに鴉は安からか顔をしている。それがファリスは気に入らなかった。

「最新みたいな顔しないでよ、鴉は不死身のヒーローなんだから、いつもであたしがピンチの時は駆けつけて来てくれるの……」

「鴉がいないと、あたし……」

ファリスははっとして口を開けた。彼女は夢の中で全てを見ていた。鴉とゾルテの戦い。そして、二人の会話も。

「もしかしたら、あたしの血を飲んだら助かるかもしれない！」

灰に成ろうとしていた鴉は酷い渇きに襲われていた。彼はそれを必死に抑えていた。そうでなければファリスを襲ってしまふ。

「私の死を見たくないのなら、早く立ち去れ！」

いつもは静かな口調の鴉が発した激しい口調であった。だが、ファリスは鴉の瞳を睨みつけて一歩も引かない、それどころか噛み付くように言葉を発する。

「あたしの血を飲んだら助かるんでしょ、絶対そうなんですよ？ だから、そうやって怒ったんでしょ？」

「……………」

「そうやって黙るなんて、鴉ってわかり易いよ」

「ソエル地人の血を飲んだところで、私は助からない。しかし、第三のヒトならば可能性があるかもしれぬ」

「だったら、飲んでよ、あたしって第三のヒトなんでしょ？」

「ファリスは鴉の胴体を抱きかかえ、鴉の頭を自分の首元に持つて行った。手も足もない鴉は抵抗することもできなかった。いや、抵抗しなかった。」

「人間は人間として限られた時間の中に生きていくからこそ、私たちソエル天人の持つていないものを多く持つているのだと思う」

「御託はいいから早く飲んで」

鴉の口は震えていた。渇欲は理性ではどうにもならない部分がある。そして、今の鴉は消滅に直面している状態にある。それでも鴉は歯を食いしばっていた。

身体を振るわせる鴉の振動がファリスにも伝わって来る。

鴉の口の奥に牙が光った。しかし、歯が砕けんばかりに口は開かれた。

ファリスが小さく呟いた。

「飲んでいいよ」

鴉の理性は限界にあつた。そして、ついに鴉はファリスの首筋に牙を立ててしまった。

ファリスは口を開け、目を見開き、自分の中からいろいろな

ものが吸われていくのを感じた。痛みはなく、身体が痺れたような感覚がするが、それも嫌ではなかった。

鴉の中に生命が流れ込んで来る。渴きが癒え、腕が、脚が、再生していく。

やがて、鴉はゆっくりとファリスの首筋から頭を離した。

ファリスは喜び、鴉の身体を強く抱きしめると頬にキスをした。

「ほら、助かったじゃん。鴉が意地を張んなきゃ、すぐに済んだのに」

笑い顔のファリスに対して、鴉の表情はもの哀しげな表情をしていた。

「永い時を生きるということが、いかに辛いことか……私は新たな罪を犯してしまった」

「何言ってるの？ 鴉だって生きてきたんだから、あたしだって平気。だって、これからあたしは絶対鴉の側を離れないからね」

アルファ が崩れる。アルファ の機体を構成していた物質が、灰と化していく。

街に巨大な炎を降り注ぎながら飛んでいた アルファ が急に落下し、ビル街を破壊して大爆発を起こした。

吹き荒れていた爆風が収まり、夏凜は再び アルファ に向かって走り出した。あの中にファリスが捕らえられている。生きているかどうかはわからないが、行かなければ夏凜の気は治

まらなかつた

「全くアタシも焼きが回つたなあ」

やがて アルファ の前まで辿り着くと、夏凜はそこに立ち尽くしてしまつた。

全く動く気配を見せない アルファ 。身体を走っていた紋様も今では輝きを失っている。

「中で何があつたんだか……？」

夏凜の目の前で アルファ がガタンと揺れた。揺れたと言ふより、崩れた。

アルファ の身体が崩れていくのを夏凜は目の当たりにした。それも壊れていくのではない、機体が灰と化していくのだ。時間をかけて灰の山が形成され、それは一瞬にして空に舞い上がった。地上に灰が降り注ぐ。それはまるで灰色の雪であつた。

舞い散る灰の中から二人の人影が出てきたのを夏凜はしかと見た。それはまさしく、ファリスと鴉であつた。

思わずガッツポーズをした夏凜は笑顔で二人の元へ駆け寄つた。

ファリスも夏凜に気が付いたらしく駆け寄つて来る。

「イエーイ、夏凜！ 生きて還つて来たよ」

ピースをしたファリスを夏凜は抱きしめた。

「まあ、死ぬわけはないと思つてたけど、よかつた。でも、本当に生きて嬉しいのは鴉っ！ あれ？」

夏凜は辺りを見回した。すぐにファリスも辺りを見回す。鴉

がない。

「ずっと傍にいてやるって言ったのにいゝ」

顔膨らませたファリスは地面を蹴飛ばした。そして、ため息をついて笑った。

「まあ、時間なんていくらでもあるっばいから、いつでも探しに行けるか」

ファリスの言葉に夏凜の顔が固まった。

「……もしかして、ファリス？」

「うん、そういうこと」

「ズルイ、ファリスだけズルイ！」

「そういう問題じゃないでしょ」

「そーゆー問題」

呆れた顔をするファリスは夏凜の腕に自分の腕を回して歩き出した。

「早く帰ろう、あたしたちの家に」

「家はまだ探してない」

「そっか」

「それにあくまでアタシが主で、アナタは使用人だからね。死ぬまでこき使ってやる」

「夏凜の方が先に死ぬから平気だもん」

灰の雪が降る中、鴉は二人を見守っていた。

鴉は背負った罪を償うために永遠にファリスを見守り続けるに違いなかった。

